

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第198集

大平遺跡Ⅲ

平成16・17年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第198集

大平遺跡Ⅲ

平成16・17年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

静岡県東部に位置する沼津・三島・駿東地域は、古くから交通の要衝として栄えてきた。また、北は富士・愛鷹山麓、東は箱根外輪山、南は伊豆山系を望み、黄瀬川、狩野川、柿田川湧水に代表される多くの自然水系にも恵まれ、風光明媚な自然を有している。そのため、本地域には、季節を問わず多くの観光客が訪れている。しかしながら、上述の自然環境は、交通機関の開発、発展に地理的な制約を加えるとともに、国道1号線及び国道246号線といった交通量が非常に多い主要幹線道路を有することから、本地域は、長年、慢性的な交通渋滞に悩まされてきた。

東駿河湾環状道路は、こうした慢性的な交通渋滞を緩和する目的で計画され、沼津市岡宮地区から愛鷹山東麓、長泉町、箱根西麓を経由して、田方郡函南町平井に至る高規格幹線道路である。

また、この地域は、古くから埋蔵文化財包蔵地としても知られており、道路建設予定地内にも多くの遺跡が立地していることから、これまでに数多くの発掘調査が実施してきた。

大平遺跡においても、当静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成7年度・8年度に第Ⅰ期現地調査、平成12年度に第Ⅱ期現地調査を実施しており、それぞれ『大平遺跡』『大平遺跡Ⅱ』として報告している。

過去2回の調査においては、中世後半から近世前半の集石墓を中心とした墓が検出され、また、前回の調査では、弥生時代前期末の遺物を伴う住居1軒を検出、これは静岡県内における初の検出例となり大きな成果を収めることとなった。

今回の第Ⅲ期現地調査は、東駿河湾環状道路建設工事に伴う大平遺跡の発掘調査としては最後の調査を飾るものである。

大平遺跡の発掘調査で得られた貴重な文化財が、今後、研究、教育等の幅広い分野で活用されると同時に、文化財に対する理解を深める一助となることを期待するばかりである。

最後に、現地調査及び資料整理、本書の作成にあたっては、国土交通省をはじめとした関係機関各位に多大なるご援助、ご理解を得ている。この場を借りて厚く御礼申し上げる次第である。また、調査にご理解をいただいた地元の皆様、現地での発掘作業、地道な資料整理作業にあたられた方々に、この機会に厚く御礼申し上げたい。

2009年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 清水 哲

例　　言

- 1 本書は静岡県駿東郡長泉町南一色字大36-1他に所在する大平遺跡の第III期発掘調査報告書である。
- 2 現地調査は平成16年度、平成17年度、東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘業務として、国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成16年9月から平成17年5月にかけて実施した。
- 3 資料整理は平成19年9月から平成20年3月にかけて実施した。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

平成16年度　現地調査

所長 斎藤 忠 岩所長 飯田英夫 常務理事兼総務部長 平松公夫
総務部次長兼総務課長 鈴木英巳 会計係長 野島尚紀
調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長 草野克巳
調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三
主任調査研究員 中鉢賢治 調査研究員 片桐英生 井鍋善之
調査補助員 福島正史 大島秀俊（シン技術コンサル）

平成17年度　現地調査

所長 斎藤 忠 常務理事兼総務部長 平松公夫
総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎 会計係長 野島尚紀
調査研究部長 石川素久 調査研究部次長 東野克巳
調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三
主任調査研究員 中鉢賢治 調査研究員 片桐英生 技術員 水上綾子

平成19年度　資料整理

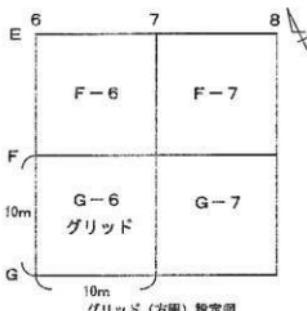
所長 斎藤 忠 常務理事兼事務局長 清水 哲
事務局次長兼総務課長 大場正夫 事務局次長兼調査課長 及川 司
事務局次長 佐野五十三 稲葉保幸 事業担当 望月高史
調査課東部調査一係長 中鉢賢治 調査研究員 日吉高幸 技術員 木村忠義

- 5 現地での基準点測量を株式会社コアエンジニアリング、空中写真測量及び撮影を株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 6 本書の執筆は主に木村が行い、中鉢・日吉が加筆・修正を行った。
- 7 本書掲載の遺物写真は、当研究所本部で杉山すず代技術作業員が撮影した。
- 8 銭貨の分類は、当研究所岩名建太郎調査研究員が行った。
- 9 石材鑑定は、当研究所森嶋富士夫技術員が行った。

- 10 本書で使用した地図は、国土地理院発刊1:25,000地形図等を複写して加筆・加工した。
- 11 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。
- 12 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

凡 例

- 1 大平遺跡は、過去2回の現地調査が実施されており、今回は3回目にあたる。調査区の設定については、過去2回の調査に準じ、西側の調査区を1-1区、東側の調査区を2-2区とした。
- 2 平成8年度の第Ⅰ期現地調査において、建設予定道路のセンターラインを中心軸(Fライン)として10m×10mのグリッド(方眼)を設定した。
そのため、縦方向は、真北から左回りに333° 44' 52"回転している。今回の調査でも同様のグリッドを設定し、北西角(A, 1)を原点に南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を付した。
日本測地系(改正前)を使用し、平面直角座標第Ⅷ系のX=-94421.543 Y=36172.898を原点(A, 1)とし、Gグリッド南西角の交点をグリッド名とした。(右図)



- 3 遺物の取り上げは光波測距器を用い、(株)シン技術コンサルの「遺跡管理システム」上でデジタルデータとして保存した。遺物番号は三桁の数字を用い、土器、石器については通し番号とし、金属製品については別に番号を付した。
- 4 遺物・遺構の観察表、計測表において、推定値、復元値には()を付して表記した。
- 5 現地調査における土層の観察表及び遺物の色調は、新版『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997年版)に準拠した。
- 6 遺物の重量計測には、A&D Co., LTDのEK1200Aを使用した。
- 7 掘出の縮尺は、各図に示したスケールの通りである。
- 8 本書で使用する遺物・遺構の標語・略語は以下の通りである。

遺物	P = 土器・陶磁器	R = 磬
	C = 炭化物	S = 石器
遺構他	S F = 土坑	S D = 漏
	S R = 旧河川	S X = 性格不明遺構
石材	An (Py) = 舞石安山岩	T R = トレンチ
黒曜石产地	SWHD = 諏訪星ヶ台群	G r = グリッド
		L T = 火山凝灰岩
		Rhy = 流紋岩
		S l = 粘板岩

|————| 繁りの範囲 繋ぎの範囲

目 次

序／例言／凡例

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	4
第3節 調査の経過	5

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 土層について	10
第2節 1-1区の遺構と遺物について	
1 中世から近世の遺構	12
(1) III層検出の遺構	12
(2) V層検出の遺構	14
(3) VII層検出の遺構	22
2 中世から近世の遺物	
(1) 中世の遺物	29
(2) 近世の遺物	30
(3) 金属製品・石製品	30
第3節 2-2区の遺構と遺物について	
1 弥生時代の遺構と遺物	
(1) 弥生時代の遺構	36
(2) 弥生時代の遺物	36
2 中世から近世の遺構	
(1) IV層検出の遺構	42
(2) V層検出の遺構	42
(3) VII層検出の遺構	44
3 中世から近世の遺物	
(1) 中世の遺物	51
(2) 近世の遺物	54
(3) 金属製品・石製品	54
第IV章 まとめ	
第1節 弥生時代の遺構・遺物について	59
第2節 大半遺跡における中世墓の形態と分布について	64

写真図版

報告書抄録

写 真 図 版

図版1	調査区全景（合成写真）			
図版2	1	1-1区 調査区全景（南より）	2	S F101検出状況（東より）
図版3	1	S F105検出状況（北より）	2	S F104検出状況（北より）
図版4	1	S F108検出状況（北東より）	2	S F106検出状況（北より）
	4	S F114検出状況（西より）	5	S F222検出状況（南より）
図版5	1	S F223検出状況（東南より）	2	S F222・S F223完掘状況（東より）
	3	S F201・S F202・S F234・S F235完掘状況（南東より）	4	S P212・S P213完掘状況（東より）
	5	S X204完掘状況（北より）		
図版6	1	2-2区 調査区全景（西より）	2	S F285完掘状況（南より）
	4	S F292完掘状況（北より）	5	S F293完掘状況（南西より）
図版7	1	S F284完掘状況（南より）	2	S F298完掘状況（南より）
	4	S F290完掘状況（南西より）	5	S F301完掘状況（南東より）
	7	S P217完掘状況（南東より）	8	S P222完掘状況（南より）
図版8	1	弥生土器等 遺物出土状況（1）（東より）	2	弥生土器等 遺物出土状況（2）（北より）
図版9	1	1-1区 古瀬戸	2	1-1区 古瀬戸壠跡
	4	1-1区 志戸呂	5	1-1区 羽笠・内耳鉢・瓦質陶器
図版10	1	1-1区 常滑	2	1-1区 貿易陶磁器
図版11	1	1-1区 古瀬戸縄輪小皿	2	1-1区 志戸呂縄輪小皿
	4	1-1区 灯明皿	5	1-1区 近世遺物
	7	1-1区 遺構出土遺物		
図版12	1	2-2区 弥生土器（1）	2	2-2区 弥生土器（2）
	4	2-2区 磨盤	5	2-2区 石鎌・楔形石器
図版13	1	2-2区 古瀬戸	2	2-2区 古瀬戸壠跡
	4	2-2区 貿易陶磁器	5	2-2区 羽笠・内耳鉢・瓦質陶器
図版14	1	2-2区 常滑	2	2-2区 かわらけ（1）
	4	2-2区 かわらけ（3）	5	2-2区 かわらけ（4）
	7	2-2区 金屬製品		
図版15	1	2-2区 S R03出土遺物（1）	2	2-2区 S R03出土遺物（2）
図版16	1	2-2区 S R04・S R05出土遺物	2	2-2区 遺構出土遺物（S F・S P）

挿 表 目 次

表1	東駿河湾窓状道路周辺遺跡一覧表		3	表13	中世出土遺物一覧表		35
表2	第Ⅲ期現地調査工程表		5	表14	弥生時代出土遺物観察表		41
表3	資料整理工程表		5	表15	2-2区 IV・V層土坑（S F） ・窓状遺構（S D）計測表		42
表4	周辺遺跡一覧表		9	表16	2-2区 VII層 旧河川（S R）・窓状遺構（S D） ・土坑（S F）計測表		49
表5	1-1区 III層 窓状遺構（S D）計測表		12	表17	2-2区 VII層 小穴（S P）計測表		50
表6	1-1区 V層 上坑（S F）計測表		20	表18	2-2区 出土遺物観察表		56
表7	1-1区 V層 小穴（S P）計測表		21	表19	2-2区 中世出土遺物一覧表		57
表8	1-1区 VII層 旧河川（S R）計測表		22	表20	黒船石原產地推定分析結果		63
表9	1-1区 VII層 土坑（S F）計測表		26	表21	土坑集計表		68
表10	1-1区 VII層 小穴（S P）計測表		27	表22	大平遺跡 土坑一覧表（第Ⅰ期・第Ⅱ期）		70
表11	1-1区 VII層 不明遺構（S X）計測表		28				
表12	1-1区 出土遺物観察表		34				

挿 図 目 次

図1	静岡県の位置図	1
図2	東駿河湾路線配置図	2
図3	大平遺跡調査区配置図	4
図4	長泉町位置図	6
図5	周辺地形分類図	7
図6	周辺遺跡分布図	9
図7	土層柱状図	11
図8	1-1区 溝状遺構実測図 (S D001)	12
図9	1-1区 III層 遺構分布図	13
図10	1-1区 V層 遺構分布図	16
図11	1-1区 V層 土坑実測図 (1) (S F101・S F105・S F102・S F113)	17
図12	1-1区 V層 土坑実測図 (2) (S F103・S F106・S F114)	18
図13	1-1区 V層 土坑実測図 (3) (S F104・S F108)	19
図14	1-1区 V層 土坑実測図 (4)	20
	(S F119・S F118・S F124・S F126・S F107・S F111・S F116・S F127)	
図15	1-1区 V層 小穴実測図 (S P101・S P102・S P103・S P104・S P105・S P106)	21
図16	1-1区 VII層 遺構分布図	23
図17	1-1区 VII層 土坑実測図 (1) (S F222・S F223・S F224)	24
図18	1-1区 VII層 土坑実測図 (2)	25
	(S F260・S F272・S F249・S F267・S F250・S F210・S F244・S F282・ S F226・S F202・S F201・S F232・S F234・S F205・S F206・S F213・S F259)	
図19	1-1区 VII層 小穴実測図	27
	(S P201・S P202・S P203・S P204・S P205・S P206・S P207・S P208・ S P210・S P211・S P212・S P213)	
図20	1-1区 VII層 不明遺構実測図 (S X202・S X204)	28
図21	1-1区 出土遺物 (1) 濑戸美濃製品・志戸呂製品・貿易陶磁器	31
図22	1-1区 出土遺物 (2) 常滑製品・羽釜・内耳鍋・かわらけ・近世陶磁器	32
図23	1-1区 出土遺物 (3) 金屬製品・石製品	33
図24	2-2区 VII層 全体図	37
図25	2-2区 VII層 遺物出土状況図	38
図26	2-2区 出土遺物 (1) 有生土器	39
図27	2-2区 出土遺物 (2) 石器	40
図28	2-2区 IV・V層 溝状遺構・土坑実測図 (S D102・S F138・S F139)	42
図29	2-2区 V層 遺構分布図	43
図30	2-2区 VII層 遺構分布図	45
図31	2-2区 VII層 旧河川実測図 (1) (S R03・S R04)	46
図32	2-2区 VII層 旧河川実測図 (2) (S R05)	47
図33	2-2区 VII層 土坑実測図 (1)	48
	(S F284・S F285・S F286・S F289・S F290・S F291・S F292・S F293・ S F294・S F295・S F296・S P221・S F297・S P228・S P219)	
図34	2-2区 VII層 土坑実測図 (2)	49
	(S F302・S F288・S F287・S F299・S F300・S F301・S F298)	
図35	2-2区 VII層 小穴実測図	50
	(S P218・S P220・S P227・S P222・S P225・S P217・S P224・S P226・S P216)	
図36	2-2区 出土遺物 (1) 濑戸美濃製品	52
図37	2-2区 出土遺物 (2)	53
	瀬戸美濃製品・志戸呂製品・貿易陶磁器・常滑製品・瓦質陶器・かわらけ	
図38	2-2区 出土遺物 (3) 近世陶磁器・金屬製品・石製品	55
図39	弥生時代 遺物出土状況	62
図40	大平遺跡検出の土坑の形態	68
図41	大平遺跡 土坑分布図	73・74

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

静岡県の東側に位置する三島市・沼津市を中心とした地域（図1）は、富士・愛鷹山麓、箱根外輪山、伊豆山系など、北、東、南の三方を山々に囲まれる。それらが造り出す緩やかな傾斜地と、豊かな地下水脈による風光明媚な自然環境は、四季折々に様々な表情を見せる。古くから富士山、箱根、伊豆方面への観光の拠点としても知られる本地域には、季節を問わず多くの人々が訪れている。

東海道本線、東海道新幹線、国道1号線、国道246号線が通る本地域は、東海地方と関東地方を結ぶ交通の要衝であると同時に、農業・水産業といった都心の生活を支える産業の要衝としても重要な役割を担っている。また、都心から約1時間という立地条件と、富士山麓の豊富な地下水源という自然条件を求めて企業進出が盛んである。都心への通勤圏内ということも相俟って、急速な発展を伴い、交通量が著しく增加了。

しかし、上述の自然環境は、交通機関の発展に地理的制約を加えていたために、主要幹線道路は、長年に渡り、慢性的な交通渋滞に悩まされてきた。

こうした慢性的な交通渋滞の緩和を目的として計画されたのが、沼津市から下田市を結ぶ伊豆縦貫自動車道である。このうち、沼津市岡宮から長泉町、三島市大場を通り、函南町平井を結ぶ約15kmの自動車専用道路が東駿河湾環状道路である。

東駿河湾環状道路建設に際して、路線予定地域内に埋蔵文化財の所在確認のための調査が実施されることになった。まず、平成2年に関係各市町村教育委員会による遺跡及び遺跡の可能性のある地点のリストアップを受けて、静岡県教育委員会文化課、各市町村教育委員会、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の3者による査定が行われた。その結果、約40カ所が遺跡の可能性が高い場所として報告された（図2）。この報告を受け、指導機関静岡県教育委員会文化課、調査機関財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制で、記録保存を目的とした発掘調査を開始した。

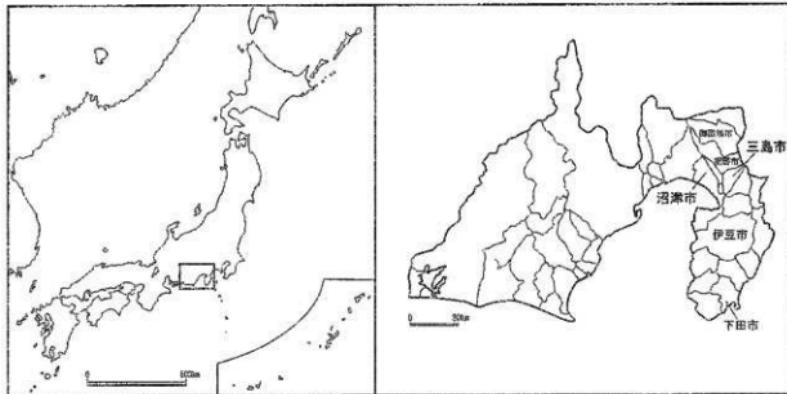


図1 静岡県の位置図

大平遺跡の調査は、委託者である旧建設省中部地方建設局沼津工事事務所（現国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所）、静岡県教育委員会文化課、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の3者の協議の結果、買収完了地から調査を先行して実施することとなった。まず、平成7年9月から11月にかけて、遺跡の範囲などを確認するための調査を行った。そして、同年11月から平成8年12月にかけて第Ⅰ期現地調査を行い、平成9年4月から平成10年1月まで資料整理を実施した。また、平成12年4月から6月にかけて第Ⅱ期現地調査、平成13年4月から6月まで資料整理を行い、それぞれ『大平遺跡』『大平遺跡Ⅱ』として報告書の刊行に至っている。

今回の第Ⅲ期現地調査は、未調査部分4,762mについて、国土交通省中部建設局沼津河川国道事務所の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課、当研究所の3者による協議の結果、平成16年9月から平成17年5月にかけて実施した。資料整理は、平成19年9月から平成20年3月にかけて実施した。

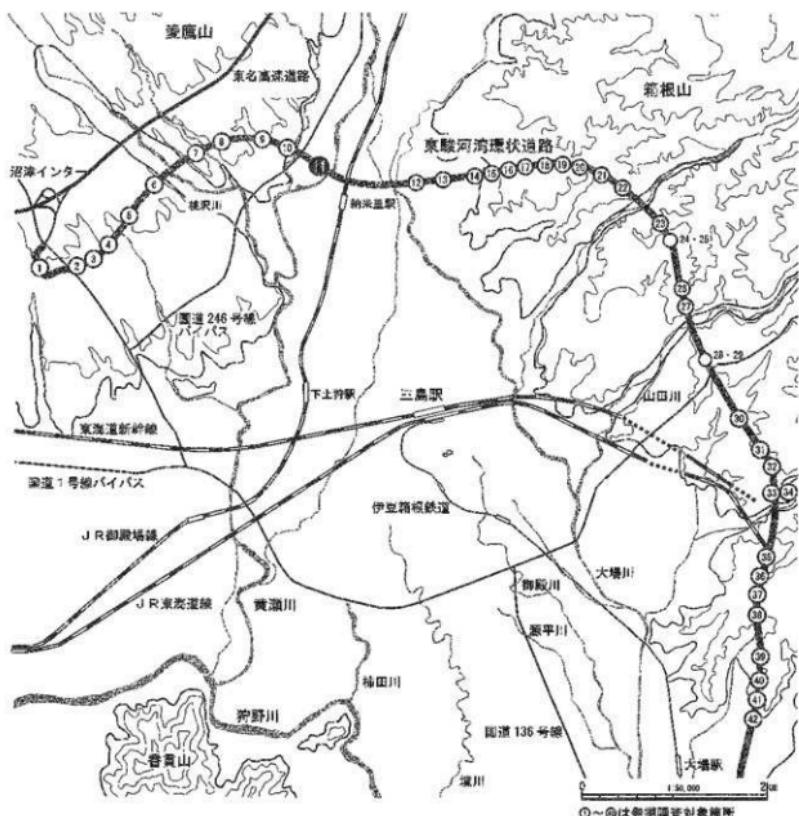


図2 東駿河湾路線配慮図

表1 東駿河湾環状道路関連遺跡一覧表

整理番号	遺跡名	内 容	報 告 書
沿岸市			
1	上松沢平	縄文早期前半集落	2004『上松沢平遺跡』
2	虎杖原古墳	横穴式石室墳（駒穴状の石室）	2003『寺林遺跡・虎杖原古墳』
3	寺林	旧石器時代（YL層）石器群	
4	丸尾北	縄文草創期～後期、旧石器時代	資料整理中
長泉町			
5	桜畠上	縄文中期集落、旧石器時代	資料整理中
9	池田B	縄文早期末～前期初頭集落	2000『池田B遺跡』
10	鉢平	縄文早期末～前期初頭集落、BBⅢ層土坑群	2003『鉢平遺跡』
11	大平（Ⅰ期）	中世漬墓	1993『大平遺跡』
	大平（Ⅱ期）	中世漬墓、弥生前期末住居跡	2001『大平遺跡Ⅱ』
	大平（Ⅲ期）	中世漬墓、弥生前期末土器出土	2009『大平遺跡Ⅲ』（本書）
三島市			
14	北ノ入A	縄文中期中葉集落	1999『北ノ入A遺跡』
16	長兵衛平	縄文	1998『長兵衛平遺跡』
17	小池	縄文中期前半集落	1998『小池遺跡』
18			
19	徳倉B	縄文早期後半～中期前半	1998『徳倉B遺跡』
20	上ノ池	旧石器（YL、BB0、BBⅠ、BBⅡ、BBⅢ層） 石器群	1998『上ノ池遺跡』
22	八重原	押型文系土器、BBⅢ層土坑群	1997『八重原遺跡』
23	加茂ノ洞B	BBⅢ層土坑群	1996『加茂ノ洞B遺跡』
27	焼場	鍊瓦古道、縄文早期～前期	1994『焼場A遺跡』 1996『焼場遺跡B地点・五百石遺跡』
28	下原	旧石器（YL層）石器群	1995『下原遺跡I』
29			1996『下原遺跡II』 1998『下原遺跡III』
30	押出シ	縄文中期後半集落	1999『押出シ遺跡（遺構編）』 2000『押出シ遺跡（遺物編）』
31	生茨沢	横穴式石室、BBV層直上石器群	1999『生茨沢遺跡』
32	中峯	旧石器時代	1998『中峯遺跡』
33	桧林A	縄文草創期石塙、有孔尖頭器などの石器群	1998『桧林A遺跡』
38	田頭山	横穴式石室、方形周溝状造構、火葬墓	2004『田頭山古墳群』

※整理番号は図2の番号。表にない番号の場所は、確認調査の結果、本調査が必要ないと判断された場所。

※層位の略号は、休湯層（YL）、休湯層下部の黒色帯（BB0）、第Ⅰ黒色帯（BBⅠ）、第Ⅱ黒色帯（BBⅡ）、第Ⅲ黒色帯（BBⅢ）、第Ⅳ黒色帯（BBⅣ）で愛鷹山麓の基本層位に準じてある。

第2節 調査の方法

大平遺跡の第III期現地調査の対象地区は、平成8年に調査を実施した1区の西側3,135m²と平成12年に調査を実施した4区の東側1,627m²の2つの地区である。調査に際しては、過去の調査に準じて、これらの地区に、それぞれ1-1区、2-2区という調査区名を付した(図3)。調査区に設定したグリッドも、第I期現地調査において建設予定道路のセンター・ラインを中心軸(Fライン)として設定された10m×10m四方のグリッドに準じている。北西の角(X=-94421.543 Y=36172.898 日本測地系)を原点(A, 1)とし、真北から左回りに333° 44' 52" 回転している。南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を付し、南西角の交点をグリッド名としている。

調査は、重機による表土除去に並行して、調査区内に設定したトレッセを掘削し、堆積している土を確認した後、人力掘削を行った。遺物の取り上げ、地形測量等については、光波測距器を用い、(株)シン技術コンサルの「遺跡管理システム」上でデジタルデータとして保存した。また、土層図、個別構造図は、上記のシステムに加え、縮尺1/20を基本とし、微細図等は1/10として手実測で図化した。また、1-1区については、ラジコンヘリコプターを使用した空中写真測量を実施した。

写真撮影は、35mmカラーネガ、カラースライド、モノクロネガを主体として、適宜6×7判モノクロ、同スライドを使用し撮影した。高所撮影にはローリングタワーを使用し、全体写真については、ラジコンヘリコプターを使用して空中写真撮影を行った。

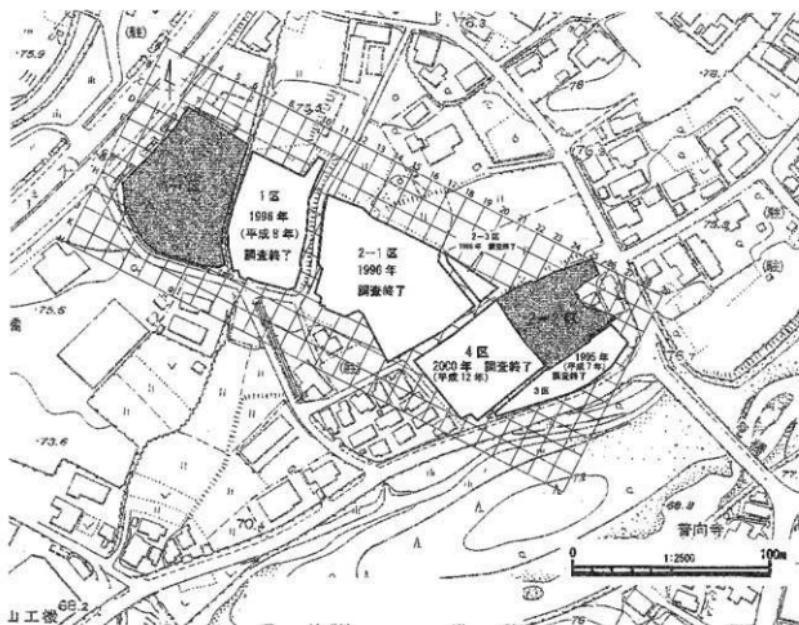


図3 大平遺跡調査区配置図

第3節 調査の経過

1 第III期現地調査

第III期現地調査は、平成16年9月21日、I-1区から開始した。重機による表土除去と並行してトレンチ掘削を行った結果、過去の調査で確認されたものと同様の土が堆積していることが判明した。I-1区については、第II期現地調査で見られた弥生時代の遺物が含まれている層は確認できなかったため、中世から近世にかけての遺物が含まれているIII層からVII層を対象として、層位ごとに調査を行った。そこでは、第I期、第II期現地調査で検出されたものと同様の墓と思われる土坑が多数検出された。また、陶磁器、銭貨等の金属製品、砥石等を主体とする石製品が出土した。平成17年1月、VII層上面において、基盤層を形成する大型の礫が多数出土したため、空中写真測量および撮影を実施することとした。

同年1月中旬、I-1区の調査終了とともに、2-2区の表土除去及びトレンチ掘削を実施し、2-2区の調査を開始した。2-2区においては、トレンチ掘削中に第II期現地調査で出土したものと同様の弥生時代前期末に比定される条痕文系土器がIV層から出土した。そのためIII層からVII層にかけての調査と弥生時代の遺物包含層であるVII層を調査の対象とすることとした。III層からVII層における調査では、I-1区同様、多くの土坑が検出され、陶磁器を中心とした遺物が出土した。4月下旬、VII層上面においてラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した後、VII層の調査を開始した。しかし、第II期現地調査で検出された弥生時代前期の遺構は検出されなかった。また、弥生土器や石器類が出土したものの、VII層における遺構、遺物の広がりが調査区の中央部南側に限定されたものであることが判明した。掘削作業による調査は5月17日をもって終了し、5月20日に撤収作業を終え現地調査を完了した。

表2 第III期現地調査工程表

	2004年(平成16年)				2005年(平成17年)				
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
準備工・撤去工	■								■
I-1区		■	■	■					
2-2区					■	■		■	■

2 資料整理

平成19年9月初旬に三島事務所に仮収納していた遺物や図面等を東駿河湾整理事務所へ移動し、9月中旬から本格的な資料整理作業を開始した。現地で記録、作成した図面から遺構図、遺跡全体図、報告書に載せるための遺構図版を作成した。また遺物については、分類、仕分け、接合、復元を行い、続けて実測作業を実施、遺物図版を作成した。遺物の写真は、6×7判を使用して静岡県埋蔵文化財調査研究所本部にて撮影を行った。また、黒曜石については、独立行政法人沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に蛍光X線による原産地推定分析を依頼した。

表3 資料整理工程表

	2007年(平成19年)				2008年(平成20年)		
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
準備作業	■						
資料整理	■						

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

大平遺跡（以下、本遺跡）は、静岡県駿東郡長泉町南一色に所在する。JR御殿場線の納米里駅から北西に約0.5km、国道246号線バイパスとその南を流れる黄瀬川の間に位置している。

地形的には、富士・愛鷹山と箱根外輪山の接する地点を頂点に広がる、いわゆる黄瀬川扇状地が黄瀬川の浸食によって形成された河岸段丘上にあり、標高は約70m～75mを計る。

黄瀬川扇状地は、富士・愛鷹山と箱根外輪山が最も近づく、裾野市伊豆島田を扇頂として、扇端の南西部は沼津市浮島ヶ原、南東部は狩野川低地へと続いている。今から約10,000年前、

富士山から噴出し堆積した溶岩（通称、三島溶岩）の上部に、縄文海進（註1）による粘土、シルト層が堆積し潟湖化、その後、約2,500年前の富士山東麓の大規模な山体崩落を起源とする御殿場泥流層が堆積して形成されたと考えられている。

御殿場泥流層は地元では「マサ」と呼ばれ、灰褐色の無層理の砂に、斜長石に富む多孔質玄武岩の礫を含む層が何層かにわたり堆積しており、その間には層理の発達した砂層をレンズ状に挟むことがある。乾燥すると堅く、一方で水分を含むと崩壊しやすいという特徴を有し、農耕には不適である。

黄瀬川は、富士山の南東麓、御殿場市の標高約50m地点に起源を有する。多少の迂曲を経るが、ほぼ南に向かつて流れ、清水町長沢付近で狩野川に合流する全長約30kmに及ぶ河川である。黄瀬川及びその支流は、約2,000年前以前、御殿場泥流層を浸食し河岸段丘を形成してきたとされている。

現在の黄瀬川は、国道246号線バイパスにほぼ並行して流れている。その流心は、西から東に向かつて移動してきたと考えられている。また、等高線や段丘面と段丘崖の繩の分布は、本遺跡周辺の地形が、黄瀬川の河川活動によって形成された西高東低の河岸段丘であることを示している。

大平という地名は、黄瀬川の形成する河岸段丘上の開けた土地を示して付けられたと言われ、また、一色という字名は、シキ（砂礫）が広がるところ、あるいは河川に沿うところ、山麓の開拓地という意味で、一毛作しかできない生産性の低い土地を指しているという説がある。

本遺跡周辺の土地利用については、現在は宅地及び店舗地が中心である。しかし、江戸時代まで遡ると、寛文12年（1672）の換地帳による一色村の出畠屋敷別等級別の構成は、田畠16町7反、畠地1町3反、屋敷1町となっている。また、宝曆11年（1761）の「主人 下人 切支丹宗門御改帳」が示す一色村の家数・人数構成は、「家数六拾軒 内百姓三拾軒」とあり、安永6年（1775）作の「御尋ニ付書上帳」と一緒に整理されている。文化4年（1807）に定められた「（覚）」には、「綱家数五十二軒中百姓四十八軒」とあり、江戸時代を通じた本遺跡周辺の土地利用の状況が窺える。

また、明治9年以降の、駿河国駿東郡南一色村字前ノ田及び行塚の地籍図においても、本遺跡の大部分は水田であった事が記されている。

註1 縄文海進…約2万年前頃、海面は現在より100m以上低かったが、しだいに気温が上昇し約6,000年前頃は現海岸より2～3m上昇し海岸線は現在よりも内陸部にあった。日本では、この時期縄文時代にあたるので縄文海進と呼んでいる。

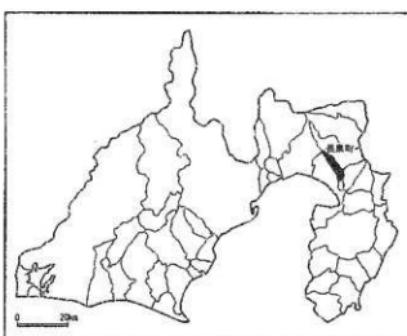


図4 長泉町位置図

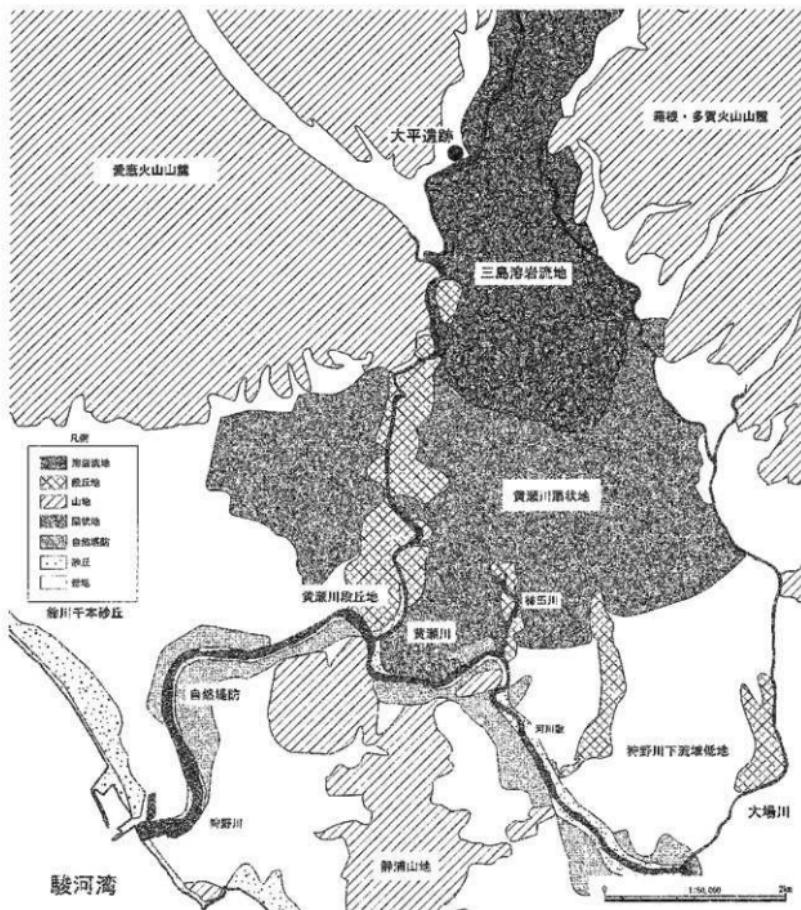


図5 周辺地形分類図〔『沼津市史』資料編 自然環境（1999）付図6「地形分類図」をもとに作成〕

参考文献

- 跡木 誠 1998 「大平遺跡」（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 田中雄・佐原真（著） 2002 『日本考古学事典』 三省堂
- 吉川 奕子 1992 「黄瀬川下流域の地形について」『静岡地学』 第66号 静岡県地学会
- 吉川 奕子 1994 「黄瀬川扇状地の地形・地質と人の暮らしと関わり」『沼津市史研究』 第三号 沼津市教育委員会市史編さん係
- 渡辺 靖 1998 「黄瀬川の沿岸と泥炭」『静岡地学』 第58号 静岡県地質学会

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺の遺跡を概観すると大きく2つの特徴が挙げられる。愛鷹山麓、箱根外輪山西麓の丘陵に位置する旧石器から縄文時代にかけての遺跡と、黄瀬川原状地上に位置する弥生時代以降の遺跡である。

本節では、大平遺跡の調査対象時期である弥生時代及び中世の遺跡を中心に、周辺の遺跡の状況について確認したい。

静岡県の東部地域では、弥生時代前期の遺跡はほとんど確認されておらず、中期、後期のものが中心である。ただし、本遺跡の南西約200mの地点で、芝織機械株式会社建設に際し、弥生時代前期終末期と推定される水神平系の条痕文の壺と遠賀川系の壺がセットで出土している（註1）。また、本遺跡の第II期現地調査においても、弥生時代前期末（註2）のものと思われる住居跡1軒が検出されており、これは東部地域のみならず静岡県内でも稀少な検出例である。

本遺跡周辺部の弥生時代の遺跡には長泉町下長瀬上野遺跡（2）がある。本遺跡から西に700mほど離れているが、ここからは、弥生時代後期最末期から古墳時代初めの初期と思われる住居跡17軒、倉庫跡1軒が検出され、土器は壺と台付壺及び鉢、高杯が出土している。約1.5km北に所在する裾野市富沢原遺跡（3）も同様に弥生時代後期の遺跡である。また、『静岡県文化財地名表I』によると白陰林B～D遺跡（4）（5）（6）、反畠E遺跡（7）、中村A遺跡（8）（いずれも三島市）から弥生土器が採取されている。

一方、中世の遺跡は数多く存在している。本遺跡が所在する地域は、古代から交通路として利用されていた事が知られている。中世初頭には、本瀬川駅から北上し、鮎沢駅（竹之下）を経て、足柄峠を超えて相模の地へと向かう道や鮎沢沿いに相模松田へ抜ける道があったと伝えられている。

三方を陥しい山々に囲まれた本地域は、古くから東国と京を結ぶ交通の要衝であったことから、中世においては幾つもの城が築かれた。

本遺跡の北方約1kmの地点には天神川古城（9）が所在する。標高約115mの通称天神山に築かれた長さ約160m、幅約100mの城壁を有する城である。天文10年（1582）築城と伝えられる本城は、本遺跡の西約500mに位置する長久保城の出城と考えられている。

その長久保城（10）は、一説に源頼朝の家臣、竹下孫八左衛門（人森）の築城と伝えられるが、『駿河記』等によれば、天文6年（1537）、北条氏綱が今川氏の築いた古壁を修復して城にしたと伝えられ、北条氏特有の築城法とされる戸堀が検出されている。

天神古城と長久保城のほぼ中間地点には、南北一色城（11）が所在する。長さ約350m、幅約130mの城壁を有し、本郭、曲輪、空堀、土塁等が検出されているが、伝承、記録等がなく詳細は不明である。長久保城の出城という説と、『武德編年集成』にいう「天神川砦」であるとする説がある。

本遺跡の南西約1.5kmに位置する平塚遺跡（12）は、六道銭と考えられる銭貨やかわらけが出土した4基の土坑を含む、合計25基の土坑、溝状遺構20基を検出し、室町時代中頃から江戸時代以前の土坑墓群と考えられている。また、南東約1.5km地点に位置する巨勢伊予守館（13）は、通称「ヨーガフチ」という久保出川を東に控えた場所にあり、『駿河志料』によると、今川氏家臣巨勢（小瀬村）伊予守が居住したとされる館であるが、遺構等の検出例はなく詳細は不明とされている。

また、本遺跡の北側約200mでは、国道246号線バイパス建設工事に伴って大平遺跡（14）が調査されている。中世から近世にかけての墳墓とされる土坑や杭列遺構が検出されており、長久保城二の丸、大水濠出土の遺物と同じ年代觀を示す16世紀から17世紀の遺物が出土している。

このように、本遺跡周辺において、県内で最も古い段階の弥生時代の土器が出土していること、また、城郭を中心とした中世の遺跡が多数分布していることは、本遺跡の性格を考える上で重要である。

註1 小野真一 1970 「駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器」『駿豆考古』第10号

註2 弥生時代の時代区分については前期・中期・後期といった三時期区分が主流であったが、近年になり四時期区分、もしくは六時期、七時期区分などが提唱されており統一された見解はない。本報告書では、三時期区分による時代区分を用いている。

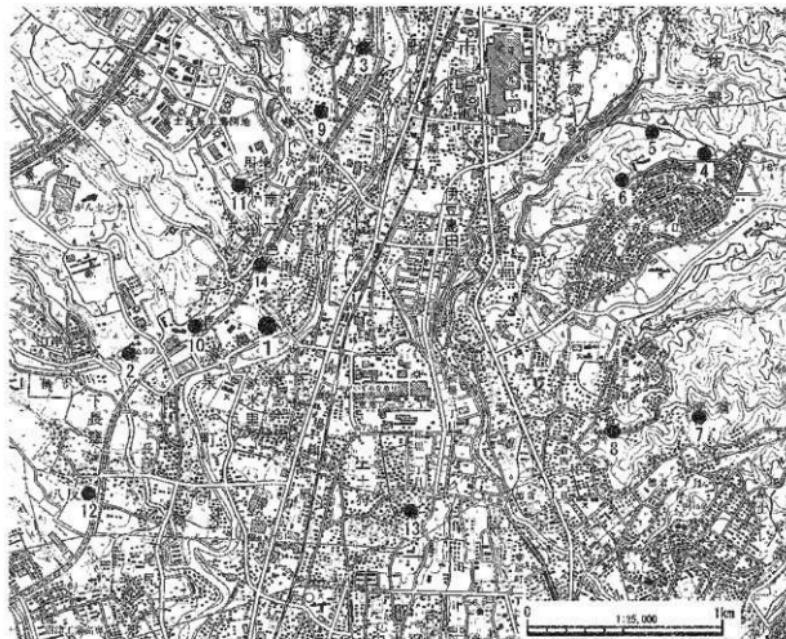


図6 周辺遺跡分布図

表4 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	備考	番号	遺跡名	種別	備考
1	大平遺跡	墳墓群	平成7~8・12年調査	8	中村A遺跡	散布地	
2	下長原上野遺跡	集落	昭和47年調査	9	天神川古城	城館	酒城
3	高沢原遺跡	散布地		10	長久保城	城館	昭和45~52・56年調査
4	白熊林B遺跡	散布地		11	隈色城	城館	
5	白熊林C遺跡	散布地		12	平野遺跡	廃墓群	昭和49年調査
6	白熊林D遺跡	散布地		13	巨勢伊予守館	城館	
7	反畠E遺跡	散布地		14	大平遺跡(246バイパス)	散布地	昭和55年調査

参考文献

佐藤民雄・小野真一・猿津海祥・山田繁治・秋本真澄 1979 「下長原上野遺跡」 長泉町教育委員会

佐野裕彦・水上綾子 2001 「大平遺跡Ⅱ」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県教育委員会文化課 1988 「静岡県文化財地図」 「静岡県文化財地名表」 静岡県教育委員会

鈴木 謙 1988 「大平遺跡」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所

田中琢・佐原真 (編) 2002 「日本考古学事典」

渡瀬治・符田稔・井上輝夫編 1989 「駿州駿・千福馬場添・大畑・桃園入ノ洞」 福野市教育委員会

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 土層について

1 基本土層について

大平遺跡第Ⅲ期調査の基本土層は、第Ⅰ期現地調査において2-1区の土層を標準として設定された基本上層に準じている。比較的堆積状態が良好であった1-1区を標準として、第Ⅰ期現地調査時のデータと比較、検討し、第Ⅰ期現地調査の基本土層に相当すると考えられるI層からVII層について、同様のローマ数字を付した。また、2-2区で新たに検出された土層についてはVIII層からとした。

以下に基本土層について記す。

第I層	黒褐色土	水田耕作土。
第II層	灰色粘土	水田耕作土。
第III層	鈍い褐色土	鉄分を多く含み、場所によっては赤褐色を帯びる。遺物包含層。
第IV層	暗褐色土	粘性がややある。砂礫をわずかに含む。遺物包含層。
第V層	黒褐色土	砂礫を多く含む。橙色スコリアを多く含む。水田耕作の痕跡あり。
第VI層	黒色土	砂礫を多く含む。粘性が強い箇所がある。色調によりVla, Vlbに細分される。遺物包含層。
第VII層	鈍い褐色砂質土	砂礫を多く含む。遺物包含層。
第VIII層	鈍い黄褐色砂	シルト化したVII層が浸潤する箇所あり。弥生時代の遺物包含層。
第IX層	鈍い褐色土砂	円磨度が高い砂層。
第X層	灰褐色砂	シルト質。酸化し褐色が強い。

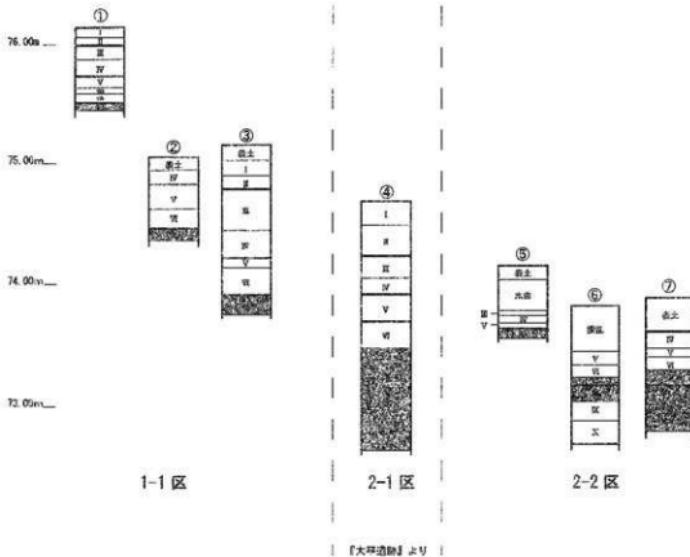
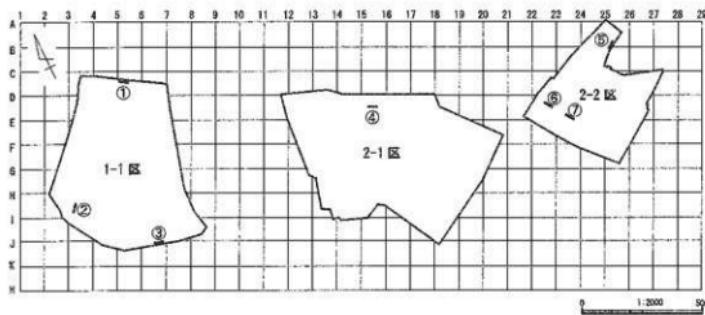
2 各区の土層について

1-1区は、調査区の西側約1/4が削平により擾乱されていた。それ以外の地点では、概ね標岸十層が良好な状態で堆積する様子が確認できた。調査区のD-6, F-4, J-5・6, I-6グリッド付近では、V層中に褐鉄鉱が集積する水田耕作の痕跡を示す土層が確認された(註1)。また、調査区の一部では、VII層中にも耕作の痕跡が認められた。IV層中において、砂礫を多量に含む再堆積層が認められたため、これをIVa層とし、標岸のIV層をIVb層として2分した箇所がある。VII層の上面では、径が1mを超える大型の礫が多数検出され、また、調査区の中央を南北に流れる旧河川が検出された。

2-2区は、近現代において調査区の広範囲が削平されており、I層は確認できず、II層、III層の検出も調査区の一部に限られており、残存していた層のほとんどがIV層以下である。VII層上面に大型の礫は認められず、代わりに調査区の広範囲に渡って、VII層下部に粒子の粗い砂層と細かい砂層、シルトが互層を成して堆積しており、旧河川が流れを変えながら標岸土層が形成されていく様子が確認された。

調査区の中央部南側においては、弥生時代前期末の条痕文系土器を包含する層が検出されVII層としたが、旧河川による浸食の影響で調査区の一部に認められたのみであった。

註1 静岡大学名誉教授 加藤芳郎氏のご教示による。



■ 透視線出面
中・近世遺物包含層
○ 中世遺物包含層、透視線出面
□ 弥生時代遺物包含層

図7 土壠柱状図

第2節 1-1区の遺構と遺物について

1 中世から近世の遺構

1-1区では旧河川、溝状遺構、土坑、小穴、不明遺構が検出された。以下検出層位ごとに報告する。

(1) III層検出の遺構(図9)

III層で検出された遺構は溝状遺構1条である。

溝状遺構

SD001(図8)

SD001は、I-3・I-4・J-4・J-5・J-6グリッドで検出された。検出された規模は長さ31.7m、幅0.52m、検出面から底面までの深さ0.15mを計る。遺物は近世碗(P139)、志野丸皿(P141)、古瀬戸平碗(P143)、瀬戸美濃大黒4丸碗(P176)、貿易陶磁染付碗(P177)、古瀬戸綠釉小皿(P178)などが出土している。用途は不明である。

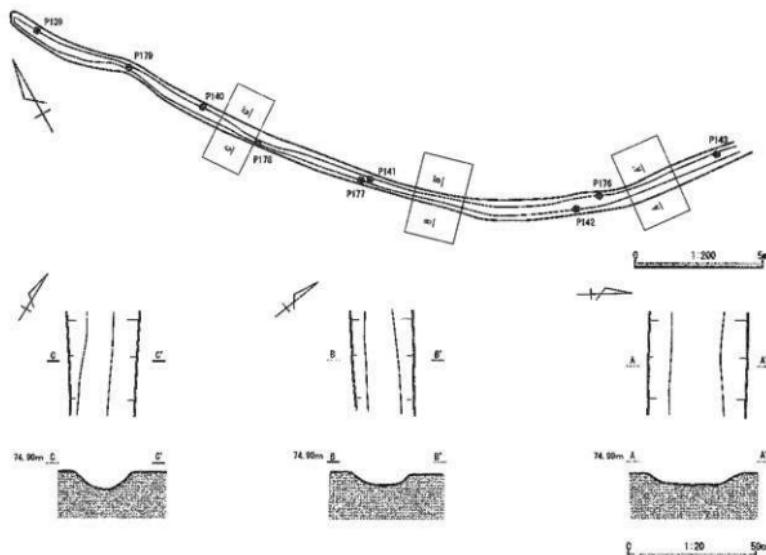


図8 1-1区 III層 溝状遺構 対測図

表5 1-1区 III層 溝状遺構(SD) 計測表

遺構名	区	グリッド	層位	断面形態	埋土	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺 物	時期	備 考
SD001	I-1	I-3・I-4 J-4・J-5 J-6	III	逆台形	II	31.7	0.52	0.15	近世(P139)・志野丸皿(P141) 古瀬戸平碗(P143)・瀬戸美濃 大黒4丸碗(P176)・貿易陶磁 染付碗(P177)・綠釉小皿(P178)	中・近世	

※()内の数値は遺物番号。Pは省略。

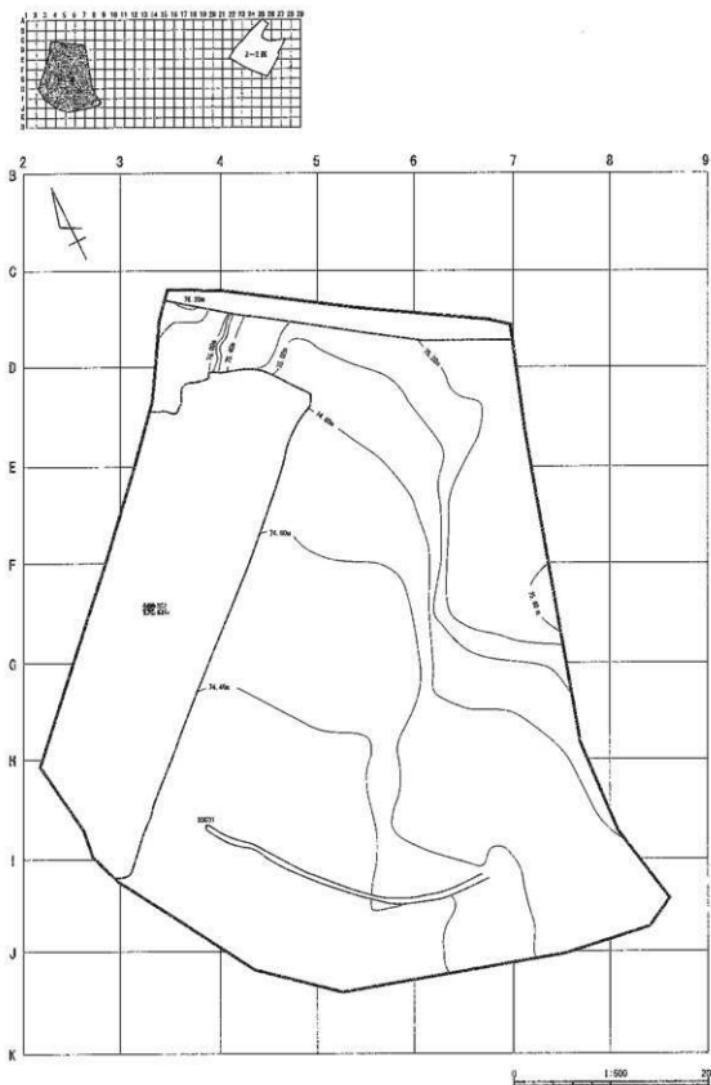


図9 1-1区 III層 遺構分布図

(2) V層検出の遺構(図10)

V層で検出された遺構は、土坑36基、小穴6基である。

① 土坑

大平遺跡では過去の2回にわたる調査において数多くの集石土坑が検出された。主に骨、銭貨、かわらけ等の遺物が出土した集石土坑を墓と認定しているが、遺物が出土しなかった集石土坑についても、形態の比較、検討から集石墓と認定し報告されたものがある。

今回の調査において検出された土坑については、遺物を伴うものがごくわずかであり、個々の遺構について墓と断定することは困難であったが、過去の調査の成果を参考に墓か否かを判断することとした。

S F101・S F105(図11)

S F101はJ-5・J-6グリッドで検出された。規模は長径2.72m、短径2.50mを計る。平面形は円形である。土坑中央に大型の礫が認められる。礫は人為的に配置されたものではなく、礫の下部については地山層に食い込んだ状態で検出された。大型の礫の上面は人為的に削られており、その削石が土坑内に充填されている。また、破砕礫とは考えられない自然礫も数多く認められる。遺物はかわらけが1点出土している。

S F105はI-6グリッドで検出された。規模は長径1.59m、短径1.56m、検出面から底面までの深さは0.30mを計る。平面形は円形である。S F101と同様の形態の集石土坑である。本遺構からは時期、用途不明の鉄片が出土している。

S F101・S F105とともに時期、性格について断定はできないが、同様の遺構は、第1期現地調査時の2-1区でも検出され中世の集石墓として報告がなされている(註1)。しかし、今回検出された土坑については、礫の充填方法と覆土に相違点が認められ、近世に下る可能性を指摘しておきたい。本遺跡は近世以降農地として利用されていたことが文献から明らかになっていることから(註2)、農地として利用する際に耕作面に突出する大型の礫の上部を削ることで平らな耕作面を作り出し、削石と周辺の自然礫を併せて土坑内に廃棄した可能性がある。

S F102・S F113(図11)

S F102はH-5グリッドで検出された。長径1.25m、短径1.09m、検出面から底面までの深さ0.53mを計る円形の土坑である。

S F113はH-6グリッドで検出された。規模は長径1.10m、短径0.93m、検出面から底面までの深さは0.51mである。平面形は円形である。

S F102・S F113ともに遺物が出土していないため時期、性格について断定はできない。

S F103・S F106・S F114(図12)

S F103はH-5グリッドで検出された。規模は長径1.66m、短径1.40m、検出面から底面までの深さは0.32mを計る。平面形はやや不整な方形である。覆土に削石を含む。少破片のため図示できなかつたが、羽釜A類が1点(写真図版II-7)出土した。

S F106はI-6グリッドで検出された。規模は長径1.09m、短径0.93m、検出面から底面までの深さは0.34mを計る。平面形は梢円形である。覆土に削石と炭化物が認められた。土坑の北側に大型の自然礫が認められる。

S F114はH-6グリッドで検出された。規模は長径1.40m、短径1.10m、検出面から底面までの深

さは0.34mを計る。平面形は梢円形である。覆土に割石を含む。

これらの土坑については検出状況、形態から墓の可能性が高いと判断した。

S F104・108 (図13)

S F104はH-6グリッドで検出された。規模は長径0.84m、短径0.60m、検出面から底面までの深さは0.30mを計る。平面形は梢円形である。大型の礫を配し周辺に小型の礫を充填している。

S F108はD-4グリッドで検出された。規模は長径1.47m、短径0.95m、検出面から底面の深さ0.47mを計る大型の土坑である。平面形は梢円形である。土坑の中央に大型の礫を配し、周辺に礫を充填している。遺物は出土していない。

これらの土坑については検出状況、形態から墓の可能性が高いと判断した。

S F119・S F118・S F124・S F126 (図14)

S F119はI-6グリッドで検出された。規模は長径1.21m、短径0.84m、検出面から底面までの深さは0.33mを計る。平面形は長梢円形を呈する。土坑の西側に大型の自然礫が認められる。遺物は出土していない。

S F118はJ-6グリッドで検出された。規模は長径0.99m、短径0.80m、検出面から底面までの深さは0.28mを計る。平面形はやや不整な梢円形を呈する。土坑の西側に大型の自然礫が認められる。遺物は出土していない。

S F124、S F126はJ-7グリッドで検出された。S F124の規模は、長径0.78m、短径0.77m、検出面から底面までの深さは約0.17m、平面形は円形である。

S F126の規模は長径が推定で1m、短径0.66m、検出面から底面までの深さは0.30mを計り、平面形は長梢円形を呈する。S F124がS F126を切っていることからS F126の方が先に掘られたことがわかる。

いずれの土坑にも大型の自然礫が認められる。遺物は出土していないが、検出状況、形態から墓の可能性が高いと判断した。

S F107・S F111・S F116・S F127 (図14)

S F111は平面形がやや不正の円形を呈する土坑で、規模は、長径0.75m、短径0.69m、検出面から底面までの深さは0.22mである。

S F107、S F116・S F127はいずれも平面形が梢円形を呈する。S F107の規模は長径0.99m、短径0.68m、検出面から底面までの深さが0.28mである。S F116の規模は長径0.91m、短径0.54m、検出面から底面までの深さが0.15mである。S F127の規模は長径0.81m、短径0.59m、検出面から底面までの深さが0.35mである。

いずれの土坑からも遺物は出土しておらず、時期、性格等については不明である。

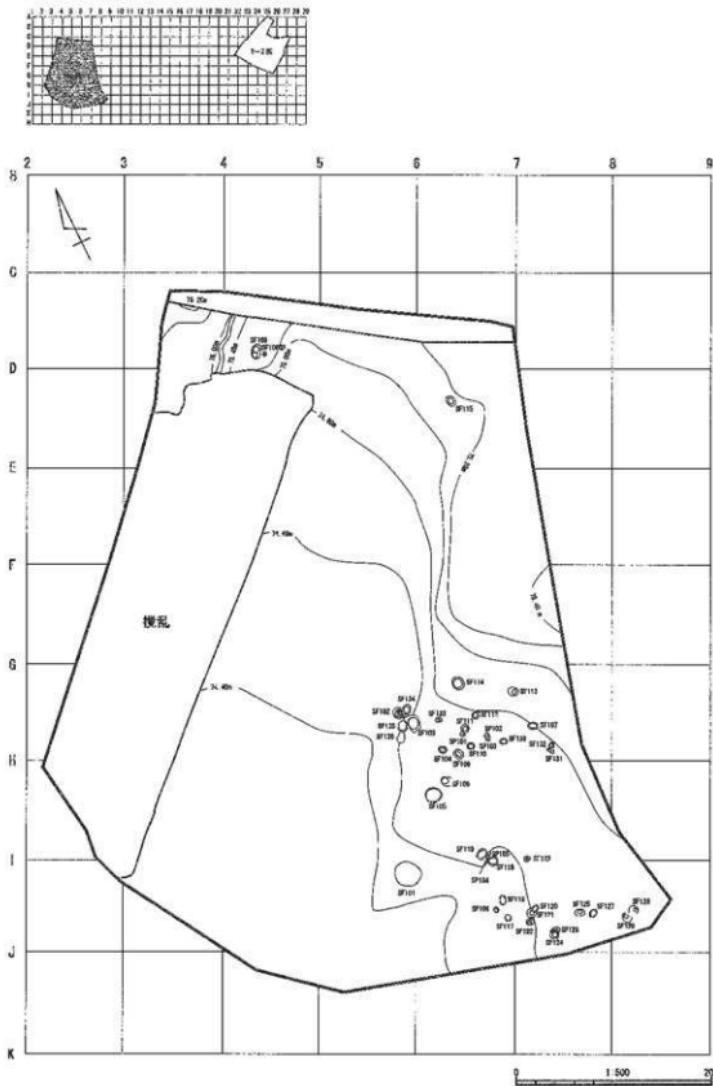
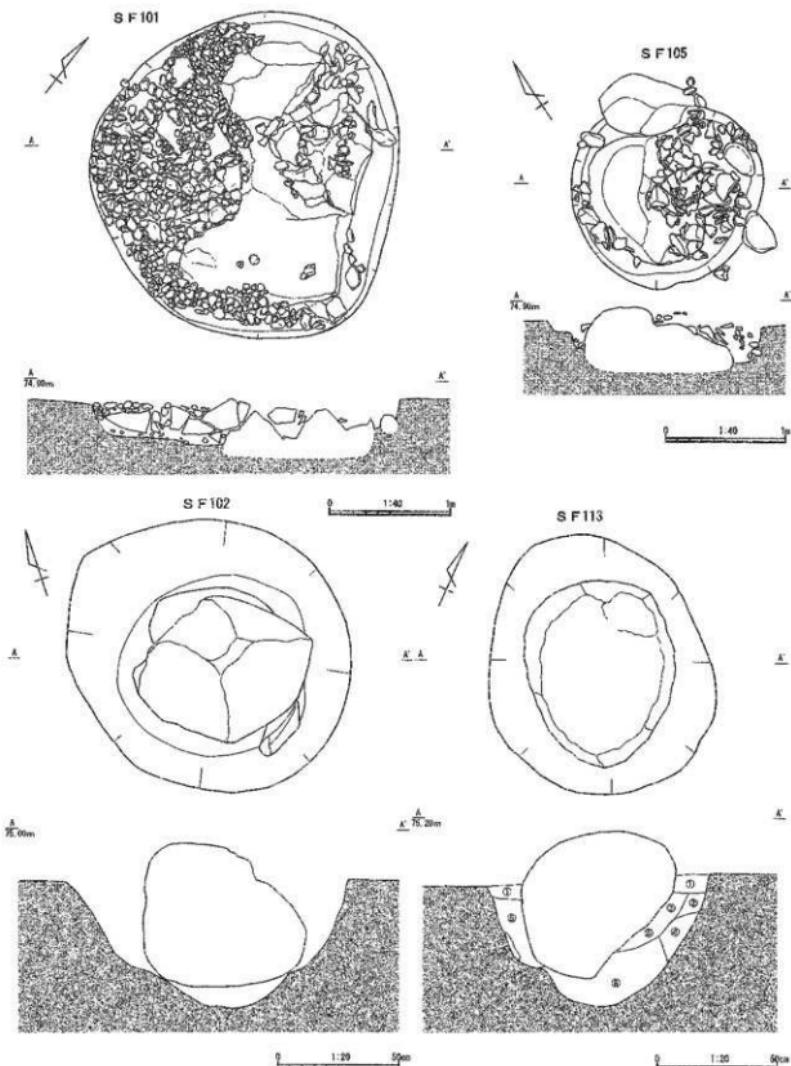


図10 1-1区 V層 遺構分布図



①褐色色土 (198 2/1) ややシルト質・透水性良好でV層が通じる
花崗岩土 (198 2/1) しまり丸り・V層主年・黄褐色・可塑性
②赤色土 (198 2/1) 透水性良好・しまりなし
空氣土 (198 2/1) Qに通じ・黄褐色・ハスが大きい裏面赤
表面褐色土 (198 2/1) しまりなし
底部褐色土 (198 2/1) しまり強い・黄褐色バース有り

図11 1-1区 V層 土坑実測図(1)

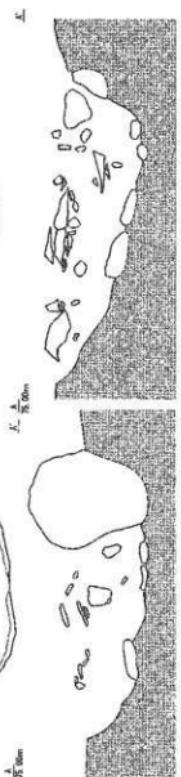
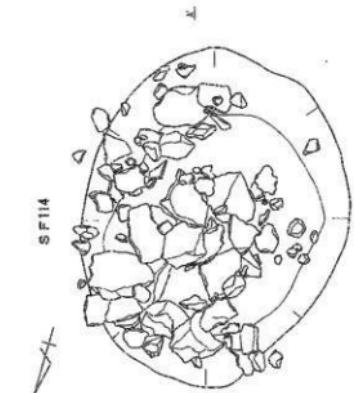
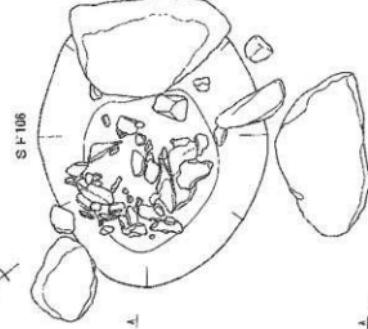
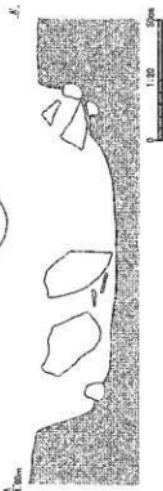
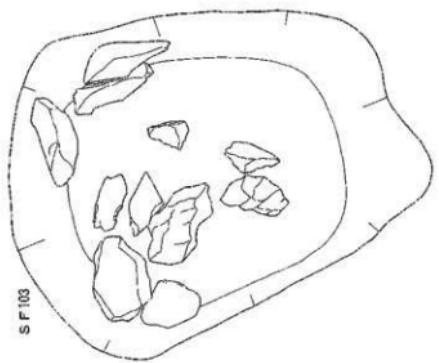


图12 1—1区 V层 土坑实测图 (2)

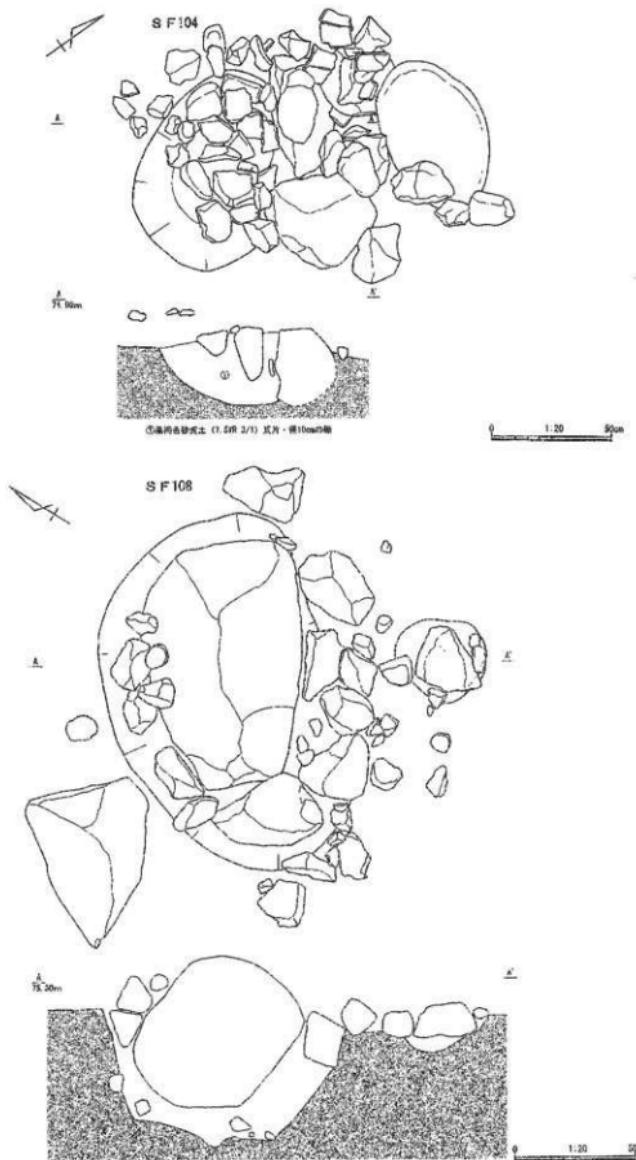


圖13 1-1區 V層 土坑測量圖 (3)

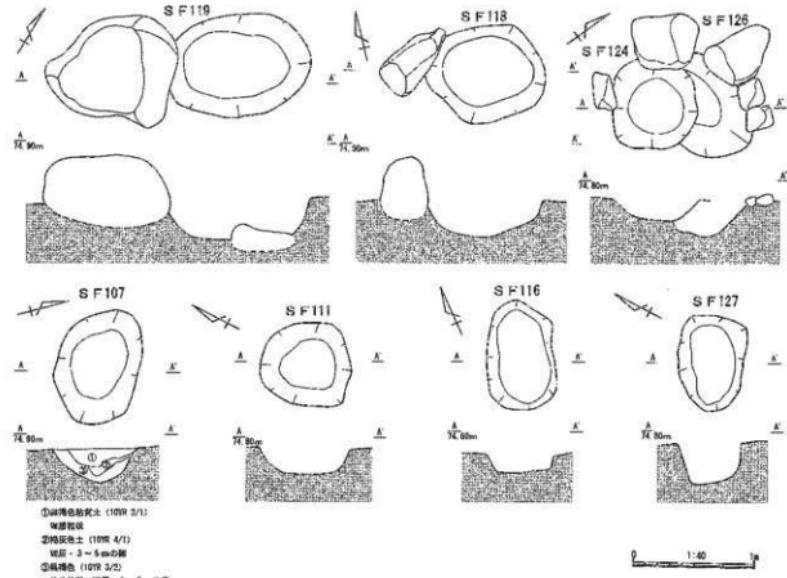


図14 1-1区V層 土坑実測図(4)

表6 1-1区V層 土坑(SF)計測表

座標	面積	断面名	区	グリッド	變化	平均断面形	深さ	長径(m)	短径(m)	高さ(m)	種類	地物	形狀	備考
11 2-2	S F101	I-1	J-5 - G	V	円形	辺はざみの果土	2.72	2.50	6.25	1.72	かわらけ(271)	A-2	中・近畿	
11	S F102	I-1	H-1	I-1	G-6	円形	辺はざみの果土	1.25	1.09	6.13	中・近畿	A-1		
12	S F103	I-1	H-5	V	円形	辺はざみの果土	1.86	1.40	6.32	中・近畿	B			
11 3-2-1	S F104	I-1	J-1	I-6	V	楕円形	床面凹凸	0.84	0.60	6.30	中・近畿	A-2		
11 3-2-1	S F105	I-1	J-6	I-6	V	円形	V層	1.59	1.56	6.30	中・近畿	A-2		
12 4-2	S F106	I-1	J-6	V	楕円形	V層	1.09	0.93	6.34	中・近畿	B			
14	S F107	I-1	H-7	V	楕円形	V層	0.99	0.68	6.26	中・近畿	D-2			
13 4-1	S F108	I-1	C-4	V	楕円形	辺はざみの果土	1.47	0.95	6.47	中・近畿	A-2			
	S F109	I-1	H-6	V	円形	II・V層	1.05	0.78	6.18	中・近畿	D-2			
	S F110	I-1	H-6	V	円形	II・V層	0.73	0.67	6.19	中・近畿	D-2			
14	S F111	I-1	H-6	V	円形	II・V層	0.75	0.69	6.22	中・近畿	D-2			
	S F112	I-1	H-6	V	円形	II・V層	0.77	0.73	6.19	中・近畿	D-2			
11	S F113	I-1	H-6	V	円形	II・V層	1.10	0.93	6.51	中・近畿	A-1			
12 4-4	S F114	I-1	H-6	V	楕円形	V層	1.40	1.10	6.34	中・近畿	B			
	S F115	I-1	G-6	V	楕円形	II・V層	1.13	0.74	6.26	中・近畿	D-2			
	S F116	I-1	J-6	V	楕円形	II・V層	0.91	0.54	6.16	中・近畿	D-2			
14	S F117	I-1	J-6	V	円形	II・V層	0.68	0.56	6.36	中・近畿	E			
	S F118	I-1	J-6	V	楕円形	II・V層	0.99	0.80	6.28	中・近畿	E			
14	S F119	I-1	J-6	V	楕円形	II・V層	1.21	0.94	6.33	中・近畿	E			
	S F120	I-1	J-7	V	楕円形	II・V層	0.66	0.22	6.30	中・近畿	D-2			
	S F121	I-1	J-7	V	楕円形	II・V層	(0.82)	0.87	6.30	中・近畿	D-2			
	S F122	I-1	J-7	V	楕円形	II・V層	0.82	0.50	6.27	中・近畿	D-2			
	S F123	I-1	I-J-7	V	楕円形	II・V層	0.69	0.47	6.00	中・近畿	D-2			
14	S F124	I-1	J-7	V	円形	II・V層	0.78	0.77	6.17	中・近畿	E			
	S F125	I-1	J-7	V	楕円形	II・V層	0.97	0.63	6.25	中・近畿	E			
14	S F126	I-1	J-7	V	楕円形	II・V層	(1.0)	0.66	6.30	中・近畿	F			
	S F127	I-1	J-7	V	楕円形	II・V層	0.81	0.39	6.35	中・近畿	D-2			
14	S F128	I-1	J-8	V	楕円形	II・V層	1.02	0.70	6.37	中・近畿	D-2			
	S F129	I-1	J-8	V	円形	II・V層	1.03	(0.92)	6.31	中・近畿	D-2			
	S F130	I-1	H-8	V	楕円形	II・V層	0.71	0.56	6.13	中・近畿	D-2			
	S F131	I-1	H-7	V	楕円形	II・V層	0.70	0.28	6.22	中・近畿	D-2			
	S F132	I-1	H-7	V	不整型	II・V層	0.58	0.47	6.19	中・近畿	D-2			
	S F133	I-1	H-6	V	楕円形	II・V層	0.51	0.44	6.19	中・近畿	D-2			
	S F134	I-1	H-5	V	楕円形	II・V層	1.64	0.83	6.10	中・近畿	D-2			
	S F135	I-1	H-5	V	円形	II・V層	1.08	0.54	6.10	中・近畿	D-2			
	S F136	I-1	H-5	V	楕円形	II・V層	1.05	0.68	6.01	中・近畿	D-2			

② 小穴

S P101・S P102・S P103・S P104・S P105・S P106 (図15)

S P101・S P102・S P103はいずれもH-6グリッドで検出された楕円形を呈する小穴である。S P101の規模は、長径0.5m、短径0.37m、検出面から底面までの深さが0.8mである。

S P102とS P103に切り合いが認められS P102がS P103を切る。S P102の規模が長径0.52m、短径0.43m、検出面から底面までの深さが0.19m。S P103の規模が長径0.46m、短径0.43m、検出面から底面までの深さが0.16mである。

S P104とS P105はI-6グリッドで検出された円形を呈する小穴である。規模はS P104が長径0.39m、短径0.34m、検出面から底面までの深さが0.12m。S P105が長径0.33m、短径0.31m、検出面から底面までの深さが0.15mである。S P104とS P105の周辺には大型の自然礫が認められた。

S P106はJ-6グリッドで検出された円形を呈する小穴である、規模は長径0.51m、短径0.42m、検出面から底面までの深さが0.11mである。

いずれの小穴からも遺物は出土しておらず時期、性格は不明である。

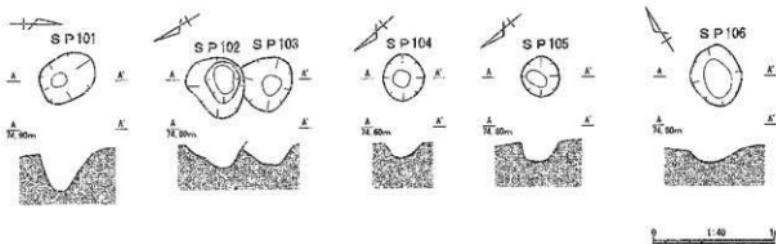


図15 1-1区 V層 小穴実測図

表7 1-1区 V層 小穴(S P) 計測表

測定	測定名	区	グリッド	層位	平面形	面上 底面(m)	直径(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
15	S P101	I-1	H-6	V	楕円形	Ⅲ・V層	0.30	0.37	0.2	中・近世	
15	S P102	I-1	I-6	V	楕円形	Ⅲ・V層	0.32	0.43	0.19	中・近世	
15	S P103	I-1	H-6	V	楕円形	Ⅲ・V層	0.46	(0.43)	0.16	中・近世	
15	S P104	I-1	I-6	V	円形	Ⅲ・V層	0.39	0.34	0.12	中・近世	
15	S P105	I-1	I-6	V	円形	Ⅲ・V層	0.33	0.31	0.15	中・近世	近くに火葬の跡
15	S P106	I-1	J-6	V	円形	Ⅲ・V層	0.51	0.42	0.11	中・近世	近くに大型の礫

註1・2 鈴木 誠 1998『大平遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 12~14、39~81頁

(3) VII層検出の遺構(図16)

VII層で検出された遺構は旧河川1基、土坑83基、小穴14基、不明遺構2基である。

① 旧河川

S R01

S R01は調査区の中央やや西側を、北東から南西に向かって流れる旧河川である。検出された規模は長さ63.10m、最大幅8.00m。検出面から底面までの最大の深さは0.72mである。VII層が堆積する時期の河川と考えられる。遺物は出土していない。

表8 1-1区 VII層 旧河川(SR) 計測表

番号	区域	遺構名	区	グリッド	面積	平面形態	覆土	長さ(m)	幅(m)	底さ(m)	遺物	特徴	備考
16	S R01	1-1		VII		矩形	無	63.10	8.00	0.72	不明		

② 土坑

S F222・S F223・S F224(図17)

S F222、S F223はいずれもH-7グリッドで検出された。S F222の規模は長径0.73m、短径0.72m、検出面から底面までの深さは0.20mを計り平面形は円形を呈する。S F223の規模は長径0.62m、短径0.59m、検出面から底面までの深さは0.20mを測る。平面形は円形を呈する。いずれも覆土に10cmから20cmの破碎した礫を含む。遺物は出土していない。S F222・S F223とともに、検出状況、形態から墓の可能性が高いと判断した。

S F224はF-5グリッドで検出された。規模は長径0.86m、短径0.50m、検出面から底面までの深さ0.17mの大型の土坑で、平面形は長辺円形を呈している。覆土の上層に破碎礫が充填されている。遺物は出土していない。検出状況、形態から墓の可能性が高い。

S F260・S F272・S F249・S F267・S F250・S F210・S F244・S F282・S F226(図18)

いずれも大型の自然礫の近くに掘られた土坑である。各土坑の規模等については計測表を参照されたい。VII層で検出された大型の礫の間に構築された土坑については墓の可能性が高いと判断した。

S F202・S F201・S F232・S F234・S F205・S F206・S F213(図18)

S F201・S F202・S F232・S F234はいずれも径が約1mの円形の土坑。静岡県東部地域、愛鷹山麓の遺跡で数多くの検出例が報告されているものである。この円形土坑の性格について、近隣の平塙遺跡および国道246号線バイパス建設に伴う大平遺跡の調査では座棺を土葬するための墳墓ではないかと報告され(註1)、また、猪之頭養鱒場内遺跡では肥料や灌水用の「溜め」の施設ではないかと報告されている(註2)。本遺跡で検出された遺構についても埋葬施設と農業用施設の双方の可能性がある。

S F205・S F206・S F213はいずれもやや横円形を呈する土坑で、覆土に径10cmから20cmの円礫を含む。いずれの土坑からも遺物は出土しておらず時期、性格について不明である。

S F259(図18)

S F259はH-7グリッドで検出された。規模は長径1.00m、短径0.61m、検出面から底面までの深さ0.16mを計る長辺円形の土坑である。中央から北東側の底面において焼土が検出され、また、底面の広範囲に渡って炭化物が認められた。骨片、遺物は出土しておらず時期、性格について断定はできない。類似する遺構が2-1区においても検出されている(S X21196、S X21197)が、ここでも遺物は出土しておらず、焼却施設ないしは焼却物の廃棄場所の可能性があるとしている(註3)。

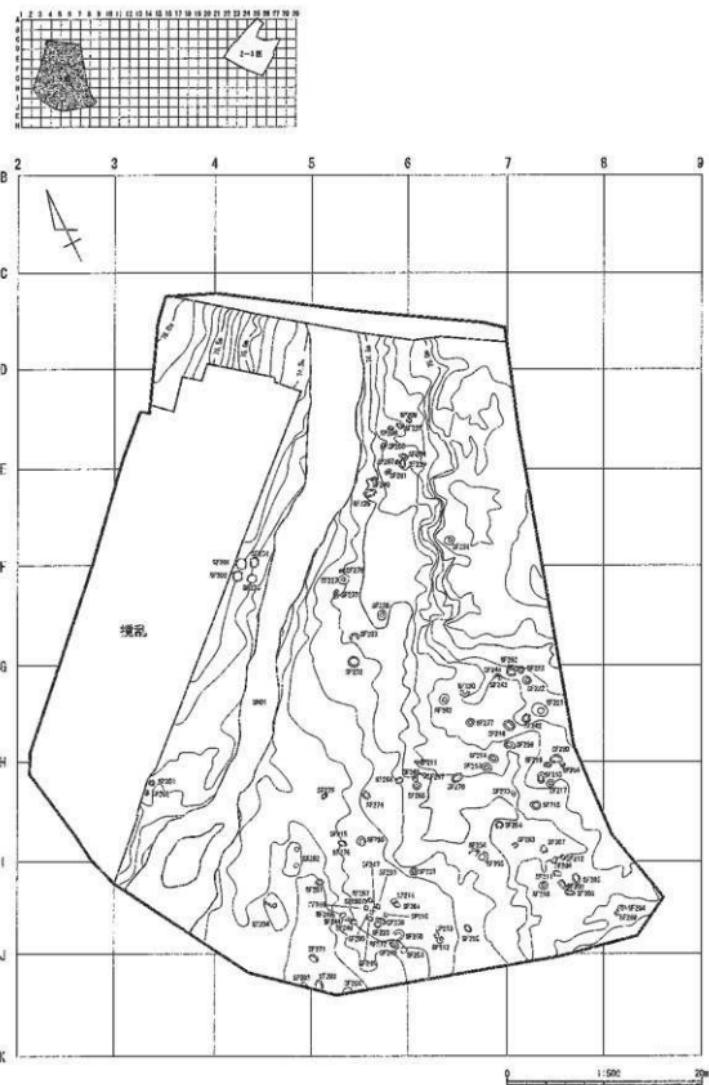


図16 1-1区VII層遺構分布図

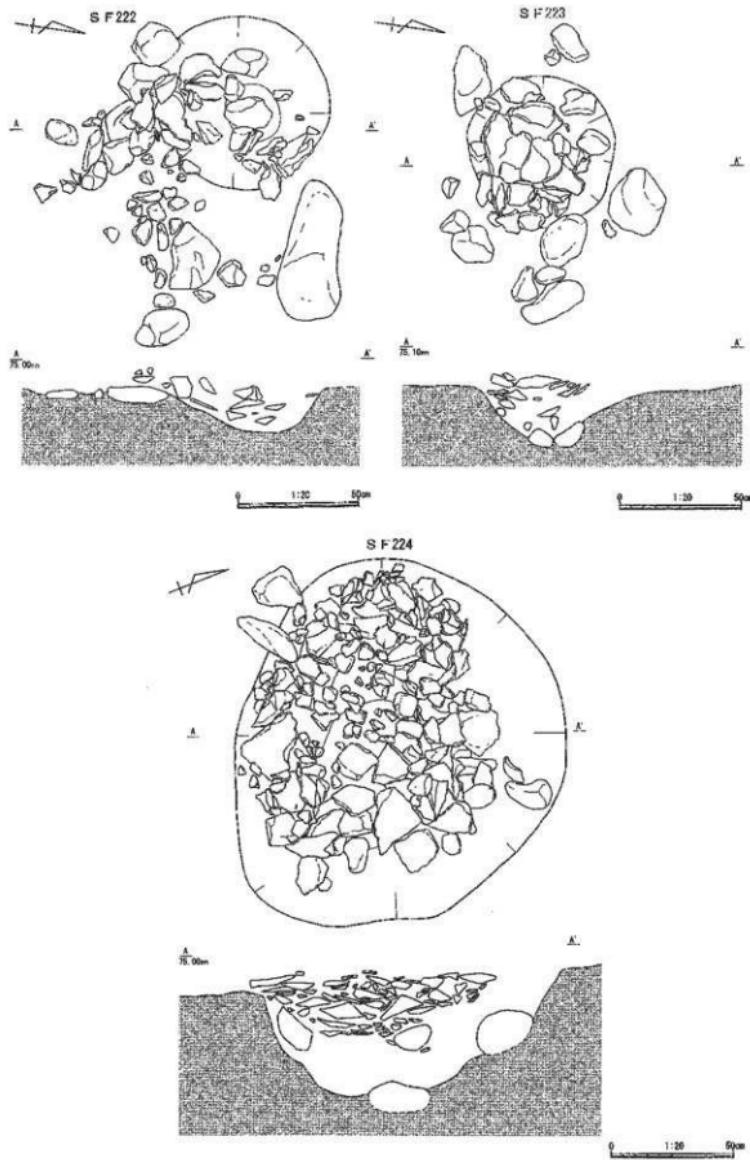


図17 1-1区 VII層 土坑実測図(1)

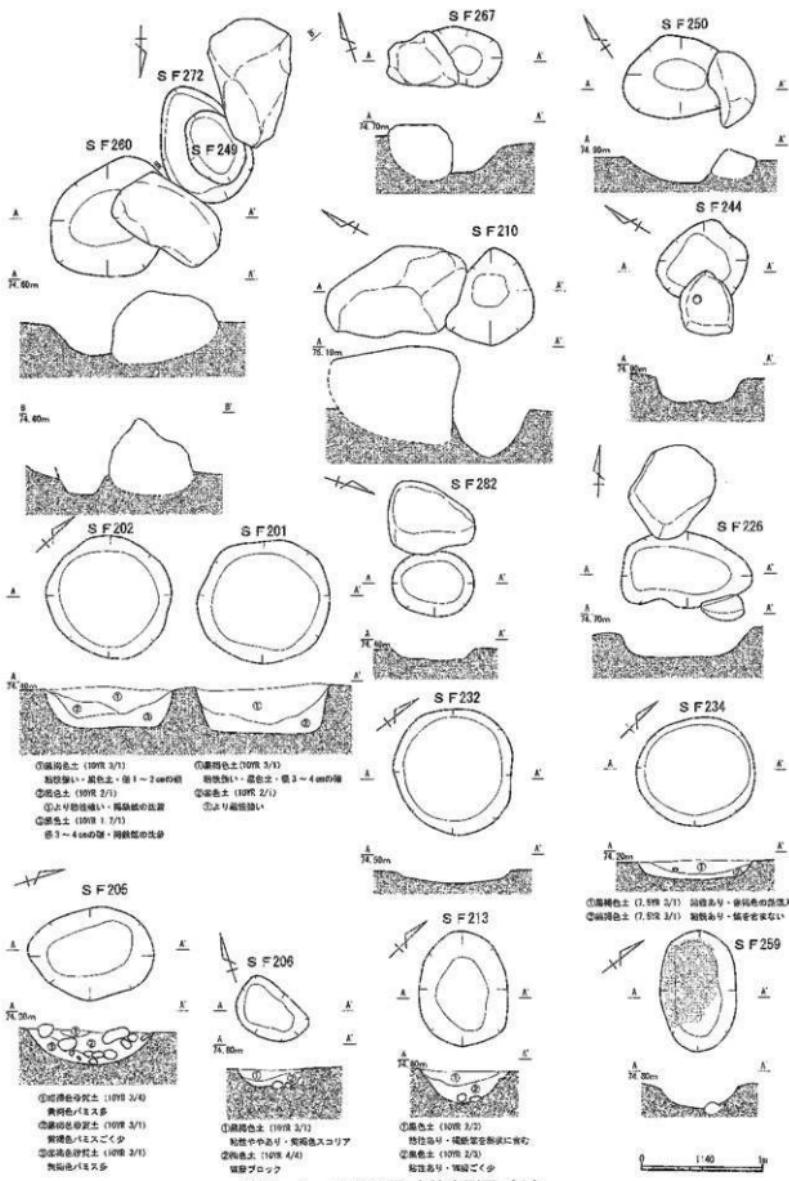


図18 1-1区VII層 土坑実測図(2)

③ 小穴

S P201～S P208 S P210～S P213 (図19)

S P201～208、S P210～213は、長径が最小のもので0.38m、最大のもので0.66mを計り、不整な円形ないしは楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは、最も浅いもので0.07m、最も深いもので0.20mである。

S P205～S P208は幾つかの小穴が近接し、グループを形成するように検出されている。いずれの小穴からも遺物は出土しておらず時期は不明である。

また検出状況から建物を想定する事が難しいこと、第Ⅱ期現地調査において環の間に構築された小穴を中世墓と認定したことから、これら的小穴についても、火葬骨だけを埋葬した墓で上部構造が流失した可能性が高いものと判断した。

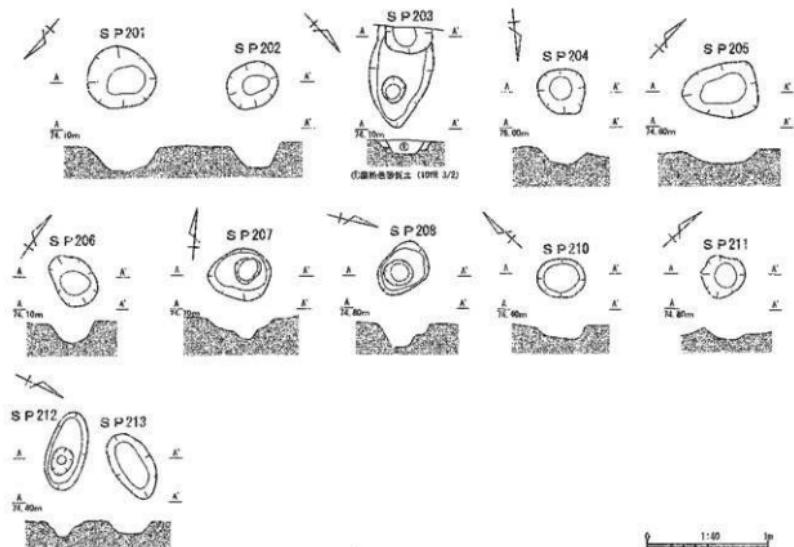


図19 1-1区 VII層 小穴実測図

表10 1-1区 VII層 小穴 (SP) 計測表

層位	編號	通称名	区	グリッド	部位	平面形状	長軸	短軸(m)	直径(m)	深さ(m)	地質	時間	備考
19	S P201		1-1	I-5	VII	円形	IV - V层	0.57	0.50	0.20	中世		
19	S P202		1-1	I-3	VII	円形	IV - V层	0.44	0.37	0.20	中世		
19	S P203		1-1	K-5	VII	椭円形	IV - V层	(0.39)	(0.22)	(0.11)	中世		
19	S P204		1-1	I-7	VII	円形	IV - V层	0.45	0.39	0.12	中世		
19	S P205		1-1	E-5	VII	椭円形	IV - V层	0.53	0.44	0.12	中世		
19	S P206		1-1	E-5	VII	椭円形	IV - V层	0.47	0.34	0.17	中世		
19	S P207		1-1	E-5	VII	椭円形	IV - V层	0.53	0.43	0.16	中世		
19	S P208		1-1	E-5	VII	椭円形	IV - V层	0.49	0.36	0.20	中世		
19	S P209		1-1	E-5	VII	椭円形	IV - V层	0.49	0.36	0.20	中世		
19	S P210		1-1	J-5	VII	円形	IV - V层	0.38	0.32	0.11	中世		
19	S P211		1-1	J-6	VII	円形	IV - V层	0.35	0.34	0.07	中世		
19	S P212		1-1	J-8	VII	椭円形	IV - V层	0.65	0.51	0.13	中世		
5-4	S P213		1-1	J-8	VII	椭円形	IV - V层	0.38	0.32	0.10	中世		
5-4	S P214		1-1	J-5	VII	椭円形	IV - V层	0.22	(0.30)	0.09	中世		
	S P215		1-1	I-5	VII	椭円形	IV - V层	0.35	0.18	0.10	中世		近くに大型の窓 奥側

④ 不明遺構

S X202・S X204(図20)

S X202はI-4・J-4グリッドで検出された。規模は長径3.48m、短径1.67m、検出面から底面までの深さは0.06mを計る。覆土中に炭化物と焼土を含む。また遺構の周辺でも広い範囲で焼土が認められた。

S X204もほぼ同様の規模を有する。北側に炭化物と焼土が集中し、中央から南半分には炭化した板材や丸木材が多量に含まれる。

第Ⅰ期現地調査時に2-1区で検出されたS X21123も、同様に長楕円形の土坑に炭化材が多量に含まれていたが、壁面や床面に焼けた痕跡は認められず炭化材の窯窯施設として報告されている(註4)。

しかし覆土内の焼土及び周辺での焼土の検出からS X202・S X204については焼成遺構の可能性が高いと考えられる。

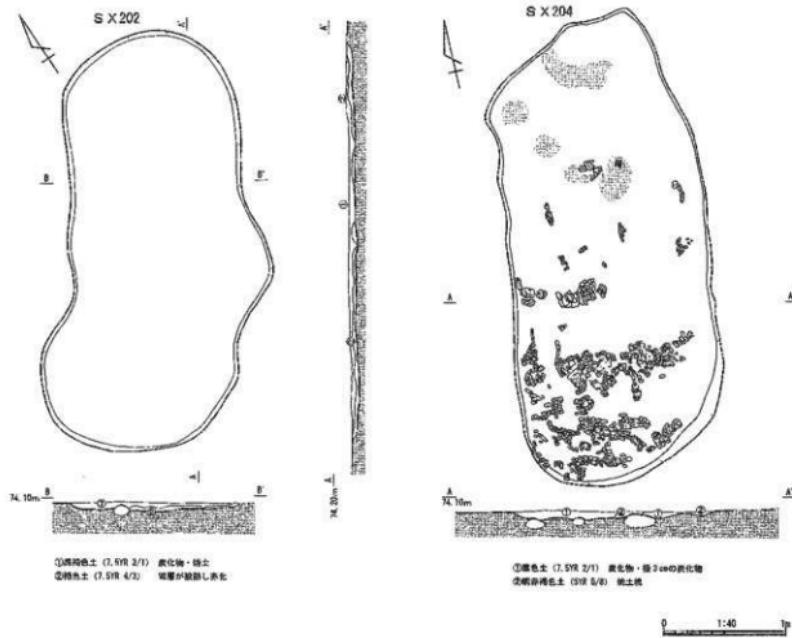


図20 1-1区VII層 不明遺構実測図

表11 1-1区VII層 不明遺構(S X) 計測表

測定	遺構	遺構名	IK	グリッド	層位	平面形態	面積	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
20		S X202	I-1	I-J-4	VII	長楕円形	IV・V層	3.48	1.67	0.06		小世	焼却施設か 炭化物 焼土
20	5-5	S X204	I-1	J-4	VII	長楕円形	IV・V層	3.93	1.08	0.07		中世	焼却施設か 炭化物 焼土

註1 小野真一・植松章八・尾形礼正・秋本真澄・平林得仁 1976 「煙場上・平歴遺跡」長泉町他

平川昭夫・狩田稔(編) 1982 「長久保城址(八幡山古墳・上野宿・大水溢) 大平遺跡」長泉町他

註2 馬劍財行雄・渡井英善 1994 「猪之頭養鶏場内遺跡」富士市教育委員会

註3・4 鈴木謙 1998 「大平遺跡」(財)静岡県振興文化財調査研究所 54頁、56~57頁

2 中世から近世の遺物

本来層位ごとに報告すべきであるが、遺跡形成過程における非文化的プロセスの影響が大きいこと、小破片が多く図化できるものが限定されることから、中世の遺物、近世の遺物のように時期ごとに区分して報告する（註1）。中世の遺物に関しては出土点数を別表に記載した（表13・19）。

（1）中世の遺物

瀬戸美濃製品（図21-1～14、写真図版9-1～3、11-1）

瀬戸美濃の製品は古瀬戸段階と大窯段階の製品が出土している。古瀬戸の製品が23点、大窯の製品が11点、古瀬戸後IV～大窯3の擂鉢が9点、合計43点である。

図21-1は後IV古段階の縁釉小皿、2は直縁大皿、3は卸目付大皿である。4は合子あるいは双耳小壺の蓋、5は古瀬戸後IV新の縁釉小皿、7は腰折皿である。

大窯段階の製品は、11は天目茶碗、12は2～3期の丸皿、13は4期の丸碗である。

志戸呂製品（図21-15～17、写真図版9-4、11-2）

志戸呂の製品は7点出土した。古瀬戸後IV新段階併行が4点、大窯期が3点である。図21-15の平碗、16の縁釉小皿はいずれも後IV新段階併行の製品。17は大窯期の皿類である。

貿易陶磁器（図21-18～23、写真図版10-2）

貿易陶磁器は15点出土し、その内6点を図化した。図21-18は龍泉窯系の青磁連弁文碗のA6類、大平連跡出土の貿易陶磁器の中では、古手の製品である。菊川市の伊平遺跡、裾野市大畑遺跡上屋敷地区、伊豆の国市御所之内遺跡第13次調査で出土例が報告されている（註2）。

20は白磁皿B群、21は染付皿B2群、22は染付碗C群、23は漳州窯系の染付碗で見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。

常滑製品（図22-1、写真図版10-1）

常滑製品は26点出土した。内1点を図化した。図22-1は11型式に比定される甕の口縁部。常滑の製品は3～4形式に比定される甕が4点、8形式に比定される甕が1点出土しているが、主体は11型式である。

内耳鍋 羽釜 瓦質陶器（図22-2～7、写真図版9-5）

羽釜は4点、内耳鍋は7点、瓦質陶器は1点出土した。図22-5と6はいずれも16世紀に比定される内耳鍋の口縁部。2、3、4は伊勢湾系の羽釜A類。7は瓦質の火鉢である。

かわらけ（図22-8～9、写真図版11-3）

かわらけは76点が出土し、接合後の破片数は63点である。小破片が多く、図化できたものは2点のみである。図22-8は口径が6.1cmの小型の製品で口縁に縫の付着が認められる。9は底径5cm前後の中型のかわらけである。

三島市の長伏・六反田遺跡、伊豆の国市の御所之内遺跡出土のかわらけと類似点が認められ、いずれも在地で焼かれた15世紀後半～16世紀前半の範疇に収まるものである（註3）。

(2) 近世の遺物(図22-10~18、写真図版II-4、5)

近世以降の遺物として近世から近代の陶磁器類が出土した。近世の遺物は60cm×40cm×10cmのコンテナで約2箱分が出土したが、小破片が多く壊化できたものはその内の9点である。

図22-14はくらわんか手の丸碗、12は瀬戸美濃系の灰釉の灯明受皿で19世紀に下る製品である。17は灰釉の筒型碗か香炉で18世紀中頃の信楽の製品か。18は瀬戸美濃系の播磨E類で18世紀後半の製品である。近世の遺物は18世紀後半から19世紀の製品が出土遺物の中で高い割合を占めている。

(3) 金属製品・石製品

銭貨(図23-1~6、写真図版II-6)

図23-1は至和元寶、2及び3は初鎔年1636年の寛永通寶。4と5は「文錢」と呼ばれる初鎔年が1668年の新寛永通寶である。

鉄砲玉(図23-7~13、写真図版II-6)

図23-7~13は鉄砲玉である。いずれも表面が白色を呈している。第Ⅰ期現地調査においても15点の鉄砲玉が出土しているが、蛍光X線による分析の結果全て鉛玉であった(註4)。

鉄張りの痕跡が12で確認できる。また、湯注ぎの痕跡と考えられるヘソが7で確認できた。酸化による径の変形により本来の直径を正確に測定する事はできないが、現状での最大径を「井上流近要流」の玉削表に当て換みると、7~9は直徑が12.0~12.2mmで二寸五分玉、10は直徑12.5mmで三寸五分玉、11~12は直徑が13.4~13.5mmで四寸玉、13は直徑14mmで四寸五分玉となる。

釘類(図23-14~16、写真図版II-6)

図23-15と16はいずれも現存する長さが約6.8cmで二寸五分釘と考えられる。金箱文夫氏の分類(金箱文夫 1984)における頭つくり出し類と考えられる(註3)。

石製品(図23-17~19、写真図版II-6)

図23-17は流紋岩製の手持ちの砥石、18も同じく流紋岩製の砥石。19は粘板岩製の基石の玉である。

註1 中世から近世の出土遺物の分類には、当研究所河合修氏の能力を得、特に中世の遺物に関しては、伊豆の国市教育委員会 池谷初恵氏にご教示頂いた。また、瀬戸美濃製品の編年については、藤澤良祐氏の編年をもとにした。貿易陶磁の編年については、「静岡県の中世社会(資料編)」(菊川シンポジウム実行委員会 2005)を参考にした。

註2 菊川シンポジウム実行委員会 2005 「静岡県の中世社会」(資料編)

註3 伊豆の国市教育委員会 池谷初恵氏のご教示による。

註4 鈴木 誠 1998 「大平遺跡」(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 132頁参照。

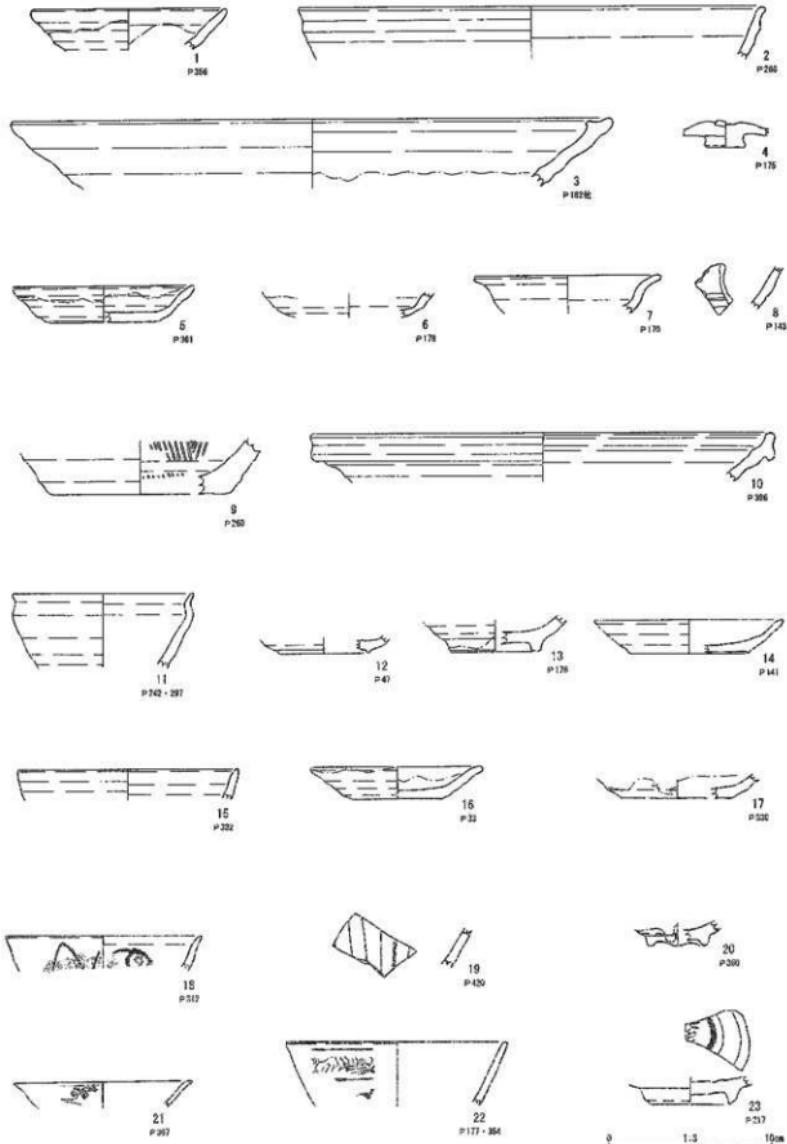


図21 I-1区出土遺物 (1) 潤戸美濃製品・志戸呂製品・貿易陶磁器

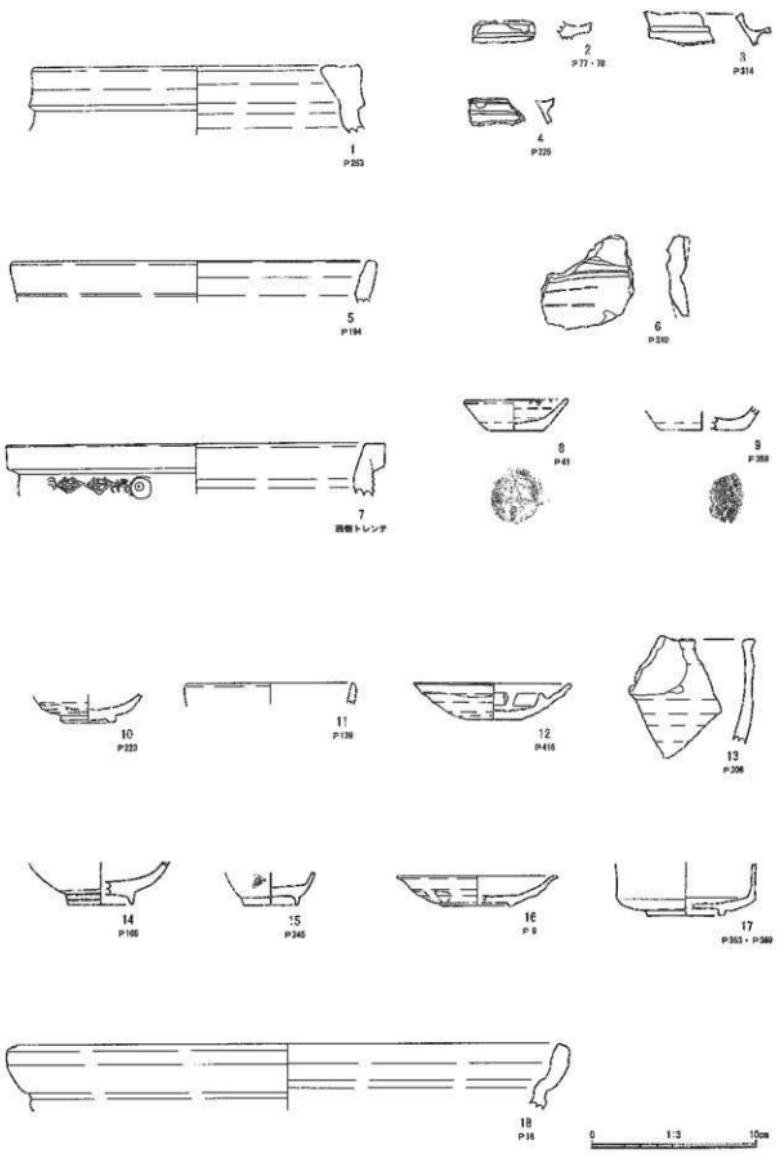


図22 1-1区出土遺物(2)常滑製品・羽釜・内耳鉢・かわらけ・近世陶磁器

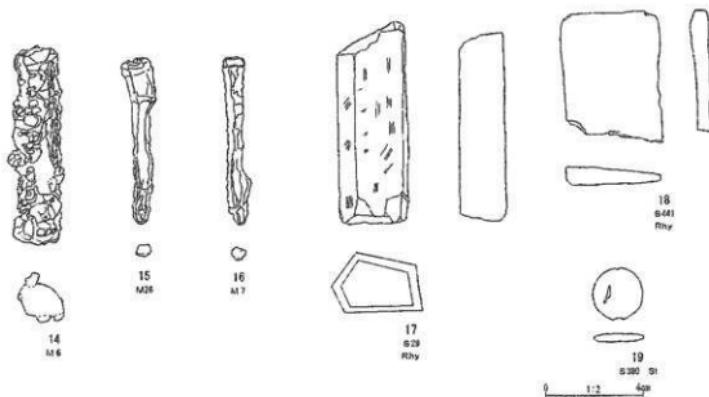
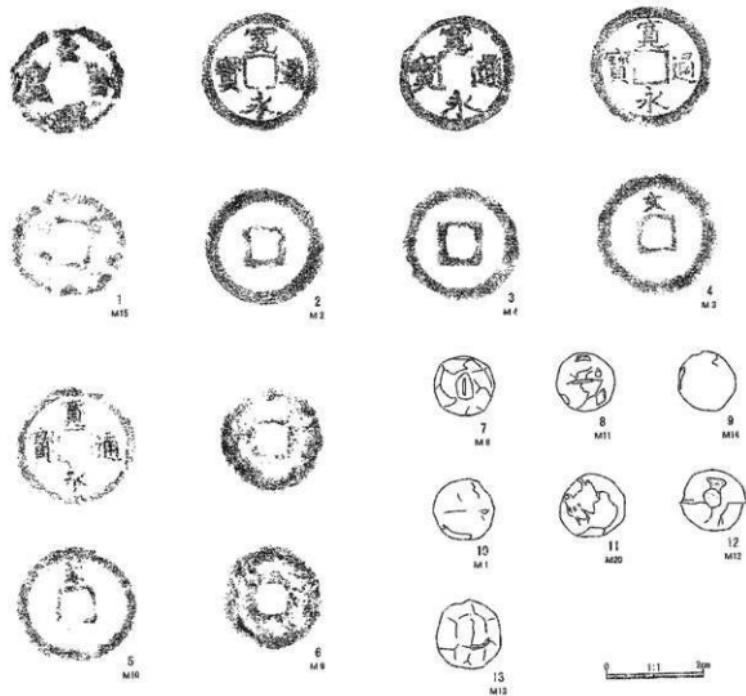


図23 1-1区出土遺物（3）金属製品・石製品

第3節 2-2区の遺構と遺物について

1 弥生時代の遺構と遺物

2-2区においては、弥生時代の遺物包含層（第VII層）が調査区の中央部下半において検出された。これは第II期現地調査で検出された遺物包含層（第IV層 註1）と同じ上層と考えられる。第II期現地調査においては4区の西側で限局的に検出されたが、本調査2-2区においても同様に調査区の中央下半の限られた範囲でのみの検出となった（図24）。

（1）弥生時代の遺構

S R02（図24）

S R02は、弥生時代の遺物が出上したVII層で検出された。調査区のほぼ中央に北東から南西方向に向かって流れる旧河川である。検出された規模は長さ19.50m、幅6.83mである。第II期現地調査で検出された河道路跡1と同一の河川と考えられる。S R02の左岸において遺物が集中して出土した。

（2）弥生時代の遺物（図26 写真図版12）

調査区中央部、F-23・24グリッド、E-24・25グリッドから出土している。出土した遺物は土器と石器である。

土器（第26図）

土器は全て条痕文系のものである。明らかに部位が分かるものを除くと、小片が多いいため、器種の判断は難しいが、大半は甕と考えられる。1は口縁部から肩部下半まで約1/3が残存している。胴部の張りは弱く直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに開く。器底全体は5本単位の茎束状原体による斜方向の条痕が施される。口縁部外面には横長の緩い押圧が施され、その直下は強いナデにより条痕を消している。内面は口縁部がナデ、胴部上位から下位にかけてはケズリの後ナデが施されている。2・3は甕の口縁部の破片である。調整方法は1と同じであり、また胎土・焼成も類似しており、同一個体の可能性も持つが、口縁部の開き方が異なる点、また口縁部直下のナデの輻の違いから別個体としておく。8は胴部下半から底部にかけての破片である。1と同様の斜方向の条痕が施される。底部裏面は剥離が著しく調整は不明である。この破片は調整・胎土・焼成から1と同一個体と考えられる。4~24は塑型部の破片である。茎束状原体による斜方向を中心とする条痕調整が施される点で共通している。条痕については太いタイプ（4・14）、細いタイプ（5・10・11・19）、中間的なタイプ（6・7・9・12・13・15・17・18・21・23・24）に分類できそうである。16・20は小片のため、また22は剥離のために分類できなかった。

石器（第27図）

1は黒曜石製の石鏃の未成品である。2は黒曜石製の楔形石器である。3は磨・叩石である。不整梢円形の火山融凝灰岩を用いたもので、両面に磨痕と敲打痕が認められるが、両端及び側縁の敲打は不明瞭である。4は鏃器である。角の稜が明瞭な輝石安山岩を用いて、3辺からの剥離を行うことで刃部を作り出している。

註1 佐野暢彦・水上毅子 2001『大平遺跡II』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究会 2頁

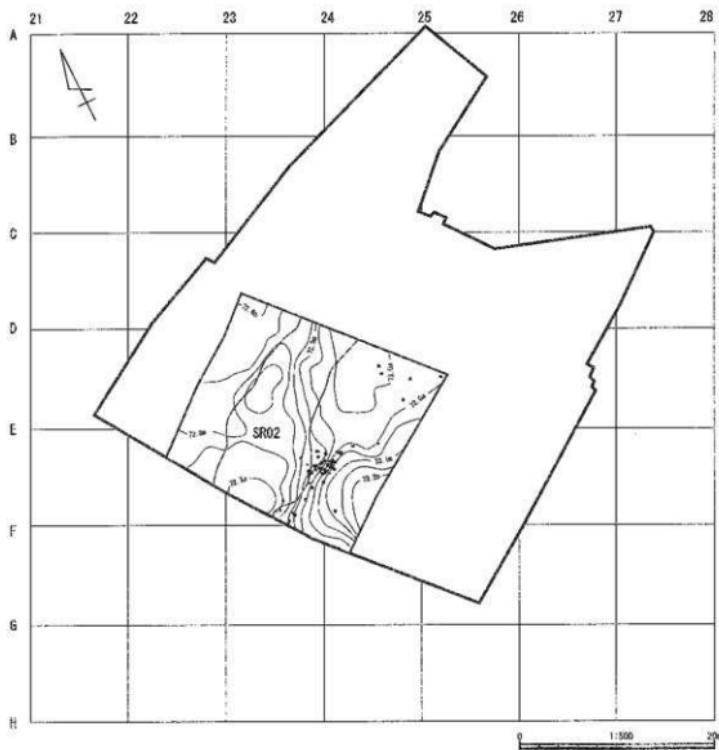
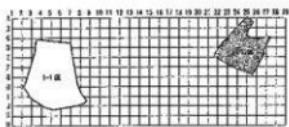


图24 2-2区 VII层 全体图

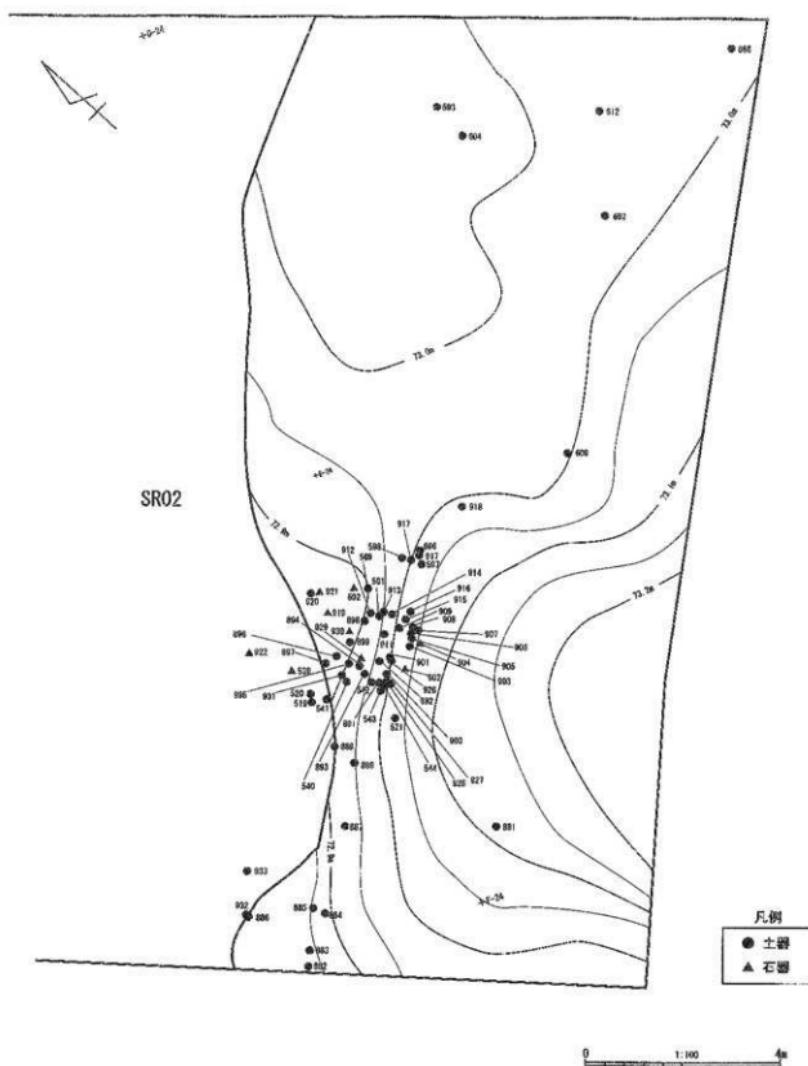


図25 2-2区 VII層 遺物出土状況図

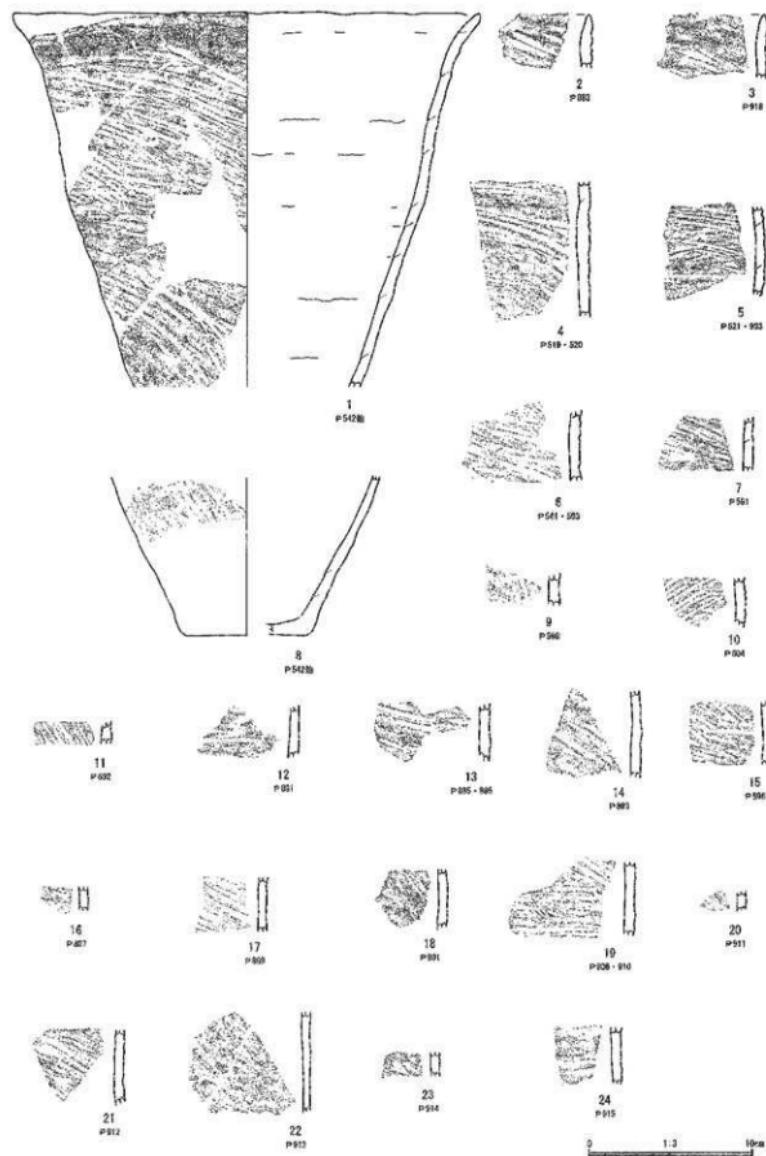


図26 2-2区出土遺物(1)弥生土器

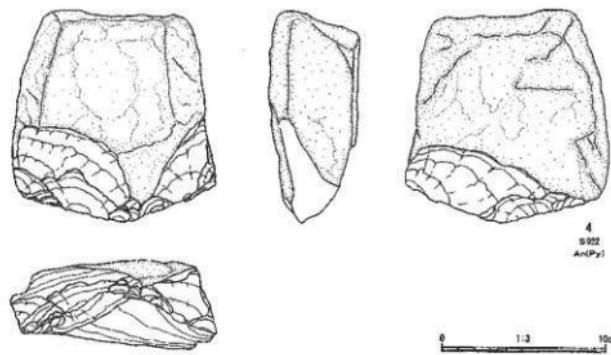
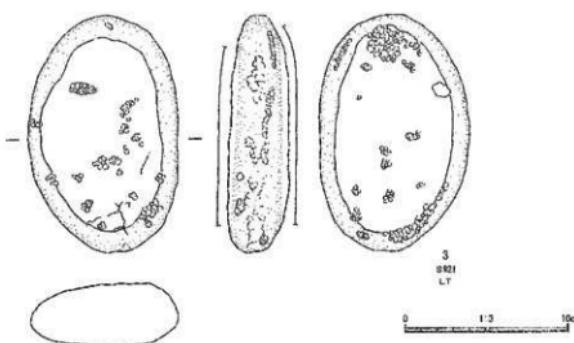


図27 2-2区出土遺物(2)石器

表14 2-2区 弥生時代出土遺物観察表

土器

標図	河東 面版	番号	グリッド	層位	法量(cm)			焼成	色調	胎土	備考
					口径 底径	腹厚	厚さ				
25-1	12-1	542枚	F-23	Ⅷ	(28.6)	23.0	0.6	良	に赤い黄褐色 10YR 4/3	径0.5~1mmの石英 硬0.5mmの板母・块石	口部
25-2	12-2	883	F-23	Ⅷ	-	3.3	0.7	良	黒褐色 2.5Y 3/1	石英 板母 硬0.5~1.0mmの白色粒子	口部
25-3	12-2	918	F-24	Ⅷ	-	3.9	0.6	良	黒褐色 2.5Y 3/2	径0.5~2mmの白色粒子 径0.5mmの透明・黑色・黑色粒子	口部
25-4	12-2	519+520	F-23	Ⅷ	-	8.3	0.8	良	に赤い黄褐色 7.5YR 6/4	径0.5mmの白色粒子 径0.5mmの透明粒子 径0.5~1mmの黑色粒子	腹部
25-5	12-2	521+533	F-23	Ⅷ	-	5.4	0.6	良	黒褐色 2.5YR 3/1	石英 硬0.5~1mmの白色粒子 径0.5mmの黑色・黑色粒子	腹部
25-6	12-2	541+563	F-23	Ⅷ	-	4.3	0.65	良	黒褐色 2.5YR 3/2	径0.5~1mmの白色・黑色・透明粒子 径0.5~2mmの黑色粒子	腹部
25-7	12-2	591	F-24	Ⅷ	-	3.3	0.6	良	褐 7.5YR 6/6	径0.5mmの透明・黑色粒子	腹部
25-8	12-3	542枚	F-23	Ⅷ	(2.3)	9.8	0.7	良	褐色 7.5YR 4/6	径0.5~3mmの白色粒子 径0.2mmの黑色粒子	底部
25-9	12-2	926	F-24	Ⅷ	-	1.9	0.65	良	褐 7.5YR 6/5	径0.5~2mmの黑色・透明粒子 径0.5mmの白色・黑色粒子	腹部
25-10	12-2	604	E-24	Ⅷ	-	2.05	0.6	良	に赤い黄褐色 5YR 5/4	豊富 (0.5~1)mmの白色粒子 径0.5mmの透明粒子	腹部
25-11	12-2	692	E-24	Ⅷ	-	1.4	0.65	良	黒褐色 10YR 3/2	青白 透0.5~1.5mmの白色粒子 径0.5mmの透明・金色粒子	腹部
25-12	12-2	881	F-24	Ⅷ	-	3.01	0.6	良	に赤い黄褐色 10YR 5/4	透0.5~1.5mmの白色粒子 径0.5mmの透明・黑色粒子	腹部
25-13	12-2	885+895	F-23	Ⅷ	-	3.7	0.7	良	赤褐色 2.5Y 3/2	豊富 (0.5~1)mmの白色粒子 径0.5mmの透明粒子	腹部
25-14	12-2	893	F-23	Ⅷ	-	5.31	0.65	良	に赤い黄褐色 10YR 5/4	透0.5~1mmの白色・透明粒子 径0.5~2mmの黑色粒子	腹部
25-15	12-2	956	F-23	Ⅷ	-	3.9	0.6	良	暗灰褐色 2.5Y 4/2	透0.5~1mmの白色粒子 径0.5mmの透明粒子	腹部
25-16	12-2	897	F-23	Ⅷ	-	1.5	0.65	良	黒褐色 2.5Y 3/2	透0.5~1.0mmの白色粒子	腹部
25-17	12-2	999	F-23	Ⅷ	-	3.3	0.55	良	黒褐色 2.5Y 3/2	豊富 (0.5~1)mmの白色粒子 径0.5mmの透明・黑色粒子	腹部
25-18	12-2	901	F-24	Ⅷ	-	3.7	0.55	良	に赤い黄褐色 7.5YR 6/4	透0.5~1mmの白色粒子 径0.5mmの透明・黑色粒子	腹部
25-19	12-2	908+910	F-24	Ⅷ	-	4.5	0.65	良	に赤い黄褐色 10YR 5/4	透0.5~1mmの白色粒子 径0.5mmの透明・黑色粒子	腹部
25-20	12-2	911	F-24	Ⅷ	-	1.2	0.65	良	灰黃褐色 10YR 4/2	透0.5~1mmの白色粒子 径0.5mmの透明・黑色粒子	腹部
25-21	12-2	912	F-24	Ⅷ	-	4.4	0.65	良	明灰褐色 10YR 6/6	透0.5~1mmの白色・透明粒子 径0.5mmの黑色粒子	腹部
25-22	12-2	913	F-24	Ⅷ	-	6.2	0.5	良	褐 7.5YR 5/5	透0.5~2mmの白色粒子 透0.5~1mmの透明粒子・黑色粒子	腹部
25-23	12-2	914	F-24	Ⅷ	-	1.3	0.55	良	に赤い黄褐色 10YR 5/4	透0.5~1mmの白色粒子 透0.5mmの透明・黑色粒子	腹部
25-24	12-2	915	F-24	Ⅷ	-	3.4	0.65	良	に赤い黄褐色 2.5YR 6/4	透0.5mmの白色・透明粒子	腹部

石器

標図	河東 面版	番号	グリッド	四辺	法量(cm)				器形	石材	備考
					高さ	幅	厚さ	重量(g)			
27-1	12-5	919	F-23	Ⅷ	2.4	1.53	0.65	1.6	石斧	墨縞石(加賀市ヶ崎村)	未削留
27-2	12-5	839	F-23	Ⅷ	2.7	2.3	0.9	3.4	斧形石器	墨縞石(加賀市ヶ崎村)	
27-3	12-6	921	F-23	Ⅷ	14.6	9.2	3.7	545.5	石斧	火山礫質灰岩	
27-4	12-4	922	F-23	Ⅷ	13.1	12.4	3.05	1250	鉤斧	新石器時代	

2 中世から近世の遺構

2-2区では旧河川、溝状遺構、土坑、小穴が検出された。以下検出層位ごとに報告する。

(1) IV層検出の遺構

IV層では土坑2基を検出した。

土坑

S F138・S F139 (図28)

S F138はB-24グリッドで検出された。規模は長径0.77m、短径0.61m、検出面から底面までの深さは0.05mである。平面形は梢円形を呈する。南側に一段低いピット状の窪みを有する。覆土からかわらけと骨片が出土している。

S F139もB-24グリッドで検出された。規模は長径1.12m、短径0.67m、検出面から底面までの深さは0.04mである。平面形は梢円形を呈する。覆土中に径20cm前後の砾を含み、骨片が出土した。

S F138・S F139は今回の調査において骨片が出土した唯一の土坑である。

(2) V層検出の遺構

V層では溝状遺構1条を検出した。

溝状遺構

S D102 (図28)

S D102はG-25グリッドで検出された。規模は長さ2.38m、最大幅0.60m、検出面から底面までの最大の深さは0.14mを計る。断面の形態は浅いU字状で、西側から東側に向かって傾斜している。遺物は出土しておらず時期・性格等は不明である。

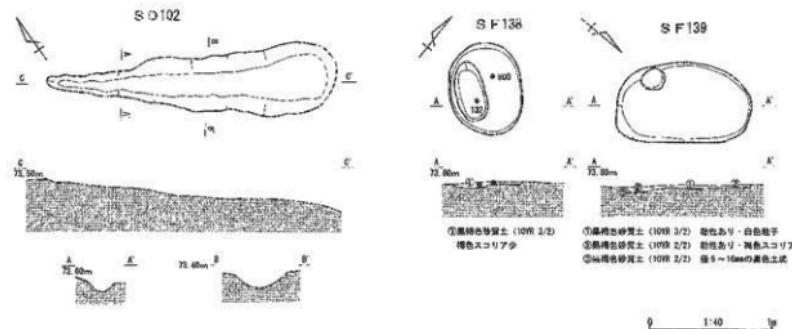


図28 2-2区 IV・V層 溝状遺構・土坑実測図

表15 2-2区 IV・V層土坑 (S F)・溝状遺構 (S D) 計測表

測定	層位	位置名	区	グリッド	面積	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	層位	形態	備考
28		S F138	2-2	B-24	IV	梢円形	IV層	0.77	0.61	0.05	かわらけ	中世	D-2	下層で骨片
28		S F139	2-2	B-24	IV	梢円形	IV層	1.12	0.67	0.04	かわらけ	中世	C	下層で骨片土

測定	層位	位置名	区	グリッド	面積	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	層位	形態	備考
15		S D102	2-2	G-25	V	U字形		2.38	0.60	0.14		中世		

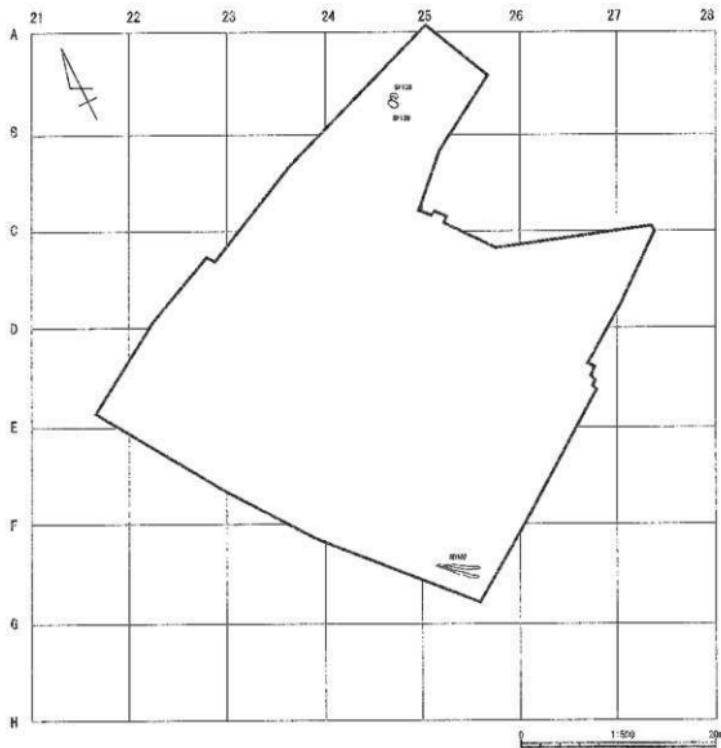
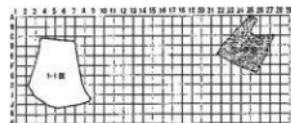


図29 2-2区 V層 道構分布図

(3) VII層検出の遺構

VII層で検出された遺構は旧河川3基、溝状遺構1条、土坑19基、小穴13基である。

① 旧河川

S R03 (図31)

S R03は調査区の東端を北東から南西に向かって流れる旧河川で、検出された規模は長さ27.6m、幅4.1m、深さ1.5mである。粗粒の砂と細粒の砂が互層となって堆積している。その土層中位で径20cmから40cmの砾が組み合わされている様子が確認できたことから、ある時期に石組の護岸が新たに構築されたと考えられる。遺物は常滑3~4形式、9~11形式の壺、古瀬戸後IV新の擂鉢、古瀬戸後IV新~大窯I期の擂鉢、貿易陶磁青磁碗B4類、瀬戸美濃大窯4期の丸皿、15世紀後半のかわらけ等が出土している(写真図版15)。

S R04 (図31)

S R04はF-25・F-26グリッドで検出された。北西から南東方向に向かう。検出された規模は、長さ約6.8m、幅約4.3m、深さ0.2mである。粒の細かい砂とシルト質の砂が堆積しており、穧やかな流れを窺わせる河川である。遺物は古瀬戸後IVの直線人皿、常滑11形式の鉢、15世紀後半のかわらけが出土している(写真図版16-1)。

S R05 (図32)

S R05は調査区の北端で検出された旧河川であるが、検出できたのはごく一部で主体は調査区の北側となる。検出された規模は長さ約25m、最大幅5.9m、検出面から底面までの深さは0.3mである。遺物は古瀬戸後IIIの平碗、常滑9~11形式の壺、15世紀後半のかわらけが出土している(写真図版16-1)。

② 溝状遺構

S D201

S D201はF-22グリッドで検出された。規模は長さ約1.06m、最大幅0.25m、検出面から底面までの最大の深さは0.09mである。断面の形態はU字状である。遺物は出土しておらず時期・性格等は不明である。

③ 土坑

S F284・S F285・S F286・S F289・S F290・S F291・S F292・S F293・S F294・S F295
S F296・S F297 (図33)

S F302・S F288・S F287・S F299・S F300・S F301・S F298 (図34)

いずれも円形の土坑で、最大のもので長径1.27m、最小のもので長径0.53mを計る。S F284からS F297については、前述の埋葬施設と農業用施設の双方の可能性がある円形土坑と判断した。S F289・S F290・S F291・S F292・S F294・S F296・S F287・S F299からは15世紀後半のかわらけが出土している。覆土は砂質の土に炭化物、鉄分を含むものが多い。S F287からS F302はやや形態の異なる円形土坑である。S F302からは15世紀代の羽釜A類が出土している。S F300は底部に礫が認められ、その下部で炭化物が検出された。S F298・S F301は人為的な埋め戻しの痕跡が認められた。

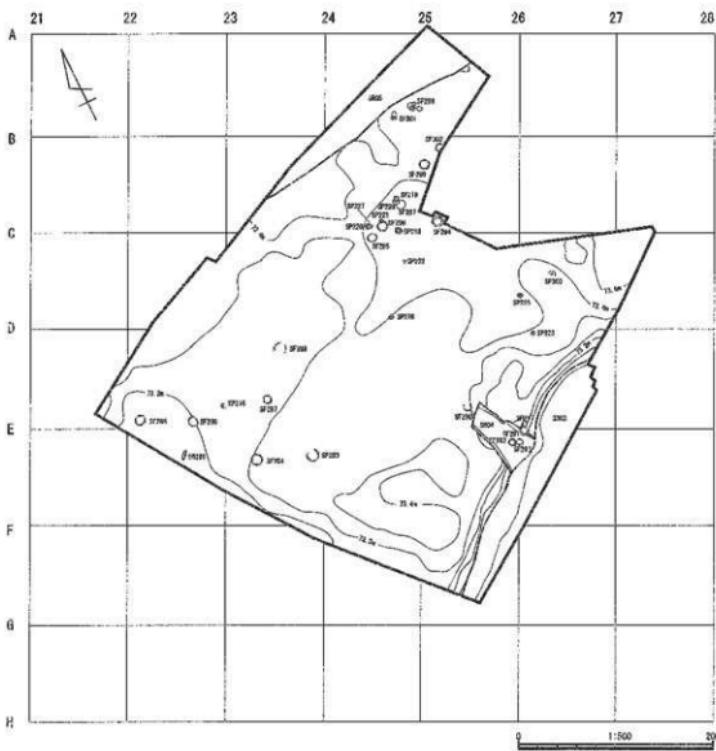
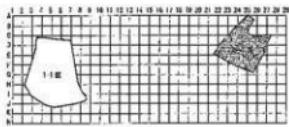


図30 2-2区 VII層 遊漿分布図

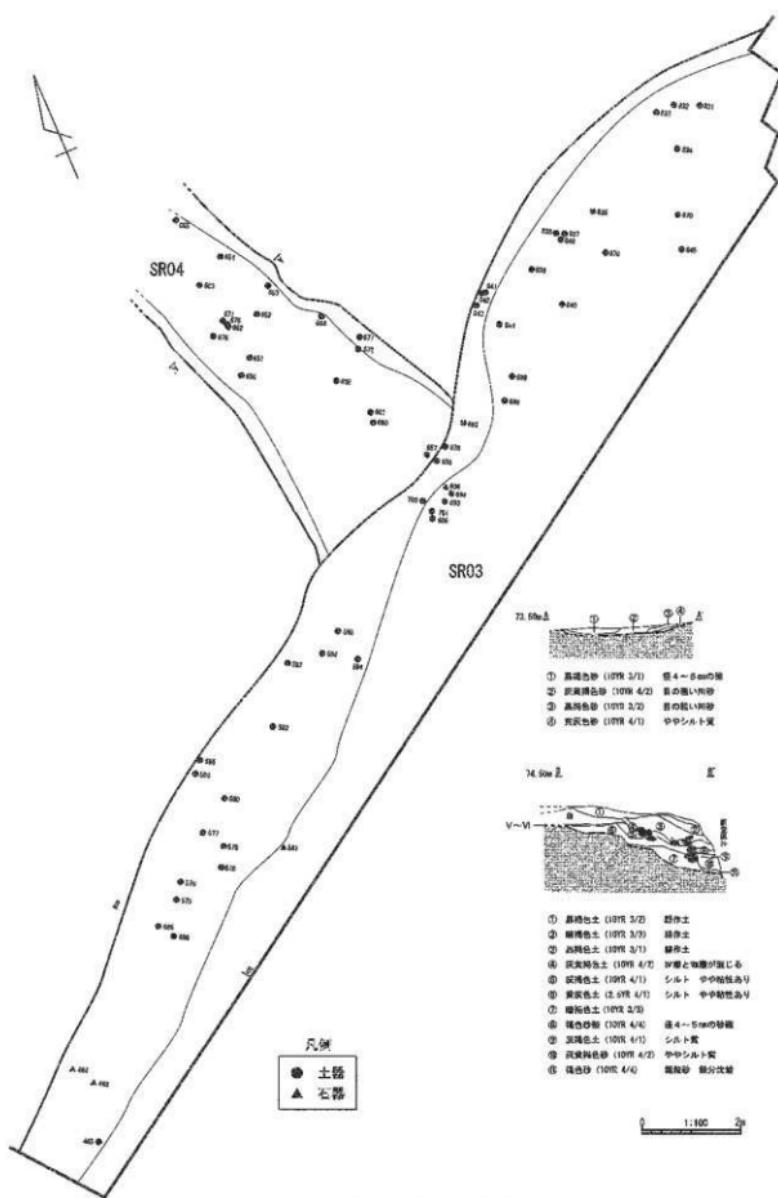


図31 2-2区 VII層 旧河川実測図(1)

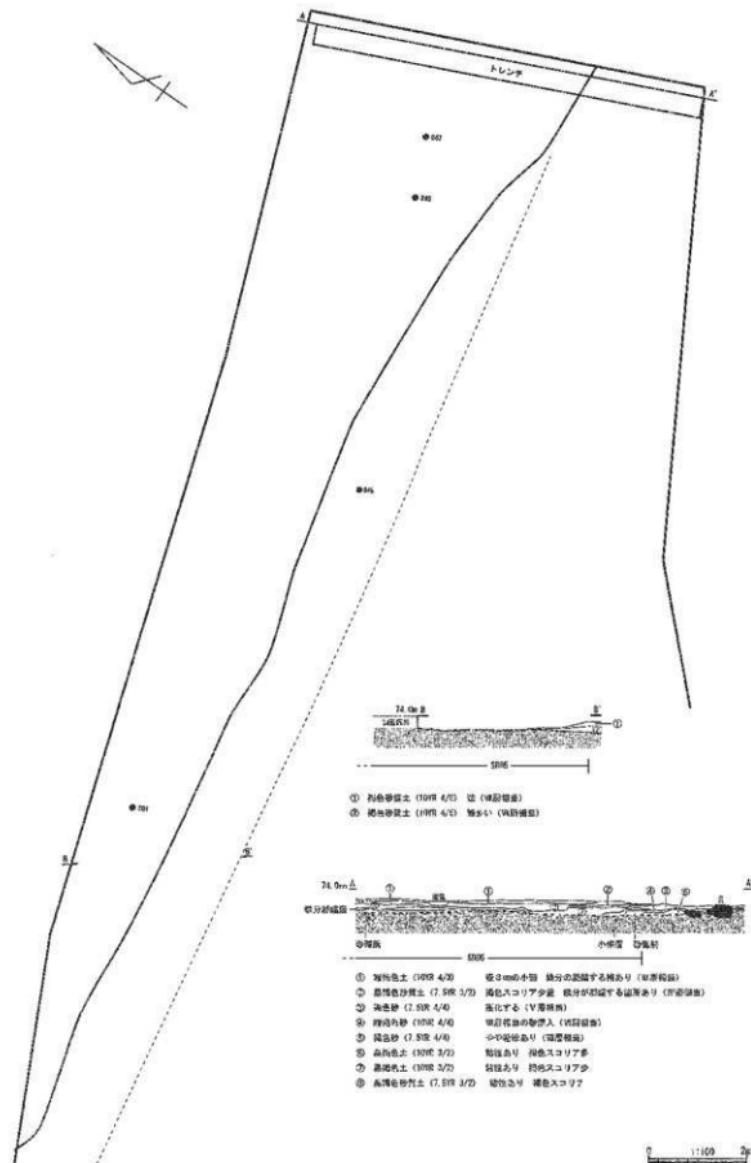


図32 2-2区 VII層 旧河川実測図 (2)

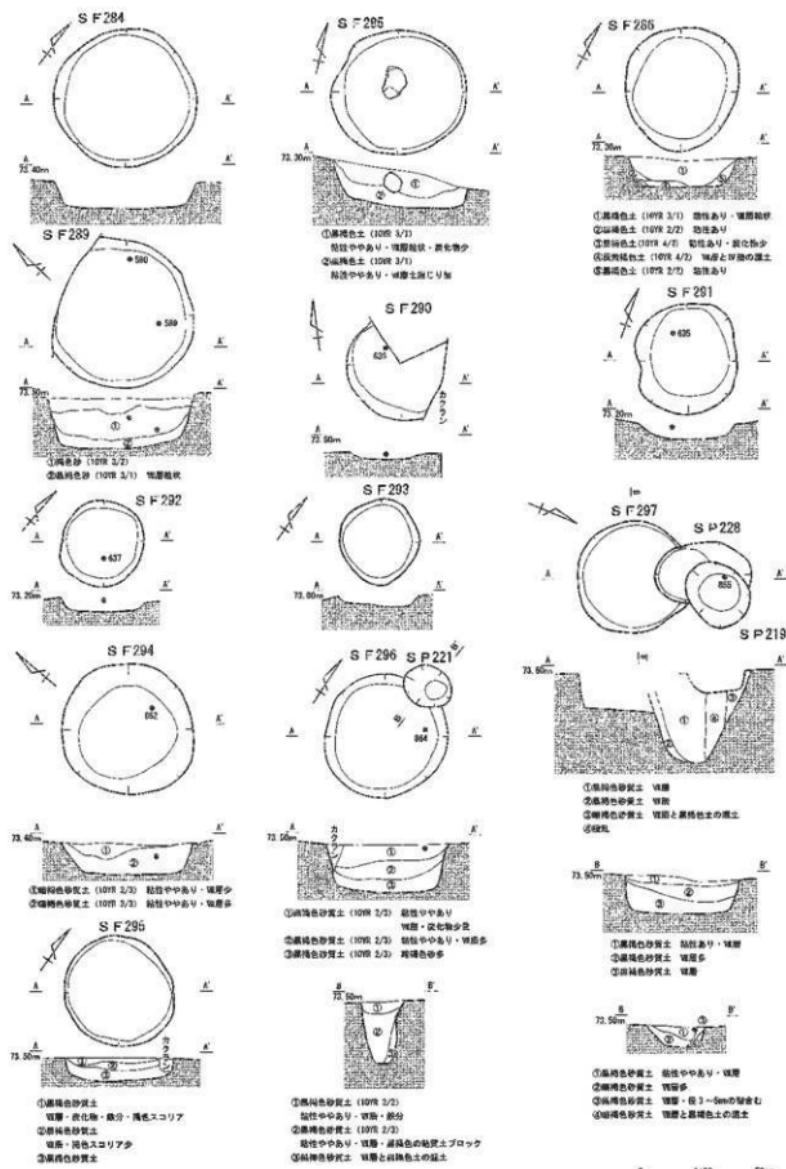


図33 2-2区VII層 土坑実測図(1)

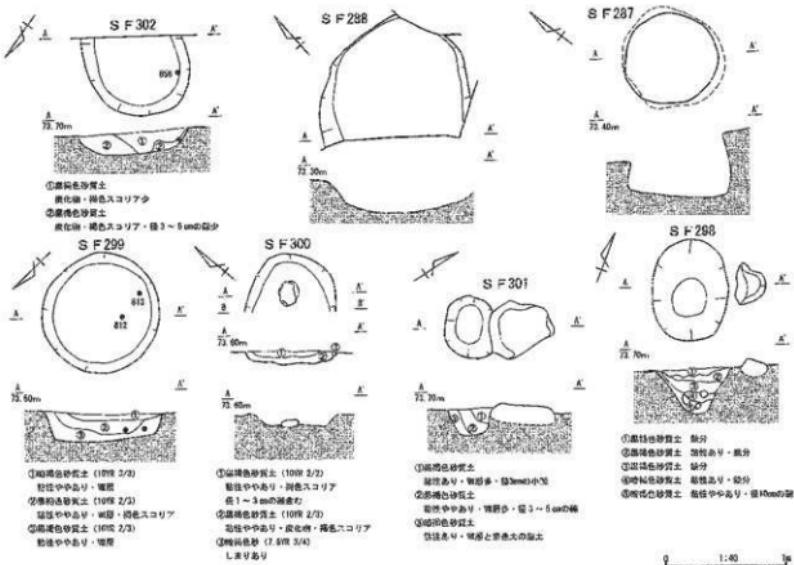


図34 2-2区 VII層 土坑実測図 (2)

表16 2-2区 VI層 旧河川 (SR)・溝状遺構 (SD)・土坑 (SF) 計測表

SR													
番号	深さ	底面名	区	グリッド	点位	平面形状	壁上	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	造物	時期	参考
25		SR02	2-2	E-24	VE	両面削		19.50	5.83	0.88	骨壺1~4(足)、 骨壺5~11(腰腹) 骨壺12(頭蓋) 古墳内防波堤	新石	新石
31		SR03	2-2	E-26 F-26 G-25	VI	両面削		27.6	4.1	1.5	古墳内防波堤・木柱(1根) 古墳内防波堤・木柱(1根) 骨壺13(腰腹)	中世~ 近世初期	階段用の石踏み
31		SR04	2-2	F-25 Y-25	VE	両面削		6.8	4.3	0.2	古墳内防波堤(大田) 古墳内防波堤(大田)	中世~ 近世初期	
32		SR05	2-2	C-23 E-24	VE	両面削		25.0	5.9	0.3	古墳内防波堤(小室) 古墳内防波堤(小室)	中世	

SD													
番号	深さ	底面名	区	グリッド	点位	平面形状	壁上	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	造物	時期	参考
	SD01	2-2	E-22	VE				1.09	0.22	0.09		中世	
SF													
番号	深さ	底面名	区	グリッド	点位	平面形状	壁上	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	造物	時期	参考
33	7-1	S F284	2-2	E-22	VE	円形	V型	(1.17)	(1.15)	0.22	中・近世	D-1	
33	8-2	S F285	2-2	E-22	VE	円形	V型	1.11	1.10	0.28	中・近世	C	
33		S F286	2-2	E-22	VE	円形	V型	1.03	0.91	0.21	中・近世	D-1	
34		S F287	2-2	E-23	VE	円形	V型	0.79	0.75	0.42	かわらけ	D-1	
34		S F288	2-2	E-23	VE	円形	V型	(1.22)	(1.13)	0.29	中・近世	D-1	
33	E-3	S F289	2-2	E-23	VE	円形	V型	1.27	(1.15)	0.26	かわらけ	D-1	
33		S F290	2-2	E-25	VE	円形	V型	0.91	(0.85)	0.05	かわらけ	D-1	
33		S F291	2-2	E-25	VE	円形	V型	0.95	0.90	0.12	かわらけ	D-1	
33		S F292	2-2	E-25	VE	円形	V型	0.73	0.65	0.09	かわらけ	D-1	
33	E-4	S F293	2-2	F-25	VE	円形	V型	0.77	0.70	0.07	中・近世	D-1	
33	E-5	S F294	2-2	F-25	VE	円形	V型	1.14	1.09	0.25	かわらけ	D-1	
33		S F295	2-2	F-24	VE	円形	V型	0.93	0.87	0.19	中・近世	D-1	
33		S F296	2-2	F-24	VE	円形	V型	1.01	1.01	0.39	かわらけ	D-1	
33		S F297	2-2	C-24	VE	円形	V型	0.97	0.94	0.31	中・近世	D-1	
34	7-2	S F298	2-2	B-24	VE	楕円形	褐色土と黄色 褐色土と瓦屑	(0.33)	(0.62)	(0.37)	中・近世	D-2	人為的な埋戻し
34	7-3	S F299	2-2	C-21-D5	VE	円形	V型	1.00	0.96	0.22	かわらけ	D-1	
34	7-4	S F300	2-2	D-26	VE	(楕円形)	V型	(0.47)	(0.74)	0.11	中・近世	C	底部に石塊含む
34	7-5	S F301	2-2	B-24	VE	褐色土と黄色 褐色土と瓦屑	V型	0.53	(0.35)	0.22	中・近世	D-2	人為的な埋戻し
34		S F302	2-2	C-25	VE	(楕円形)	V型	(0.51)	0.82	0.18	羽茎丸瓶	C	

④ 小穴

S P218・S P220・S P227・S P222・S P225・S P217・S P224・S P226・S P216 (図35)
S P219・S P228 (図33)

S P218はC-24グリッドで検出された。規模は径0.66m、検出面から底面までの深さ0.79mである。底面で台石が出土し、その下部に小穴が検出されており本遺跡で検出された小穴の中では唯一の形態である。また覆土中から、かわらけ、古瀬戸後期の平陶、15世紀代に比定される羽釜A類が出土した。

S P222はD-24グリッドで検出された。規模は径0.31m、検出面から底面までの深さ0.14mである。中央に磨石と礫が樹立した状態で出土した。S P224はD-E-26グリッドで検出された。規模は径0.44m、検出面から底面までの深さ0.16mを計測した。覆土から古瀬戸後期新段階から大窯3期の船鉢が出土している。かわらけの年代はいずれも15世紀後半の範囲に収まる。S P218以外の小穴については他の調査区で検出された小穴と形態が類似している。

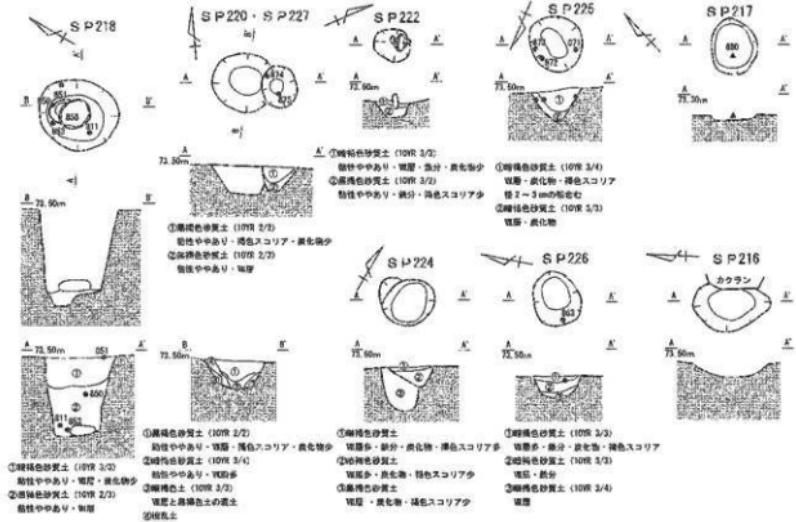


図35 2-2区 VII層 小穴実測図

表17 2-2区 VII層 小穴 (SP) 計測表

順番	開拓	深度(m)	X	Y	グリッド	形状	下部の土質	壁	S.F.			層物	層型	備考	
									高さ(m)	幅(m)	厚さ(cm)				
35	S P216	2-2	E-22	V	円形	VII層	0.62 (0.35)	0.12				台石・かわらけ・ 古瀬戸後期平陶(31)	中近世		
35	S P217	2-2	D-26	V	円形	VII層	0.47	0.37	0.05				中近世		
33	S P218	2-2	C-24	V	複円形	VII層	0.56	0.27	0.17			台石・かわらけ・ 古瀬戸後期平陶(31)	中近世		
35	S P220	2-2	C-24	V	円形	VII層	0.50	0.50	0.24			かわらけ	小近世		
33	S P221	2-2	C-24	V	複円形	VII層	0.41	0.34	0.51			かわらけ	小近世		
33	S P222	2-2	D-24	V	円形	VII層	0.31	0.27	0.14			磨石	中近世		
35	S P223	2-2	D-26	V	複円形	VII層	0.44	0.29	0.36			磨石片	小近世		
35	S P224	2-2	D-26	V	複円形	VII層	0.44	0.37	0.16			古瀬戸後期 ～大窯3期陶(33)	中近世		
35	S P225	2-2	D-26	V	円形	VII層	0.46	0.45	0.25			かわらけ	中近世		
35	S P226	2-2	D-26	V	円形	VII層	0.45	0.38	0.18			かわらけ	中近世		
35	S P227	2-2	C-24	V	複円形	VII層	0.35	0.28	0.22			かわらけ	中近世		
33	S P228	2-2	C-24	V	複円形	VII層	0.79	(0.45)	0.74			中近世			

3 中世から近世の遺物

(1) 中世の遺物

瀬戸美濃製品（図36、図37-1～7、写真図版13-1～3）

瀬戸美濃製品は85点出土した。内訳は古瀬戸段階が41点、大窯段階が19点、古瀬戸後IV新から大窯3期の擂鉢が25点である。その内26点を図化した。

図36-1は古瀬戸前期の瓶子。3～4は古瀬戸後IIIに比定される縁軸小皿、5も同じく後IIIの灰釉の平碗。6は後IV古段階の縁軸小皿。7は後IV段階の縁軸小皿である。8はS.R.03出土の後IV新段階の縁軸小皿である。16は後IV新段階から大窯1期に比定される擂鉢、17～18は後IV新段階から大窯3期に比定される擂鉢である。

図37-1は大窯1～2期の灰釉の丸皿、2～5は大窯4期の志野丸皿、6～7はいずれも大窯4期から登窯1の志野丸皿である。

志戸呂製品（図37-8）

志戸呂の製品は大窯4期の灰釉の丸皿1点が出土した。

貿易陶磁器（図37-9～11、写真図版13-4）

貿易陶磁器は25点が出土した。内訳は青磁16点、白磁1点、染付8点である。内3点を図化した。図37-9～10は青磁連弁文碗で線描によって連弁を表現するB4群。11は染付皿B群、疊付に砂目が認められる。

常滑製品（図37-12～13、写真図版14-1）

常滑製品は50点が出土した。図37-12は9型式の甕、13はII形式の鉢の底部で自然釉が認められる。

内耳鍋 羽釜 瓦質陶器（図37-14～15、写真図版13-5）

内耳鍋は11点、羽釜は9点、瓦質陶器は2点出土した。図37-14は瓦質の燭台の脚部と判断した。15は内面に意図的に漆を塗布する瓦質陶器。漆を塗布する瓦質陶器については、天日茶碗が想起されるが器形から皿類としておく。

かわらけ（図37-16～22、写真図版14-2～5）

かわらけは369点出土した。接合後の破片数は229点である。小破片が多く図化できたものは6点である。口径が6cm前後の小型のもの（図37-18、19）、11cmの中型のもの（図37-20）、16cmの大型のものが出土している（図37-15）。1～1区出土のかわらけと同様、いずれも15世紀後半～16世紀頃に比定される。

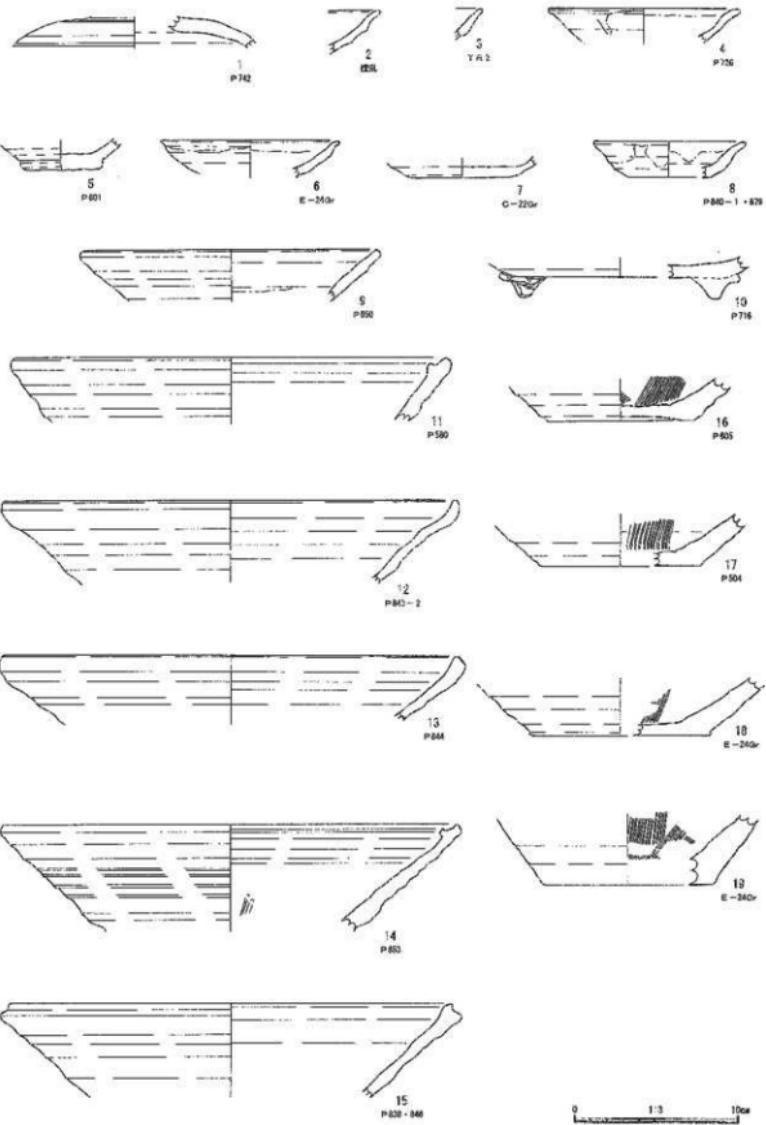


図36 2-2区出土遺物（1）瀬戸美濃品

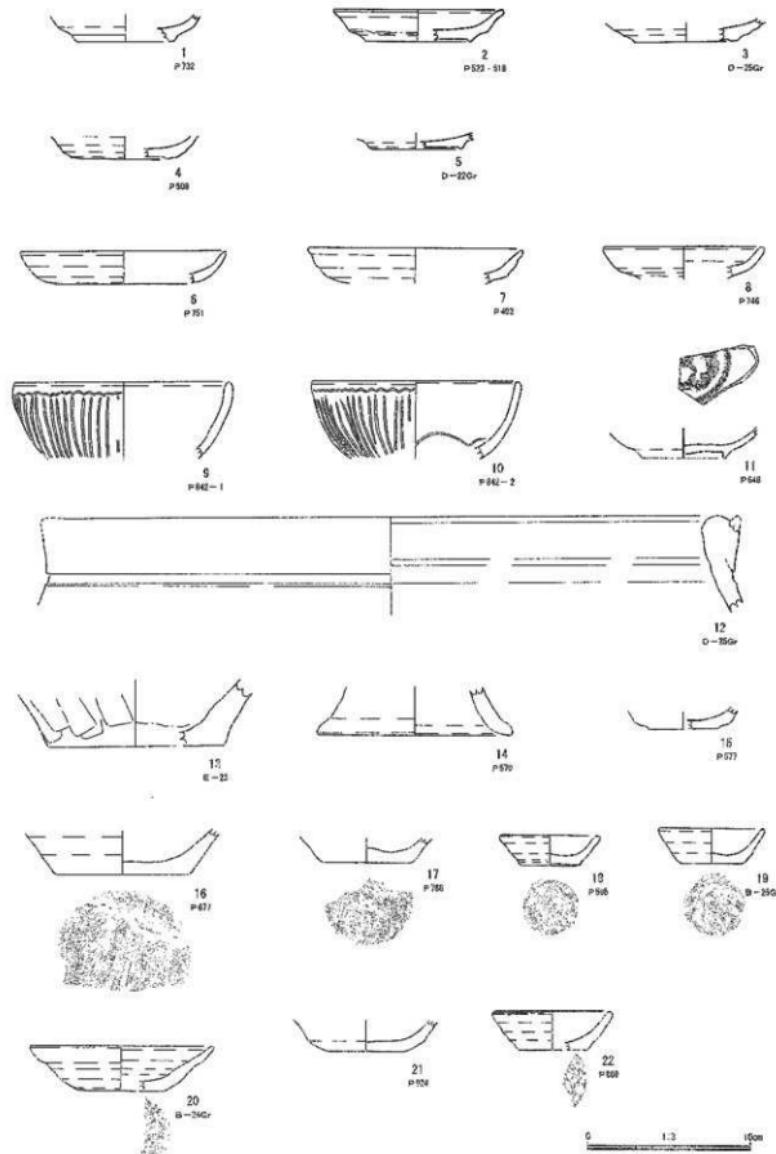


図37 2-2区出土遺物（2）瀬戸美濃製品・志戸呂製品・貿易陶磁器・常滑製品・瓦質陶器・かわらけ

(2) 近世の遺物（図38-1～10、写真図版14-6）

近世の陶磁器類は60cm×40cm×10cmのコンテナで約1箱分出土したが、1-1区と同様に図化できたものはわずかである。

図38-1は連房式登鹿頭の志野丸碗、4は肥前系胸櫛の碗、いわゆる唐津の刷毛目柄で18世紀代の製品、5は瀬戸美濃系の鉄船の香炉。6は肥前系の仏飯器。7は肥前系の紅猪口、8も瀬戸美濃系の紅猪口でいずれも19世紀に下る製品。9は肥前系の筈型碗、10は肥前系の丸碗である。

近世の遺物は18世紀後半から19世紀の製品が出土遺物の中で高い割合を占めている。

(3) 金属製品・石製品

金属製品（図38-11～16、写真図版14-7）

銭貨（図38-11～15）

図38-11は初鋤年代1038年の皇宋通寶（真書）、12は初鋤年代1054年の至和通寶（篆書）、13は初鋤年代1056年の嘉祐通寶（真言）である。12、13はそれぞれS R02、S R03の出土である。14は初鋤年代1094年の紹聖元寶（行書）、15は初鋤年代1368年の洪武通寶である。

2-2区で出土した銭貨は旧河川及び包含層からの出土であるが、皇宋通寶、綱聖元寶、洪武通寶については第Ⅰ期現地調査の3区において副葬品として土坑から出土している（註1）。また既述した通り、1-1区出土の銭貨は寛永通寶が主体であったのに対し、2-2区においては源来銭が主体を成すという特徴が認められた。

註1 鈴木 崇 1998『太平遺跡』（財）普通県埋蔵文化財調査研究所 143頁

石製品（図38-18、写真図版15-2）

図38-18は流紋岩製の手持ちの砥石である。上下を欠損しているが現存する長さが10.7cm、幅が2.9cm、厚さは最大で1.4cmを計る。長軸の断面形は二等辺三角形を呈しており使用面を反転させながら使い込まれている。

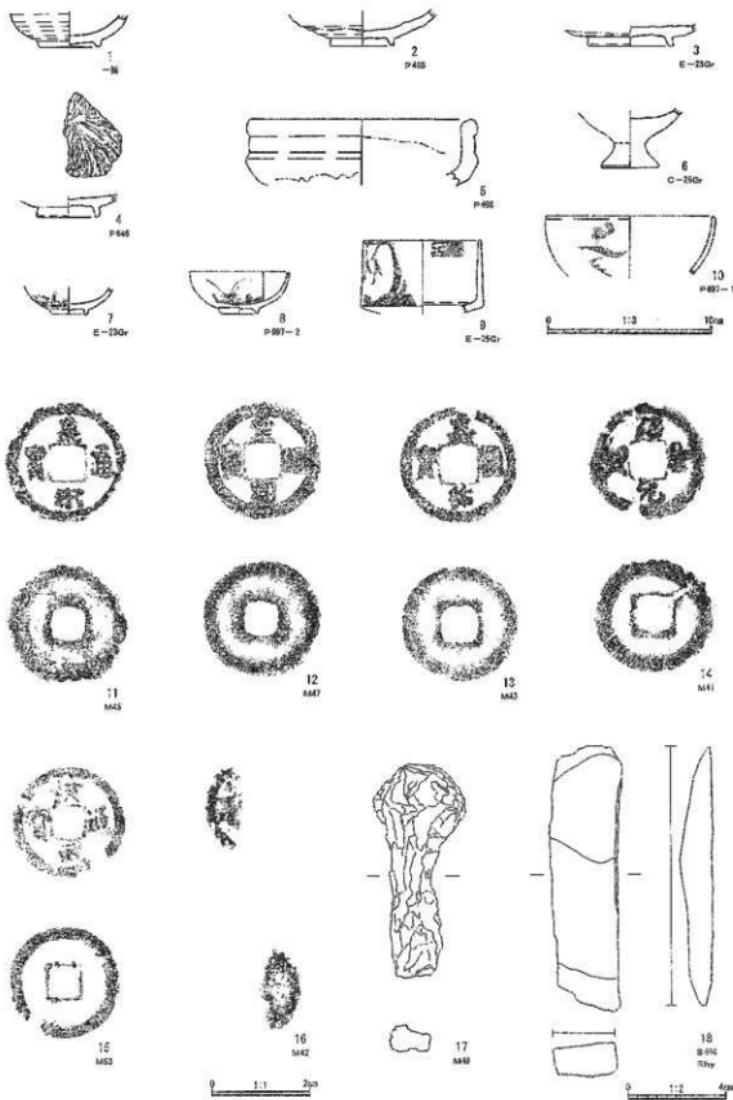


図38 2-2区出土遺物（3）近世陶磁器・金属製品・石製品

参考文献

- 愛知考古学講習会 1988 「(糸浜文系上巻) 文化をめぐる鉢周縁—縄文から弥生—」資料編 I
- 愛知考古学講習会 1988 「(糸浜文系下巻) 文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—」資料編 II・研究編
- 池水正明・谷口雅人・藤澤良祐・松澤和人 1987 「瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI」瀬戸市歴史民俗資料館
- 市川正史・恩田勇・谷口豊 1994 「宮ヶ瀬遺跡IV」神奈川県立埋蔵文化財センター
- 小野真一 1970 「豊東郡長泉町南一色出土の弥生式土器」『駿豆考古』第10号 駿豆考古学会
- 小野正敏・藤澤良祐編 2005 「中世の伊豆・駿河・遠江~出土遺物が語る社会」高志書院
- 金子健一 2000 「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国」『研究紀要第8輯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 甲元真之・山崎鈴男 1984 「弥生時代の知識」考古学シリーズ5 東京美術
- 菊川シンポジウム実行委員会 2005 「静岡県の中世社会」(発表要旨・論考編)
- (財) 愛知県埋蔵文化財センター 1996 「平成7年度 年報」
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 1996 「古戸戸をめぐる中世陶器の世界」
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年企画展図録
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997 「瀬戸・美濃系大窯とその周辺 大懸生産の成立と展開」
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 「江戸時代の瀬戸窯」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2003 「江戸時代の美濃窯」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2004 「江戸時代の瀬戸・美濃窯」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2005 「江戸時代の瀬戸・美濃二窯と名古屋」
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
- (財) 瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2000 「江戸時代のやきもの一生産と流通ー」シンポジウム資料集
- (財) 瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2006 「江戸時代のやきもの一生産と流通ー」企画展図録
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁器 古賀津・伊万里の潮流をさぐる」
- 説楽待己 1995 「東日本における弥生時代の始まり」『闇黙者古学』考古学研究会
- 関俊彦 1985 「弥生土器の知識」考古学シリーズ16 東京美術
- 中世土器研究会 1995 「癡想 中世の土器・陶磁器」
- 突智文土器研究会 1993 「突智文土器から糸浜文土器へ伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まりー」
- 中野晴久 1986 「近世常滑焼における壺の年の研究ノート」『常滑市民俗資料館 研究紀要II』常滑市教育委員会
- 長良町郷土歴史記念館さん委員会 1992 「長良町史」上巻 長良町
- 原茂光・池谷初志 2002 「史跡北条氏郷埋蔵文化遺物I—御所之内遺跡第13次発掘調査ー」並山町教育委員会
- 平井 勝 1992 「弥生時代の石器」考古学ライブラーー64 ニューサイエンス社
- 藤澤良祐 1988 「瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI」瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1983 「瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VII」瀬戸市歴史民俗資料館
- 山川一平・藤澤良祐・山下峰司 1991 「瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要X」瀬戸市歴史民俗資料館
- 弥生土器を語る会 1995 「YAY! (やいっ) 弥生土器を語る会20回到達記念論文集」

第IV章 まとめ

第I節 弥生時代の遺構・遺物について

大平遺跡では、弥生時代前期末に比定される遺構、遺物が発見されており、これは当該期の検出例としては、静岡県東部に限らず県内全域を通してみても稀少な事例と言える。また本遺跡周辺から遠賀川系土器の出土例が報告されていることと併せて、本遺跡の遺構、遺物は注目できると思われる。

そこで本節では、本遺跡で検出された弥生時代前期末の遺構、遺物について若干の考察を行う。

1 検出された遺構

本遺跡から検出された弥生時代前期末の遺構は、第II期現地調査時において4区J-20グリッドで検出された住居1軒（1号住居跡）（図39）である。住居の規模は、一辺が約3.9mで、平面形は円形あるいは隅丸方形を呈する。住居内からは、柱穴の可能性がある小穴11基が検出され、また中央付近では50cm×30cmの炉址も検出されている（註1）。

更上から出土した押圧測量に伴う貝殻状の測片は、石器の製作が行われていたことを示唆し、焼土の堆積が浅いこと、小穴が浅いこと併せると、この住居が定住用というより狩猟や移動の際の一次的なキャンプ地として利用されていたことを推測させる。

また、H-21・J-20グリッドでは、黒曜石製の剥片が半径1mの範囲に集中して出土した箇所が2カ所確認されている（SX03、SX04）。さらに周囲径3mからは、土器と炭化物が集中して出土しており、1号住居の検出状況と類似性が認められることから、これらの遺構についても住居の可能性が指摘されている。

2 出土した遺物

遺物は、第II期現地調査時、上述の1号住居跡から出土した条痕文系の壺形土器、黒曜石製の石鏃及び剥片、輝石安山岩製の石皿、炭化物、黒曜石集中箇所（SX03、SX04）とその周辺から出土した土器と黒曜石製の石鏃及び剥片、そして第III期現地調査において包含層から出土した壺形土器（図26）および黒曜石製の石鏃と楔形石器、火山礫凝灰岩製の磨石、輝石安山岩製の穀器（図27）である。

1号住居で検出された炭化物については、「大平遺跡II」において、AMS法による放射性炭素年代測定を実施している。その測定結果によると、1号住居で検出された炭化物の¹⁴C年代は、2350±25yrBP、歴年代校正値ではcal BC 400を示した（註2）。

（1）壺形土器について

1号住居から出土した壺形土器は、口縁部から胴下部までの約1/3が残存する。口径は約28cmで、口縁部に山形突起、口縁端部に梢円形の押捺が施される。山形突起は4単位が残存し、推定で8単位となる。外面はナデ調整の後、4本単位の茎束状原体による条痕を、口縁部は斜方向、胴部は縱方向に施す。内面は口縁部がミガキ、胴中位がケズリ、胴下位はケズリの後ナデ調整を行う。

包含層から出土した壺形土器は、外面の調整は同様であるが胴部が緩やかに外反する。また、別個体と思われる波状口縁の破片が1点出土しており、少なくとも数個体の壺形土器が出土している。

第III期調査において出土した壺形土器も口縁部から胴下部までの約1/3が残存し、さらに底部の一部も出土した。口縁部から胴部の形状、調整から上記の土器と同様のものと判断できる。しかし、第II期現地調査で出土した土器に比してやや器壁が薄いことや口唇部に違いが認められること、接合関係に

あるものが認められなかつたことから別個体の土器であると考えられる。いずれも弥生時代前期末に比定される縄文時代晚期の冰式土器の流れを引くものである。

(2) 黒曜石製の石鎚・剥片について

1号住居からは、黒曜石製の石鎚と剥片、輝石安山岩製の石皿が出土している。石鎚は飛行機型で、長さ24mm、幅14mm、厚さ4mm、重さ0.5gを計る。欠損は認められない。その他3点の石鎚が包含層から出土しているがいざれも欠損している。

第III期現地調査においても黒曜石製石鎚1点および楔形石器、使用痕剥片、その他石器製作に伴うと考えられる剥片が出土した。石鎚は長さ24mm、幅15.5mm、厚さ6.5mm、重さ1.8gを計り、形態は平面がやや不整な三角形で未製品の可能性が高い。

これらの黒曜石については、独立行政法人沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に蛍光X線による原産地推定分析を依頼した。分析結果の詳細は別表によるが(表20)、第II期現地調査時の包含層出土の石鎚1点を除いて(註3)、全て長野県諏訪星ヶ台群の黒曜石を使用していることが判明した。

3 遺構と遺物から

大半遺跡で検出された住居は、形態、検出状況から狩猟や移動の際の一時的なキャンプ地と推測される。その住居から出土した楔形土器は、長野県小諸市氷遺跡を指標とする冰式土器の流れを引くものである。また、石鎚と剥片類は長野県諏訪地方の星ヶ台群の黒曜石を石材としていた。

黒曜石に注目すると、静岡県東部においては、旧石器時代から縄文時代の遺跡が富士山の南方に位置する愛鷹山南麓に数多く点在する。近年、新東名高速道路の建設に伴って発掘調査が行われ、蛍光X線の原産地推定分析により、当時の石器の製作に関わる人の移動が徐々に明らかにされつつある。黒曜石の入手先については、和田峰、霧ヶ峰、蓼科などの信州系、天城峠などの伊豆半島系、恩恵島などの神津島系、柏崎などの箱根系といった産地があり、各遺跡や時期により出土傾向に特色が認められる。特に信州産の黒曜石は、旧石器、縄文時代を通じて出土量が多く、当地域と信州との関わりの深さを示唆している。石材の人手地である信州と石材の消費地である静岡県東部へのルートは、富士西麓を南北に流れる富士川が想定されている。

一方、条痕文系土器の出土傾向に注目すると、櫻式、水溝平式が主体となって出土するのは、静岡県中部に位置する天王山遺跡(静岡市清水区)あたりを東限とし、東部の山王遺跡(富士川町)では水I式系土器が主体を占め、後続する丸子式の内容に影響を与える可能性が指摘されている(註4)。

また、土器の胎土に含まれる雲母については、在地の土器には類似がなく、丹沢・箱根山系あるいは富士川流域から甲府盆地のいずれかの土地から搬入されたものと考えられるが、本遺跡で出土した弥生土器にも雲母が含まれており搬入品の可能性が高いと考えられる。

さらに、本遺跡から出土した弥生時代の石器の器種は、縄文時代の様相と大きな差違が認められない。長野県においても条痕文系土器の段階では、弥生石器に加えて縄文時代の様相を示す石器が継続して使用されていることが指摘されている(註4)。

こうしてみると、本地域周辺における弥生時代前期の条痕文系土器の出土傾向は、旧石器、縄文時代から続く黒曜石の原産地と消費地の関係に関連があるように思われる。

大半遺跡から出土した黒曜石製の石器と剥片のほとんどが長野県諏訪星ヶ台群であること、冰式の流れをくむ条痕文系土器が出土したこと、胎土に雲母を含む土器が富士川流域からの搬入品である可能性があることは、本地域における該期の人とモノの移動について示唆的であり、少なくとも信州地方との深い関わりを想起させるには十分であろう。

また、1号住居から検出された炭化物の年代測定の結果を併せると、本地域において縄文時代の文化を主体としていた人々の生活が、弥生時代の文化を受容し、移行していくという過程が想起される。このような時期の様子を考える上で、大平遺跡は貴重な一例になったと言えよう。

- 註1 佐野暢彦・水上綾子 2001 「大平遺跡II」 第7回参照
註2 佐野暢彦・水上綾子 2001 「大平遺跡II」 36頁 参照
註3 佐野暢彦・水上綾子 2001 「大平遺跡II」 第9 図-15参照
註4 愛知考古学講話会 1985 「<条痕文土器>文化をめぐる諸問題 資料編I」
図出典 図39 佐野暢彦・水上綾子 2001 「大平遺跡II」 第6 図に加筆・修正

参考文献

- 愛知考古学講話会 1988 「(条痕文系土器) 文化をめぐる諸問題-縄文から弥生-」 資料編I
愛知考古学講話会 1988 「(条痕文系土器) 文化をめぐる諸問題-縄文から弥生-」 資料編II・研究編
小野真一 1970 「駿東郡長泉町尚一色出土の弥生式土器」『駿豆考古 第10号』 駿豆考古学会
設楽博己 1995 「東日本における弥生時代の始まり」『展望考古学』 考古学研究会
間俊彦 1985 「弥生土器の知識」 考古学シリーズ16 東京美術
突帯文土器研究会 1993 「突帯文土器から条痕文土器へ-伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まり-」
長泉町郷土誌増補版編さん委員会 1992 「長泉町史」 上巻 長泉町
平井 勝 1992 「弥生時代の石器」 考古学ライブラリー64 ニューサイエンス社

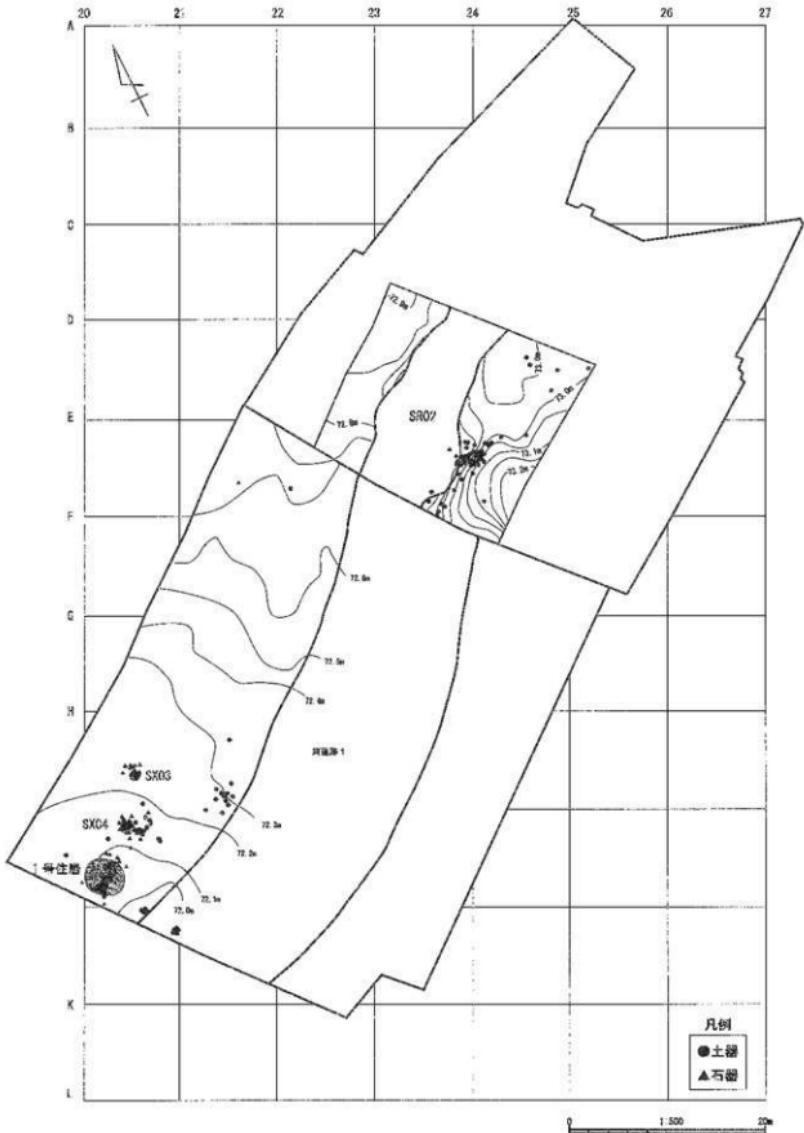


図39 弥生時代 遺物出土状況

表20 黒曜石原産地推定分析結果

分類番号	遺物番号	報告書	博物館	遺物・グリッド	形態	重量(g)	推定産地
SOD-1	S 2	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-2	S 3	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.5	測定不可	測定不可
SOD-3	S 4	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-4	S 5	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-5	S 11	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-6	S 16	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-7	S 17	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-8	S 19	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-9	S 27	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-10	S 28	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-11	S 32	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-12	S 33	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-13	S 34	大平Ⅱ	8-5	S X02	石礫	0.5	測定不可
SOD-14	S 35	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-15	S 37	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.5	測定不可	測定不可
SOD-16	S 39	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-17	S 40	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-18	S 41	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.4	測定不可	測定不可
SOD-19	S 42	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-20	S 46	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-21	S 55	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-22	S 56	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-23	S 56	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-24	S 58	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-25	S 62	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-26	S 65	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-27	S 68	大平Ⅱ	1号住居	調片	米	測定不可	測定不可
SOD-28	S 106	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-29	S 108	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-30	S 115	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-31	S 122	大平Ⅱ	1号住居	調片	0.1	測定不可	測定不可
SOD-32	S 2	大平Ⅱ	8-5	S X03	調片	0.1	測定不可
SOD-33	S 4	大平Ⅱ	8-5	S X03	調片	米	測定不可
SOD-34	S 11	大平Ⅱ	8-5	S X03	調片	0.1	測定不可
SOD-35	S 22	大平Ⅱ	8-5	S X03	調片	0.2	測定不可
SOD-36	S 24	大平Ⅱ	8-5	S X02	調片	0.1	測定不可
SOD-37	S 35	大平Ⅱ	8-5	S X03	調片	米	測定不可
SOD-38	S 43	大平Ⅱ	8-5	S X03	調片	0.1	測定不可
SOD-39	S 1	大平Ⅱ	8-5	S X04	調片	0.1	測定不可
SOD-40	S 4	大平Ⅱ	8-5	S X04	調片	0.2	測定不可
SOD-41	S 5	大平Ⅱ	8-5	S X04	調片	米	測定不可
SOD-42	S 7	大平Ⅱ	8-5	S X04	調片	米	測定不可
SOD-43	S 16	大平Ⅱ	8-5	S X04	調片	0.1	測定不可
SOD-44	S 17	大平Ⅱ	8-5	S X04	調片	米	測定不可
SOD-45	S 18	大平Ⅱ	8-5	S X04	調片	米	測定不可
SOD-46	S 19	大平Ⅱ	9-13	S X04	調片	0.1	測定不可
SOD-47	S 1	大平Ⅱ	9-13	J-20	調片	1.3	測定不可
SOD-48	S 2	大平Ⅱ	9-13	J-20	調片	0.1	測定不可
SOD-49	S 3	大平Ⅱ	9-14	J-20	調片	0.1	測定不可
SOD-50	S 4	大平Ⅱ	9-14	J-20	調片	0.1	測定不可
SOD-51	S 11	大平Ⅱ	9-14	J-20	調片	0.1	測定不可
SOD-52	S 12	大平Ⅱ	9-14	J-20	調片	0.1	測定不可
SOD-53	S 13	大平Ⅱ	9-14	J-20	石礫	0.3	測定不可
SOD-54	S 14	大平Ⅱ	9-14	J-20	調片	0.1	測定不可
SOD-55	S 21	大平Ⅱ	9-15	P-21	石礫	0.4	測定不可
SOD-56	S 22	大平Ⅱ	9-14	J-20	石礫	0.4	測定不可
SOD-57	S 24	大平Ⅱ	9-14	I-20	調片	米	測定不可
SOD-58	S 58	大平Ⅱ	27-2	P-23	標示石	3.4	測定不可
SOD-59	993	大平Ⅲ	27-1	P-23	使用調片	0.5	測定不可
SOD-60	915	大平Ⅲ	27-1	P-23	石礫	1.9	測定不可
SOD-61	529	大平Ⅲ	27-1	P-23	調片	米	測定不可
SOD-62	290	大平Ⅲ	27-1	P-23	調片	1.1	測定不可

80.1kg以下

川上地名	準土地記	分析点数	分析可逆度	測定黒ヶ崎跡	神奈地原跡馬群
1号住居	118	30	30	20	0
S X02	1	1	1	1	0
S X03	46	4	4	4	0
S X04	21	9	5	5	0
グリフ	23	16	14	13	1

※-3が5mm草木が1cm以上の豊富、調片を分析の対象とした

第2節 大平遺跡における中世墓の形態と分布について

大平遺跡では三回の調査で371基の土坑が検出された。既刊の2冊の報告書では遺物を伴った土坑を中世墓として報告し、当該期の墓地として本遺跡の性格を示した。しかし各報告書で述べられているように、全ての土坑を中世墓と断定することは難しい。そこで大平遺跡の土坑について、その形態と遺物の出土状況、分布状況について検討を行うことにより、墓となりうる土坑を抽出し、大平遺跡の中世墓について若干の考察を行いたい。

まず、本遺跡で検出された土坑の中で、墓とした根拠を確認しておきたい。第Ⅰ期現地調査において墓としたのは、骨、銭貨、かわらけ等が出土した土坑である。(註1) 築石を伴うものと伴わないものがあり、築石を伴う土坑については、木村弘之氏が一の谷中世墳墓群遺跡において行った形態分類(註2)に準じている。また遺物を伴わない土坑についても、検出状況から墓の可能性がある土坑として報告されたものがある。第Ⅱ期、第Ⅲ期現地調査も基本的にこの基準に準じている。

1 土坑の形態

大平遺跡で検出された土坑の形態は、築石を作り土坑と作りわない土坑に大きく分けることができる。本遺跡においては、自然礫が散在する河原に構築されている点や後世の削平等により上部構造が不明瞭なものが多い点を考慮した上で、以下の分類を行った。礫を伴う土坑をA～C類、礫を伴わない土坑をD・E類とし、A・Dについてはさらに2つに細分した。

A類 大型の礫が土坑の中央に配されるもの。

A-1類 大型の礫のみが認められるもの。

A-2類 大型の礫の周囲に小型の礫を充填するもの。

B類 磚を充填したもの。

C類 覆土に少景の礫が含まれるもの。

D類 磚を含まないもの。

D-1類 直径1m前後の円形を呈するもの。

D-2類 D-1類以外のもの。

E類 磚を含まないが、大型の礫に近接して構築されたもの。

さらにA-2類及びB類の土坑の規模については、1mを超える大型のものと50cm以下の小型のもの認められる。また築石についても自然礫を使用するものと破碎礫を使用したものが認められる。

大平遺跡で検出された土坑371基の内328基を検討の対象とした(註3)。上記の形態に分類した内訳は表21の通り、A-1類は6基、A-2類は9基、B類は34基、C類は68基、D-1類は44基、D-2類は133基、E類は34基である。第Ⅲ期の各土坑の形態については遺構計測表(表6・9・15・16)を、過去二回の調査については表22を参照されたい。

2 土坑の形態と出土遺物について

本遺跡で検出された土坑328基中、遺物を伴っていたものは全部で48基あり、遺物が出土した土坑が全体に占める割合は14.6%である。遺物の種類と遺物を出土した土坑の数、全体に占める割合については以下の通りである。

骨が出土した土坑は16基(4.8%)、銭貨が出土した土坑は6基(1.8%)、かわらけが出土した土坑は

21基 (6.4%)、陶磁器などが出土した土坑は14基 (4.2%)、覆土に炭化物を含んでいた土坑が12基 (3.6%) であった。

上述の形態分類において遺物が出土した土坑の数の割合は、A-1類が6基中0基 (0%)、A-2類が9基中5基 (55.5%)、B類が34基中15基 (44.1%)、C類が68基中11基 (16.1%)、D-1類が44基中8基 (18.2%)、D-2類が133基中2基 (1.5%)、E類が34基中7基 (20.6%) であった。

また出土遺物の内訳は、A-2類は銭貨4点、かわらけ2点、その他(陶器など)4点。B類は銭貨13点、かわらけ4点、その他9点。C類はかわらけ3点、その他2点。D-1類はかわらけ9点。D-2類は人骨1点、炭化物1点。E類は銭貨5点、かわらけ3点、その他1点であった。

土坑の形態と遺物について概観すると、B類において遺物の出土が最も顕著に認められ、続いてC類で多く認められた。またA-2類は検出数が少ないものの約半数において遺物が出土しており、遺物を伴う確率が高かった。一方、A-1類からは1点も出土しておらず、D類についても遺物を含まないものがほとんどであった。C類については『大平遺跡』において報告されているように、B類の上部構造が流出した可能性もあることから、総じて墓が充填されている形態の土坑で遺物の出土割合が高いと考えられる。

統いて遺物の種類に注目すると、A-1類以外の全ての土坑から骨・歯牙が出土しており、特にA-2類とE類で出土割合が高かった。また、かわらけも同様に、A-1類以外の全ての土坑から出土した。割合もほぼ同様の傾向であるが、B類でやや高い割合を示している。銭貨についてはC類、D類において出土が認められなかった。A-2類、B類、E類では骨・銭貨・かわらけがセットで出土した土坑が認められた。

3 土坑の形態と分布状況について

『大平遺跡』『大平遺跡II』で述べられたように、本遺跡は、黄瀬川とその支流によって形成された地形に立地しており、東西に長い調査区内には数段に渡る段丘面、段丘崖、旧河道面が認められる。ここでは土坑の形態と地形との関係について確認したい。

まず、形態に関わらず、多くの土坑が段丘面に等高線に沿って帯状に構築されているという特徴が挙げられる。特に、A-2類、B類、E類については2~5基程度の土坑が、段丘面の緩やかな傾斜地のほぼ同一等高線上に集中する傾向が顕著に認められ、そのまとまりがさらに幾つかの大きなグループを構成しているように思われる。

ただし、A-2類については2-1区西側や3区東側に見られるように単独で営まれるものも存在する。B類とE類については1-1区南側、2-1区北西側、3区北東側に多く分布しており、分布傾向が類似しているという特徴が取扱われるが、4区東側にはB類のみが集中する箇所が認められる。

C類は1-2区北側や2-1区北西側のように集中する箇所、2-1区西側のように散在する箇所、3区北東側のように少数ではあるが連続して営まれる箇所に分かれそうである。

D-1類は散在して構築されており、1-2区(註4)のように河道にも分布している点に特徴がある。D-2類は数基が集中して構築される。

4 大平遺跡の中世墓

本遺跡で検出された土坑は、遺物の出土が少ないとや検出状況が明確でない点から、全てを墓と断定することは難しい。しかし、これまでに行なった検討から判断すると、A-2類、B類、E類については、遺物等の出土が認められない土坑についても墓である可能性が高いと思われる。またC類についても、B類の上部構造の流出を考慮すると墓の可能性があり、特に上述の1-2区北東側、2-1区北

西側、3区東側に分布するものについてはその可能性が高いと指摘できよう。一方D-1類については、周辺の遺跡において指摘されているように、墓よりはむしろ農業用施設等、異なる用途を想定すべきであろう。

D-2類については遺物が出土したものは墓とし、遺物を出土していないものについても、I-1区でB類・E類に近接して営まれているものは墓の可能性が高いと考えたい。

以上の検討から、ここでは墓とする土坑をA-2類・B類・E類とし、C類及びD-2類の一部としておきたい。さらに墓とした形態の分布状況を考えると、墓地として利用されたエリアは単独に営まれるものもあり全てを網羅できないが、I-1区南東、I-2区東～2-1区西端、4区東、3区北東の4つのエリアに分けられることも指摘しておきたい。(註5)

次に本遺跡で検出された中世墓について検討を加えたい。まず形態の差異についてであるが、一般に埋葬方法の違い、年齢差、時期差、階層差等が想定される。

墓として用いられた場合、火葬と土葬が想定されるが、土坑の規模が小さい点、炭化物の出土が多い点、火葬施設と考えられる遺構が検出されている点等から、本遺跡の集石墓はその多くが火葬骨を納めていたと思われる。しかし2-1区で検出されたB類の土坑(SX21011)からは火葬骨と土葬と考えられる歯牙が出土しており、一部では土葬も行われていたことが窺われる。

浜松医科大学法医学教室の分析によれば、火葬骨は青年、歯牙は15歳から20歳前後の青年と成人男性の2体分の可能性が指摘されており、同一の土坑においても火葬と土葬という違った埋葬方法が行われたことが分かる。また3区のC類(SX3001)から出土した歯牙は、20歳前後の女性と5～10歳ほどの子供の可能性が高く、この2体は土葬されたようである。一方、別のC類からは火葬骨が出土しており、同形態の土坑においても土葬、火葬の両方の埋葬方法があったことが分かる。骨の出土数が少ないので断定的なことは言えないが、A-2類・E類からは火葬骨のみが出土しており、両類は火葬という埋葬方法に限定されていた可能性がある。

年齢差についても、既述した通り、20歳前後の女性と5～10歳ほどの子供、青年と成人男性という埋葬状況から判断すると、形態によって明らかな差違は認められないようである。

時期差については遺物を参考にしてみたい。本遺跡出土の陶磁器は、第Ⅲ期現地調査においてはI-1区、2-2区ともに古瀬戸後IV期に出土のピークが認められた。2-2区においては古瀬戸前期から中期の遺物が出土しており、錢貨は淡米錢が中心であるのに対し、I-1区では寛永通寶が多く出土する等、包含層出土の遺物については出土傾向に若干の相違が認められた。しかし、墓から出土した遺物については、ほぼ全ての形態において15世紀後半から16世紀にかけての在地のかわらけが出土しており、形態の差違が明確な時期差を示しているとは言い難い。

また、遺物を出土している墓が少なく、出土していても内容的には貧弱であることから、明確な階層差もないといえよう。

こうした墓の形態差が、埋葬方法、性別、時期、階層といった違いを明確に示していないことは、むしろ同時期において異なった埋葬形態を採用する集団が存在していた可能性を想起させる。具体的な例を挙げるならば、Iエリア、IIエリア、IVエリアではA-2類、B類、E類の3つの形態のまとめが認められる。特にII・IVエリアでは同一形態のものが2～3基直接して構築されている様子が認められ、集団が選択した埋葬形態と集団の規模を具現しているのかもしれない。またIIエリアのB類では、集石の下部に炭化物及び人骨が出土する大型の土坑を有する例が多く、同じB類でもIIIエリアでは遺物が全く出土していない小型の土坑が用いられているという違いも認められ、形態のみならず、埋葬方法にも集団間での相違があったことを示している。

最後に大平遺跡の中世墓について簡単にまとめておきたい。本遺跡が墓地として利用されたのは、出

上したかわらけの年代観から15世紀後半から16世紀である。墓の分布状況から4つのエリアが墓地として利用されていたと考えられる。墓は後世の割平等による形状の変化はあるものの、集石墓（A-2類・B類・C類）と土坑墓（D-2類・E類）の2種類が造られていた。

埋葬方法は集石墓も土坑墓も火葬を主体にするものの、一部は土葬と考えられるもの、さらには火葬と土葬が併用されているもの（複数遺体の同一墓坑埋葬）の3種類が認められた。副葬品の量は極めて少量で、かわらけの他、鏡貨や陶磁器があったが明確な階層差を示すものではなく、当該期の庶民の墓と考えるのが妥当であろう。

黄瀬川の河岸段丘上という立地条件や、複雑な層位、また後世の割平等から検出状況が不良だったものもあり、本遺跡における中世墓群の全容を明らかにはできなかったかもしれない。しかし、3回の調査を総括することにより、従来明確ではなかった駿東地域における中世墓を考える上で貴重な事例になったと言えよう。

註1 鈴木 誠 1958『大平遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 162~166頁

註2 木村弘之の中世墓の形態分類は以下の通りである。

① 築墓…盛土によって塚を築いた墓。

② コの字形区画墓…コの字形の溝によって区画した墓。

③ 土坑墓…土葬墓といわれるもので、地面を掘りくぼめ、遺体を埋葬した墓。

④ 集石墓…石を積んでつくった火葬墓。

⑤ 地下式墓…地下に竪穴を掘り、底面からさらに横に掘り広げて地下室を築いた墓。

⑥ 穂を持った墓…墓標を立て、下部に造体、遺骨を埋葬した墓（墓標は主に石塔を指す）。

さらに集石墓については以下の五形態に細分類している。

I類 織石（区画石）を有し、平面形が方形または長方形をなす。

II類 織石（区画石）はないが、方形または長方形をなすように石が並べられたもの。

III類 縫石（区画石）ではなく、形状も不整形で石が集積しただけのもの。

IV類 小穴を穿って竹筒墓を埋葬しただけのもの。

V類 小穴に火葬骨を埋葬しただけのもの。

註3 通過2回の調査で報告されず、様相を把握できなかったものや明らかに近世に所属し用途が異なるものは対象から除外した。

註4 ここでは第三期調査のI-I区と区別するため、第1期調査でI区とした調査区をI-2区とする。

註5 それぞれIエリア・IIエリア・IIIエリア・IVエリアとしておきたい。

参考文献

土井久益編 1979『葬送墓制研究集成』 第5巻

木村弘之 1997 「中世墓の體積と変遷」『静岡県における中世墓』

(財)静岡市埋蔵文化財センター 1994『駿海の中世墓』

土井卓治・佐藤米司編 1979『葬送墓制研究集成』 第一巻

山崎克巳・木村弘之・伊藤美鈴・加藤恵子 1993『一の谷中世墓群調査』碧田市教育委員会

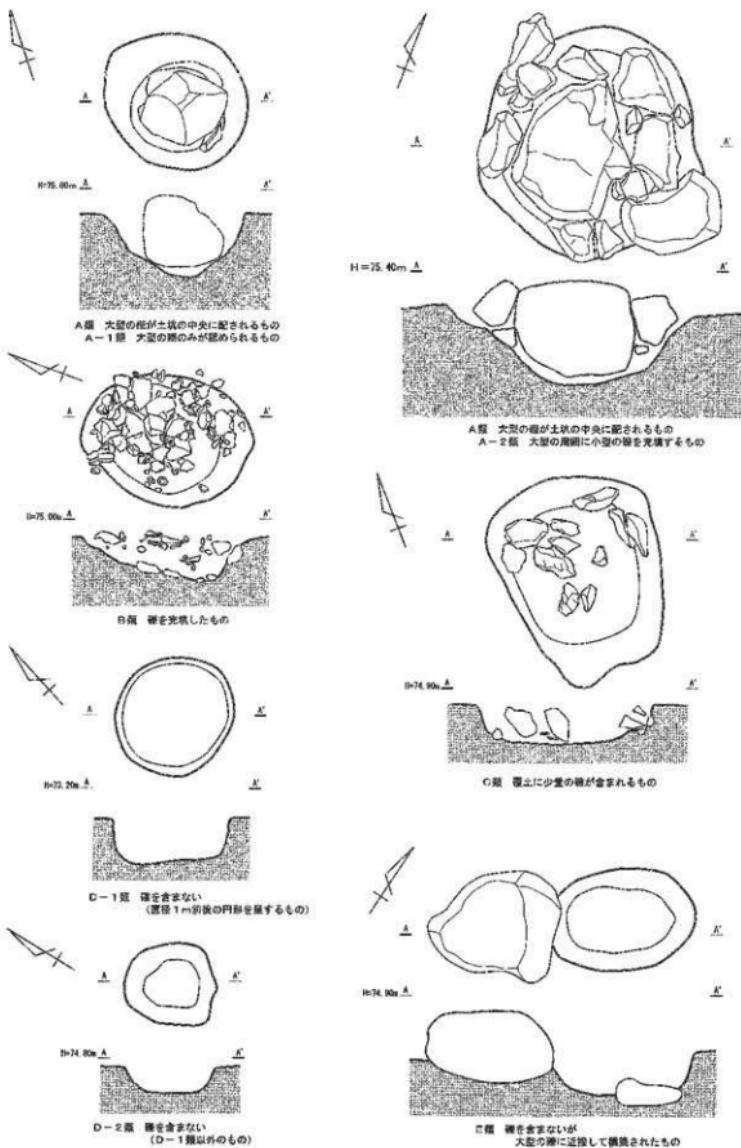


図40 大平遺跡検出の土坑の形態

表21 土坑集計表

区	上坑数	A-1期	A-2期	B期	C期	D-1期	D-2期	E期
I区	42	3(7.1)	0	0	21(50.0)	4(9.5)	14(33.3)	0
I-1区	117	2(1.7)	2(1.7)	6(4.3)	3(2.6)	5(4.3)	82(70.0)	17(14.3)
2-1区	85	0	4(4.7)	13(15.3)	37(43.5)	3(3.5)	17(20.0)	11(8.7)
2-2区	21	0	0	0	4(19.1)	13(61.9)	4(19.0)	0
2-3区	5	0	0	0	0	3(60.0)	2(40.0)	0
3区	28	1(3.9)	3(11.5)	6(23.1)	3(11.5)	0	7(26.0)	6(22.1)
4区	32	0	0	9(27.3)	0	16(50.0)	7(21.9)	0
計	328	6(1.8)	9(2.7)	34(10.4)	68(20.7)	44(13.4)	133(40.5)	34(9.2)

()内は土坑数に占める各形態の割合

各形態において遺物が出土した上坑の数と種類

上坑数	遺物出土地点数	人骨(歯を含む)	鉄質	かわらけ	その他	炭化物
A-1	6	0	0	0	0	0
A-2	9	5(55.5)	2	1	2	3
B	34	15(44.1)	2	2	4	9
C	68	11(16.1)	5	0	3	2
D-1	44	8(18.2)	0	0	9	0
D-2	133	2(1.5)	1	0	0	1
E	34	7(20.6)	6	3	3	1
計	328	46(14.6)	16	6	21	14

()内は土坑数に占める各遺物出土上坑の割合

各形態の土坑から出土した種類・かわらけ・その他の遺物の点数

上坑数	遺物出土上坑数	該便	かわらけ	その他
A-1	6	0	0	0
A-2	9	5	2	4
B	34	12	13	4
C	68	5	0	3
D-1	44	8	0	9
D-2	133	2	0	0
E	34	4	6	1
計	328	36	22	15

区	地圖番号	層級	形状	面積(m)	分類	植物	報告書	詳細
3	S X3002	IV	圓んだ円形	1.05	0.84	B 常緑・葉化物	火平I 第56回	
3	S X3033	IV	圓んだ円形	1.11	0.84	B 常緑・葉化物	火平I 第56回	
3	S X3013	IV	不規則丸い形	4.40	4.25	A - 2 開墾・傷害片・人骨	火平I 第56回	
3	S X3191	IV	円形	0.70	0.50	B 常緑・葉化物	火平I 第56回	
3	S X3194	IV	不規	1.20	1.10	B 常緑	火平I 第56回	
3	S X3001	VI	楕円形	(1.25)	(0.33)	A - Z 薙・鉢販(周元過度・虫糞過度・元素過度・葉鉢元販)かわらけ	火平I 第64回	
3	S X3026	VII	椭丸方形	0.54	0.54	B 樹化物	火平I 第69回	
3	S X3037	VII	方形	0.54	0.50	C 骨格・樹化物	火平I 第69回	
3	S X3041	VII	不齊椭円形	2.00	(1.30)	B 四石	火平I 第69回	
3	S X3188	VII	椭円形	1.12	0.80	C かわらけ・葉化物	火平I 第69回	
3	S X3192	VII	椭円方形	2.25	2.20	H 人骨・鉢販(周元過度)	火平I 第69回	
3	S X3193	VII	不規椭円形	4.25	2.07	D - 2 浪化物	火平I 第69回	
3	S X3195	VII	不規則円形	1.56	1.20	C 骨格・葉化物	火平I 第69回	
3	S F3001	IV	圓形	0.90	0.77	B	火平I 第70回	
3	S F3019	IV	圓内形	0.80	0.55	A - 2	火平I 第70回	
3	S F3016	VII	不齊圓内形	0.88	0.74	D - 2	火平I 第70回	
3	S F3005	VII	圓形	0.86	0.54	E	火平I 第70回	
3	S F3042	VII	椭丸三角形	1.38	0.97	A - I	火平I 第70回	
3	S F3044	VII	不規三角形	1.15	0.90	E	火平I 第70回	
3	S F3045	VII	椭圓形	1.40	1.00	H	火平I 第70回	
3	S F3143	VII	円形	0.73	0.66	B	火平I 第72回	
3	S F3145	VII	椭圓形	1.30	0.84	D - 2	火平I 第72回	
3	S F3173	VII	不規形	0.75	0.67	D - 2	火平I 第72回	
3	S F3174	VII	不規丸方形	0.92	0.55	D - 2	火平I 第72回	
3	S F3190	VII	椭圓形	1.60	1.30	D - 2	火平I 第73回	
3	S F3197	VII	小椭形	1.50	0.66	D - 2	火平I 第73回	
4	1号裏	註	不明	1.20	1.05	H 根茎(品種度・固有度・大きさ度・根の度数・元素度・鉢度・周元過度)かわらけ	火平II 第1回	
4	2号裏	註	椭圓形	0.69	0.75	かわらけ	火平II 第1回	
4	3号裏	註	椭圓形	0.80	0.60	火平II 第1回		
4	4号裏	註	椭圓形	1.05	0.90	火平II 第1回		
4	5号裏	註	不明	0.70	0.55	B 根茎(品種度・周元過度・大きさ度・根の度数・元素度・周元過度)かわらけ	火平II 第1回	
4	6号裏	註	不明	0.90	0.75	B 火平II 第1回		
4	6号裏b	註	不明	0.75	0.55	B 火平II 第1回		
4	7号裏	註	椭圓形	0.90	0.88	H	火平II 第1回	
4	8号裏	註	椭圓形	0.77	0.70	B	火平II 第1回	
4	S P1	註	円形	1.22	1.10	D - I	火平II 第2回	
4	S P2	註	円形	1.15	1.04	D - I	火平II 第2回	
4	S P3	註	円形	0.58	0.56	D - I	火平II 第2回	
4	S P4	註	円形	0.60	0.58	D - I	火平II 第2回	
4	S P5	註	円形	1.00	1.04	D - I	火平II 第2回	
4	S P6	註	円形	1.02	0.92	D - I	火平II 第2回	
4	S P7	註	円形	0.88	0.94	D - I	火平II 第2回	
4	S P8	註	円形	1.12	0.98	D - I	火平II 第2回	
4	S P9	註	円形	1.11	1.04	D - I	火平II 第2回	
4	S P10	註	円形	0.73	0.68	D - I	火平II 第2回	
4	S P11	註	円形	0.92	0.82	D - I	火平II 第2回	
4	S P12	註	楕円形	0.98	0.92	D - I	火平II 第2回	
4	S P13	註	椭圓形	0.62	0.51	D - I	火平II 第2回	
4	S P14	註	円形	1.02	1.00	D - I	火平II 第2回	
4	S P15	註	円形	0.90	0.82	D - I	火平II 第2回	
4	S P16	註	円形	1.15	1.00	D - I	火平II 第2回	
4	S P17	註	椭圓形	0.54	0.30	D - 2	火平II 第2回	
4	S P18	註	椭圓形	0.92	0.80	D - 2	火平II 第2回	
4	S P19	註	椭圓形	0.46	0.35	D - 2	火平II 第2回	
4	S P20	註	円形	0.70	0.52	D - 2	火平II 第2回	
4	S P21	註	円形	0.44	0.36	D - 2	火平II 第2回	

注 各区の五十枚の検出部位については「人平選路II」を参照。

あとがき

本書の作成にあたっては多くの方々にご指導、ご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

(敬称省略 五十音順)

池谷初恵 市原壽文 片桐英生 加藤芳郎 水上綾子 望月明彦

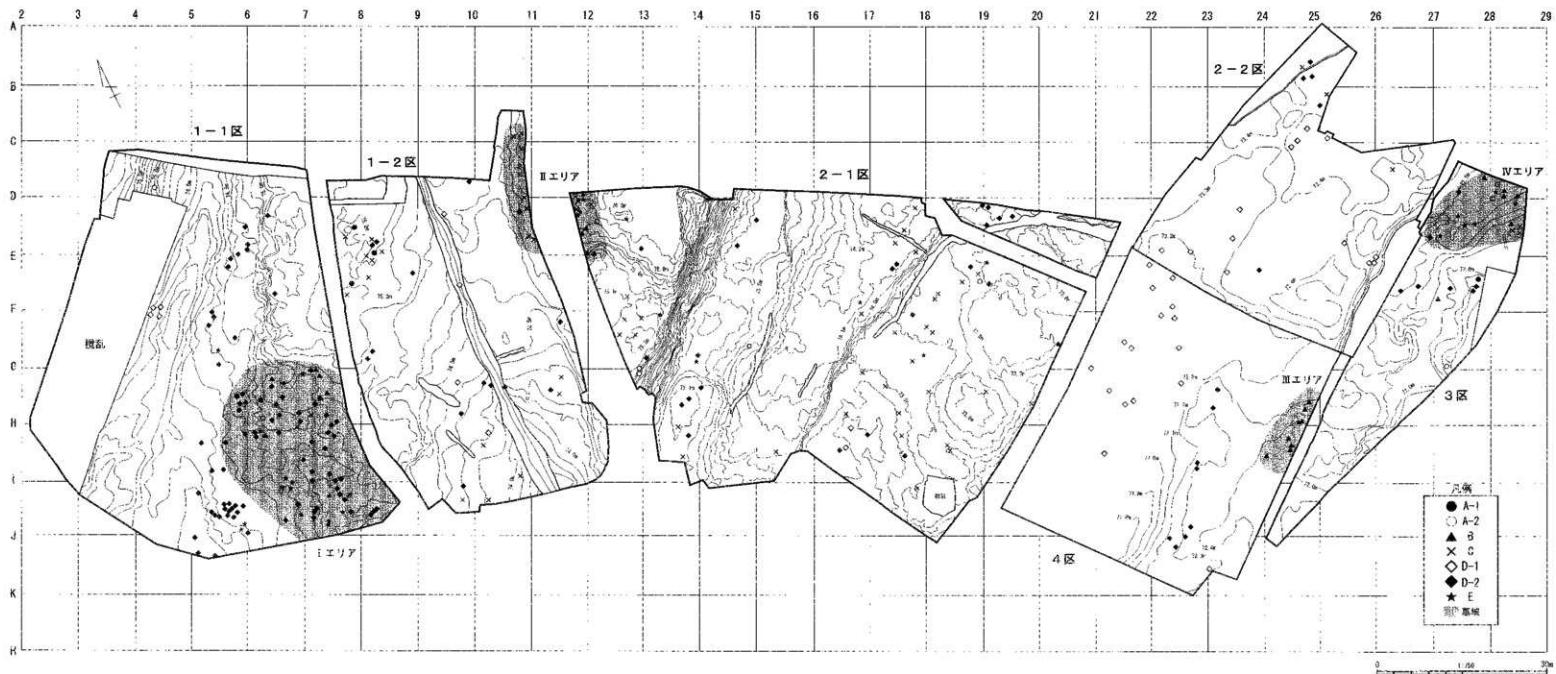


図41 大平遺跡 土坑分布図

写真図版

図版1

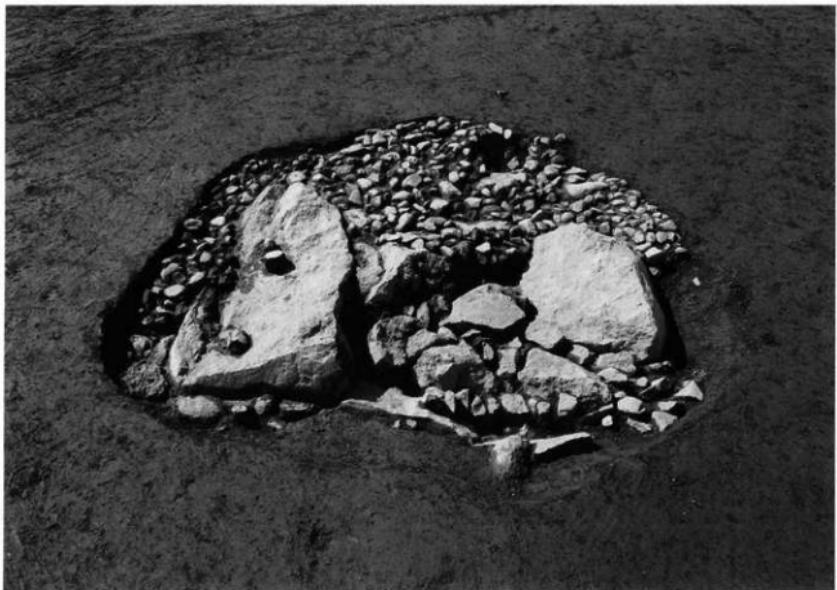


調査区全景（合成写真）

図版 2



1 1-1区 調査区全景（南より）



2 SF101検出状況（東より）



1 SF 105検出状況（北より）

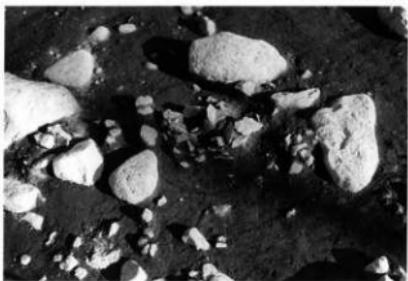


2 SF 104検出状況（北より）

図版 4



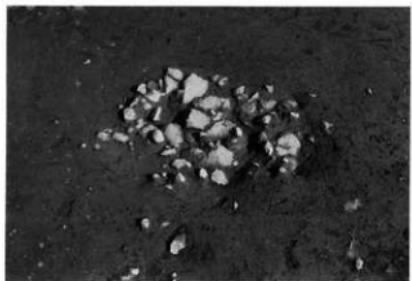
1 SF 108検出状況（北東より）



2 SF 106検出状況（北より）



3 SF 105・SF 106完掘状況（西より）



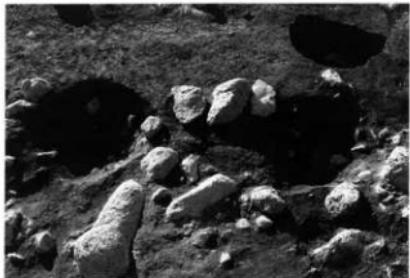
4 SF 114検出状況（西より）



5 SF 222検出状況（南より）



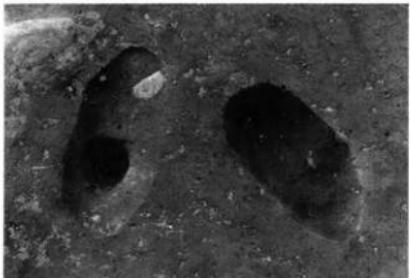
1 SF223検出状況（南東より）



2 SF222・SF223完掘状況（東より）



3 SF201・SF202・SF234・SF235完掘状況（南東より）



4 SP212・SP213完掘状況（東より）

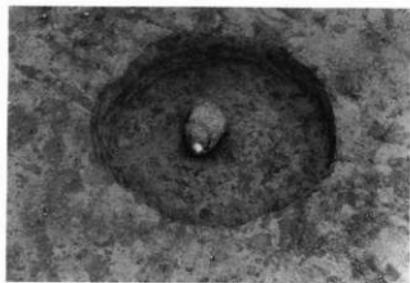


5 SX204完掘状況（北より）

図版 6



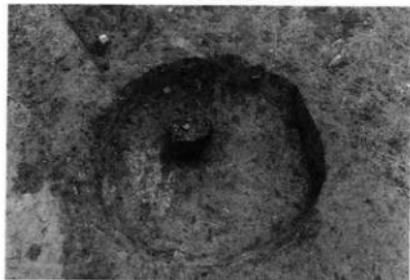
1 2-2区 調査区全景（西より）



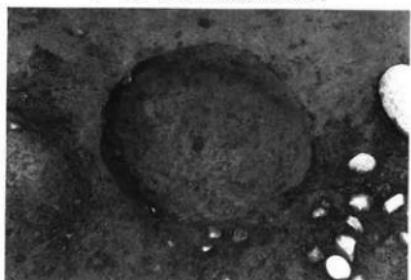
2 S F 285完掘状況（南より）



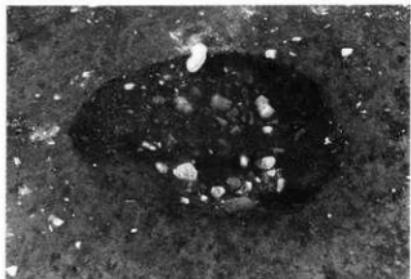
3 S F 289完掘状況（東より）



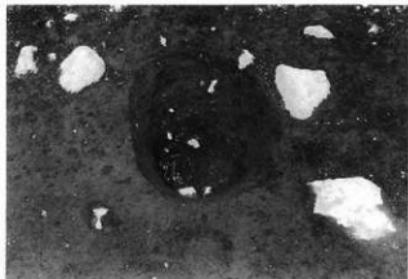
4 S F 292完掘状況（北より）



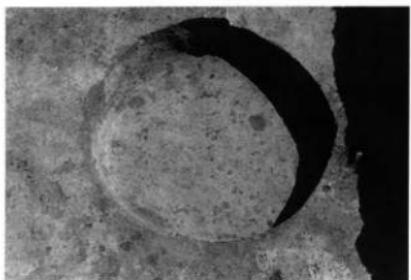
5 S F 293完掘状況（南西より）



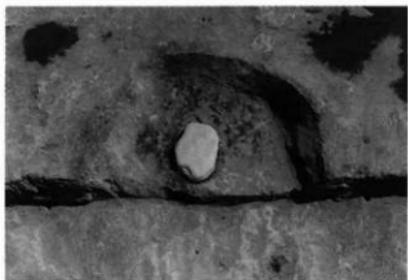
1 SF 284完掘状況（南より）



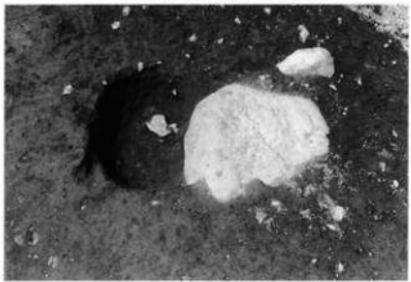
2 SF 298完掘状況（南より）



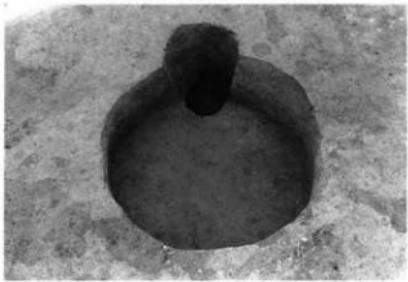
3 SF 299完掘状況（西より）



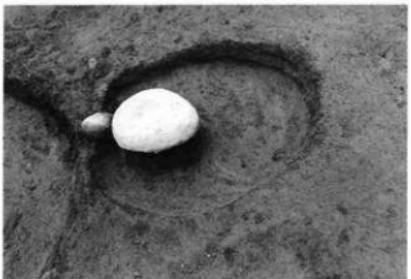
4 SF 300完掘状況（南西より）



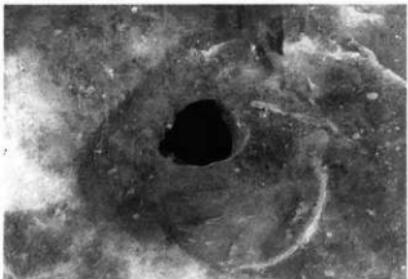
5 SF 301完掘状況（南東より）



6 SF 296・SP 221完掘状況（西より）



7 SP 217完掘状況（南東より）

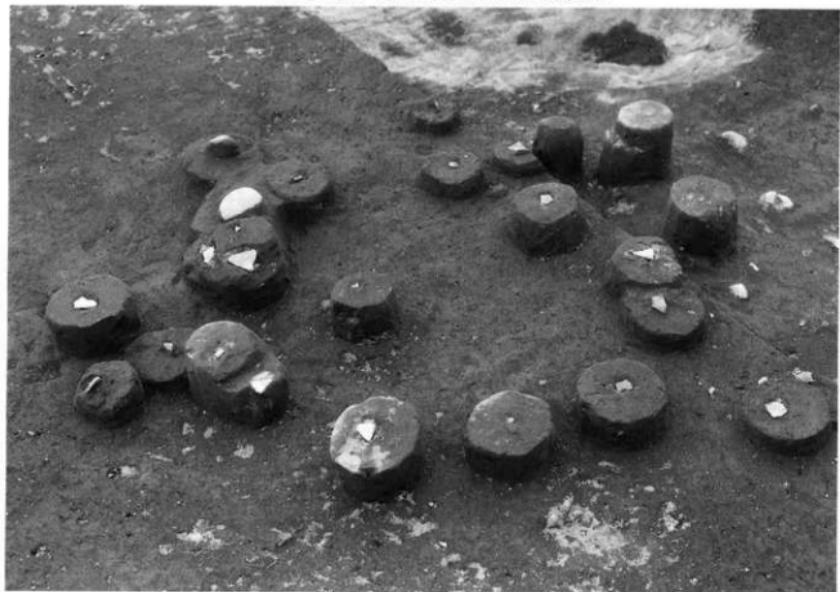


8 SP 222完掘状況（南より）

図版 8

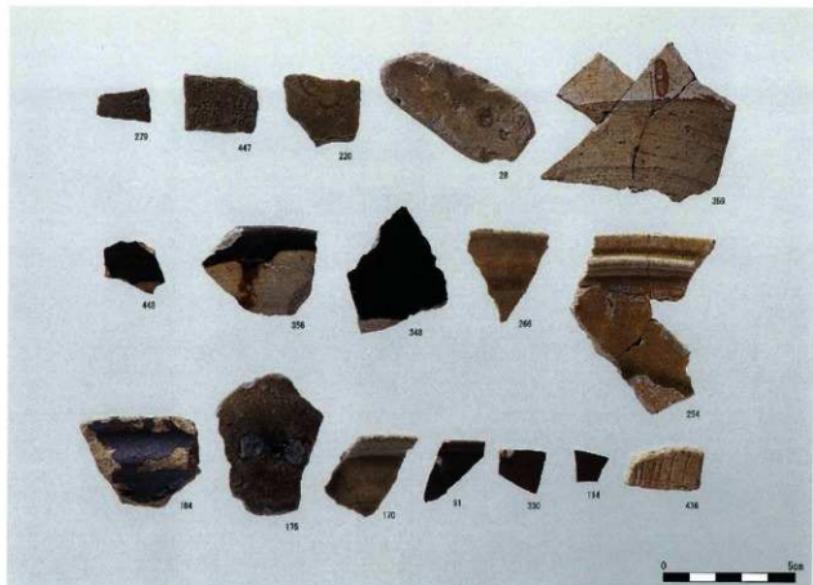


1 弥生土器等 遺物出土状況（1）（東より）

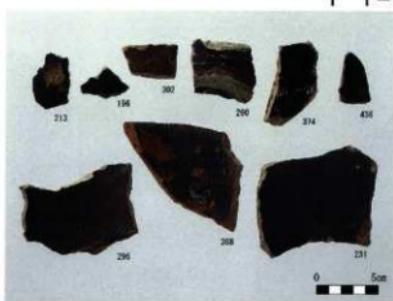


2 弥生土器等 遺物出土状況（2）（北より）

図版9 1-1区



1 1-1区 古瀬戸



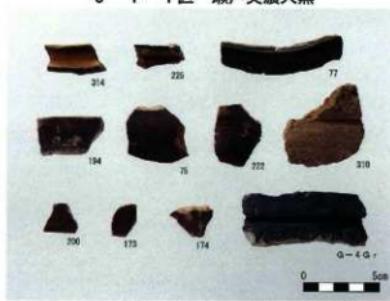
2 1-1区 古瀬戸擂鉢



3 1-1区 瀬戸美濃大窯



4 1-1区 志戸呂

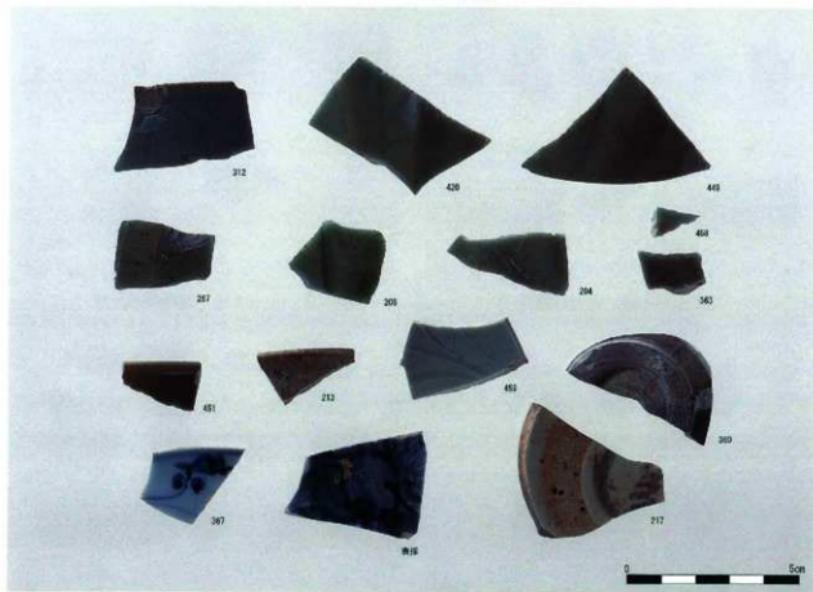


5 1-1区 羽釜・内耳鍋・瓦質陶器

図版10 1-1区



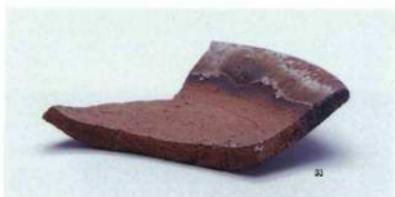
1 1-1区 常滑



2 1-1区 貿易陶磁器



1 1-1区 古瀬戸縁釉小皿



2 1-1区 志戸呂縁釉小皿



3 1-1区 かわらけ



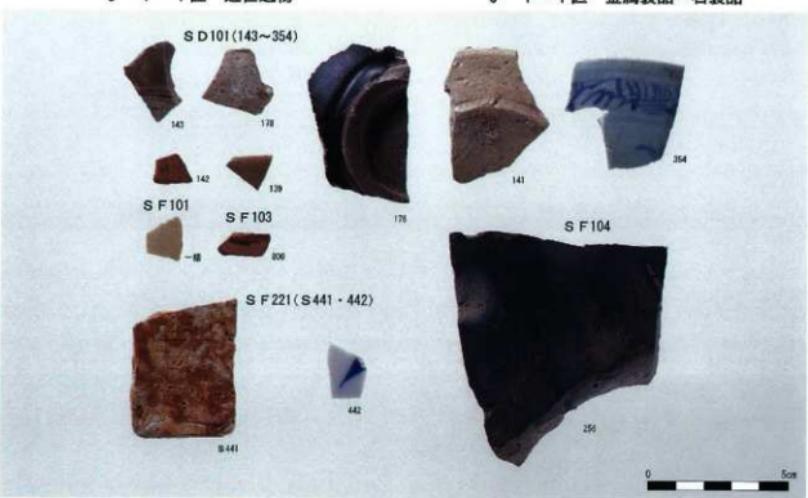
4 1-1区 灯明皿



5 1-1区 近世遺物



6 1-1区 金属製品・石製品



7 1-1区 遺構出土遺物

図版12 2-2区



0 5cm

1 2-2区 弥生土器(1)



0 5cm

2 2-2区 弥生土器(2)



542地

3 2-2区 弥生土器(3)



6912

4 2-2区 碟器



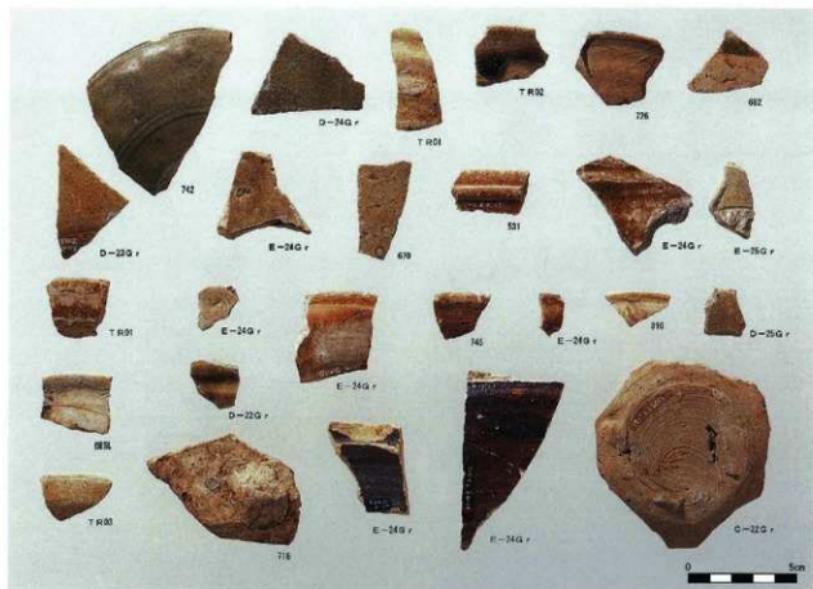
5 2-2区 石鏃・楔形石器



6921

6 2-2区 磨石

図版13 2-2区



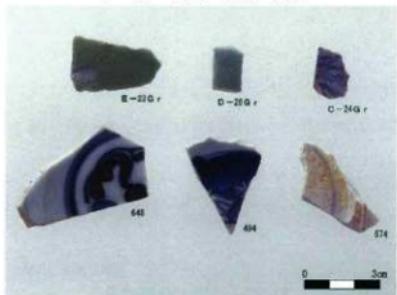
1 2-2区 古瀬戸



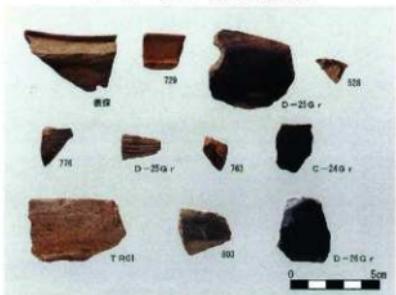
2 2-2区 古瀬戸擂鉢



3 2-2区 瀬戸美濃大窯



4 2-2区 貿易陶磁器



5 2-2区 羽釜・内耳鍋・瓦質陶器

図版14 2-2区



1 2-2区 常滑



2 2-2区 かわらけ (1)



3 2-2区 かわらけ (2)



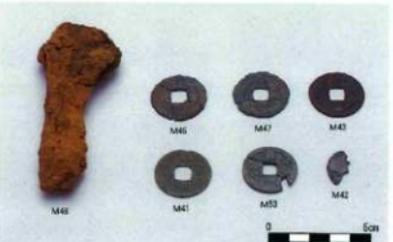
4 2-2区 かわらけ (3)



5 2-2区 かわらけ (4)



6 2-2区 近世遺物



7 2-2区 金属製品

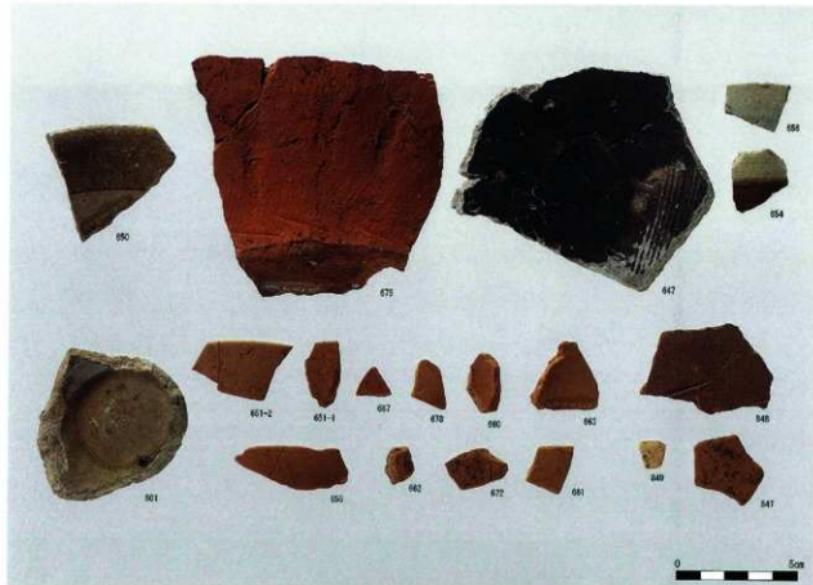


1 2-2区 SR03出土遺物 (1)

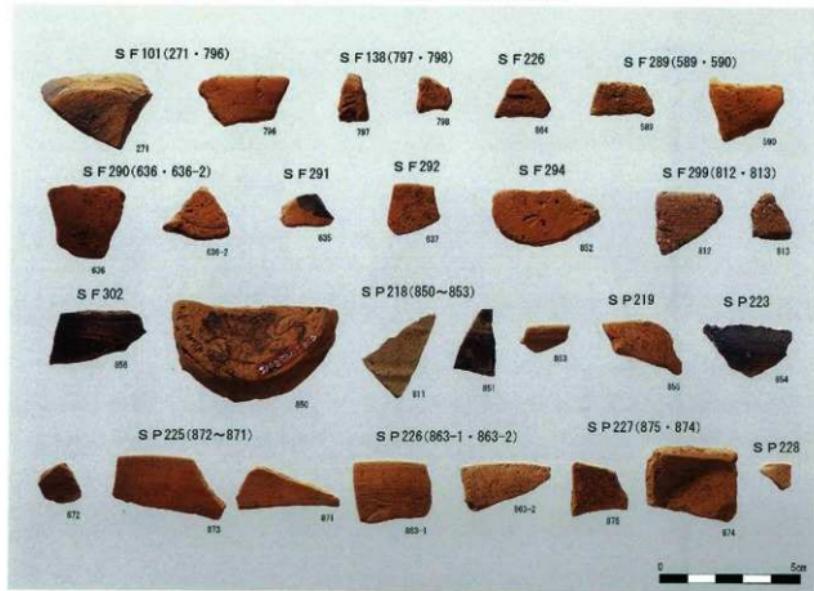


2 2-2区 SR03出土遺物 (2)

図版16 2-2区



1 2-2区 SR04・SR05出土遺物



2 2-2区 遺構出土遺物 (SF・SP)

報告書抄録

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第198集

大平遺跡Ⅲ

平成16・17年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月27日

発行所 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒420-8002

静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL (054) 262-4261代

FAX (054) 262-4266

印刷所 松本印刷株式会社
〒421-0303

静岡県榛原郡吉田町片岡2210

TEL (0548) 32-0851代

